

宗教が語る世界の平和

ONE THING IS CLEAR: MORALITY FOUNDED ON ABSOLUTE STANDARDS OF PURITY, UNSELFISHNESS AND LOVE, HONESTLY SOUGHT, WITH A HEART TUNED TO THE INNER SPIRIT OF CONSCIENCE, IS THE ONLY ADEQUATE BASIS FOR WORKING TOGETHER TO MEET THE NEEDS OF OUR TIME. IT IS THIS CONVICTION WHICH HAS BROUGHT US TO OUR HISTORIC MEETING AND IT IS ONE WHICH WE BELIEVE CAN ILLUMINE THE PATH AHEAD FOR ALL MANKIND.

アジアから人類へのメッセージ



INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN
(社)国際MRA日本協会 編

宗教が語る世界の平和

ONE THING IS CLEAR: MORALITY FOUNDED ON ABSOLUTE STANDARDS OF PURITY, UNSELFISHNESS AND LOVE, HONESTLY SOUGHT, WITH A HEART TUNED TO THE INNER SPIRIT OF CONSCIENCE, IS THE ONLY ADEQUATE BASIS FOR WORKING TOGETHER TO MEET THE NEEDS OF OUR TIME. IT IS THIS CONVICTION WHICH HAS BROUGHT US TO OUR HISTORIC MEETING AND IT IS ONE WHICH WE BELIEVE CAN ILLUMINE THE PATH AHEAD FOR ALL MANKIND.

アジアから人類へのメッセージ



INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN

(社)国際MRA日本協会 編

協調的な世界を築くための道義的精神的基盤

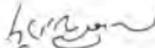
人類の発展と文明に独自の貢献を果たしてきた、四大宗教を背景に日本に会した私達は、アジアの声を一緒に発信するものである。この声とは、人の魂は精神的な糧によってのみ養われるという、人の幸福の根本に関する真理である。

物質主義に根ざした社会哲学は、昨今その誤りが指摘されてきている。もはやこうした考え方で、人の必要を満たす社会の建設には役立たない。今や、民族や国家間の和解は急を要し、道義的精神的課題となっている。こうした状況にも拘らず、道義的精神的成長の機会を抑えようとする試みが存在することは極めて遺憾である。

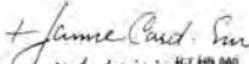
21世紀を目前にした今、物質主義の哲学では、ダイナミックに成長を続ける地球社会が抱える挑戦や可能性に対応できないことは、一部の人々を除いては明らかであろう。今必要なのは、融和と思いやりのある社会を築くために新たな歩みを始めようとしている世界において、私達の生きた信仰の共通項をいかに活かしていくか、ということである。

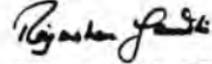
こうした人類の要請に応えるべく、幾多の困難な時代を通して、国際連合のような世界的機関の活動も増大をみてきた。勿論、未たになされるべきことは少なくない。今後の最大の課題は、人の優れた創造的資質が自由に発揮され、個人や国のレベルでの利己主義を抑制できる新しい社会的、政治的、経済的文化的創造に、宗教がどのように貢献できるかにある。

良心の声に従い、正直、純潔、無私、愛という絶対的な基準に根ざした道徳を共通の基盤にすることによって、異なる宗教を背景に持つ私達が時代の要求に向かって手を携えて歩んでいけるというこの確信こそが、私達をこの意義深い会合に集わせたのであり、全人類の未来を照らすものであると信じるものである。


ダライ・ラマ14世


イナムラ・カーン博士


ハイメ・シン 枢機卿


ラジモハン・ガンジー 上院議員

MORAL AND SPIRITUAL FOUNDATIONS FOR A CO-OPERATIVE WORLD

We come from four great faiths which in distinctive ways contribute richly to human achievement and civilisation. In Asia, together, we represent a special voice, and together we make one basic point fundamental to the welfare of mankind: the spirit of man can only be nourished by spiritual food.

Social philosophies grounded in materialism are being exposed as fraudulent. No longer is it credible to maintain they offer a key to the building of societies serving the needs of all. There is now an urgent need to build reconciling relationships between people and nations. This is a moral and spiritual task. Against this background, it is a sadness to observe that there are many efforts still being made to limit the opportunities for spiritual and moral growth.

Standing as we do at the threshold of the twenty-first century, it is now clearly manifest to all, except for the most stubborn, that materialist philosophies, wherever they belong, are too small-minded to encompass the range of human challenge and opportunities of an expanding and dynamically changing world society. The question we must now consider is how the essential ingredients of common cause in our living faiths can be registered in a world ready for a fresh effort to build co-operative and caring societies.

Great progress has been made in these difficult years in raising world institutions such as the United Nations dedicated to serve this deeply-felt aspiration. Much remains to be done. For us there is the question: how can our faiths contribute to new social, political and economic cultures which can liberate man's highest creative qualities and reduce the accent on selfish endeavour, both personal and national?

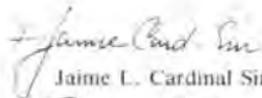
One thing is clear; honestly sought, morality founded on absolute standards of purity, unselfishness and love, with a heart tuned to the inner spirit of conscience, is the only adequate basis for working together to meet the needs of our time. It is this conviction which has brought us to our historic meeting and it is one which we believe can illumine the path ahead for all mankind.



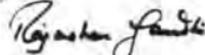
H.H. The 14th Dalai Lama



Dr. Inamullah Khan



Jaime L. Cardinal Sin



Sri Rajmohan Gandhi

一、冷戦後の世界平和の鍵を握るアジア

東西冷戦の時代が終わり、世界各地で緊張緩和や和平の兆しが見られる一方で、人種や民族、宗教の違いによる対立が各地で相次いで起こっています。

ことにアジアにおいては、インド、パキスタン、インドシナ諸国などのように旧宗主国からの分離独立によって対立要因を受け継いだ国々、中国、台湾、韓国、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）、かつての南北ベトナムのように冷戦によって分断された国々に加えて、フィリピン、スリランカ、マレーシア、インドネシア、ミャンマー（ビルマ）などのように民族や宗教の違いによる紛争や対立に悩む国々も少なくありません。人権抑圧も含めてアジアは緊張緩和の流れから取り残されたかの感があります。

これまで人を抑えつけてきた軍事力やイデオロギーや国家による締めつけが緩むにつれて、個人のアイデンティティや信条に関わる対立の増加が世界的傾向であり、これを解決するに

は、従来の政治、経済、外交面などの対応とは異なる次元での、人の考え方や生き方そのものに関わるアプローチが必要ではないでしょうか。

その意味では、世界の四大文明や四大宗教、多くの聖人や預言者が、紛争や対立を多く抱えたこのアジア大陸で生まれているのは不思議な巡り合せです。宗教の助けや救いを最も必要としたのがアジアなのか、それとも、せっかくの真理を活かせずにきたのがアジアなのか、といった議論はさておき、今人類共通の課題となりつつある、人種や民族、宗教間の対立を和解へと転ずる鍵がアジアにありそうなのが予想されます。

二、「平和の発展途上大陸アジア」の反転攻勢

その問題多きアジアにあつて、自らの立場を越えた融和や共生を、平和的に実現しようとする行動している世界的な精神指導者四名の存在に気がつきました。四名に共通する「あくまで行動する非暴力を貫き、寛容と忍耐をもって和解に尽くす」というアプローチこそ、様々な紛争や対立を越えて平和と新秩序をもたらす普遍的な答えにつながるのでは、という問いかけからです。宗教は異なるものの、生きた信仰に裏打ちされた四名に共通する行動哲学とモラルが、アジアを越えて全人類を結ぶ橋渡しのように思われました。こうした方々を先頭に、「平和の発展途上大陸アジア」による平和実現への反転攻勢をかけよう、という大胆な発想でした。

この四名を日本に招き、こうした動きを日本から世界に発信することによって、共産化も、植民地化もされず、戦後「平和の受益者」としての恩恵を受けつづけた日本が、「平和への貢献者」へと転換を果たす一助にしようとの思いもありました。

四名の方々に個別にお会いしてこの構想を説明すると、全員が即座に快諾して下さいました。直前に来日できなくなったダライ・ラマ十四世も、ビデオ・インタビューによって参加できることをとりわけ喜んで下さいました。そのビデオと他の三名がカルテットを組んで日本の各界の方々と対話を行いました。本書は、東京におけるシンポジウムを中心に、その発言をまとめたものです。

三、波長のぴったり合ったカルテット

これまで一堂に会したことのなかった三名は、来日以来、まるで長年活動を共にしてきた同志のようになごやかなチームワークで多くの方々に接して下さいました。関西経済連合会、大阪商工会議所、関西宗教人グループ、世界宗教者平和会議(WCRP)日本委員会、外国人特派員協会、記者会見、経済団体連合会と続いた会合では、その都度まずダライ・ラマ十四世のビデオが上映され、それを補完するように三名の話が続きました。

さらには、「このイニシアチブは、今回が始まりで、今後も続けていくべきだ」という声が

これらの方々の口からたびたび聞かれました。実際、この延長として去る三月二日インドのデリーにおいて、ダライ・ラマ十四世とラジモハン・ガンジー上院議員を囲んでインド人民党（ヒンズー教至上主義政党）を含む各政党の議員、シーク教徒、イスラム教徒、アッサム人、ナガ族、ハリジャン（不可触民）を含むインド国内の地域紛争の当事者と、インドと緊張や小ぜりあいの続くパキスタン、スリランカ、バングラデシュ、ネパール、ミャンマー（ビルマ）という主な隣接国の代表が一堂に会して、南アジアの和平のための対話が開かれました。

四、人類共通のモラル（道義）に基づく平和な世界作り

四名の指導者が「宣言文」（一、二ページ）の中で述べたように、新しい時代は人類に共通するモラル（道義）と価値基準（ものさし）を求めています。MRA (Moral Re-Armament: 道徳再武装) は、第二次大戦を目前にした一九三八年に、軍拡競争に明け暮れる世界を「軍備だけでなく道義と精神の力によって再武装」することが世界平和への道である、とするフランク・ブクマン博士の提唱で始まりました。これは、ワシントン軍縮会議（一九二二年）を傍聴した博士が、「いかに優れた平和計画も人の心を変えないかぎり無意味である。対立する相手や社会や国を変えるには、先ず自分の国、そして自分が変わることであり」と感じたことにより、MRAは、それ以来あらゆる民族、文化、宗教にも共通するモラル（道義）を基盤にし

た、相互信頼作りや問題解決の触媒の役割を世界的なスケールで進めてきました。

EC成立の前提となった戦後の独仏の和解、黒人・白人各派の和解によるジンバブエの無血独立、各国の少数民族や先住民と多数派住民との橋渡し、深刻化する貿易摩擦や地球環境問題解決への対話などに取り組んできました。昨年の世界大会（スイス、コー）にも対立関係にある東欧の諸民族、カンボジア各派、ユダヤ人とパレスチナ人、南アフリカの黒人と白人などが一緒に参加して問題解決の糸口を探りました。

日本においても、MRAの国際的ネットワークは、戦後の国際社会復帰や、周辺諸国との和解や賠償問題の解決に貢献しました。現在も、様々な対外摩擦を抱える日本が、自ら変革をとげて対外関係の改善がはかれるよう、きめ細かな橋渡しや交流を行っています。ブツクマン博士の「一国の最も確かな防衛は、隣接諸国の尊敬と信頼を受けることにある」、「日本はアジアの灯台に」という言葉は、日本が多くの分野で世界に貢献することが求められている現在、ますますその意味を増しているといえましょう。

今回のシンポジウム開催を可能にしていただいた出席者、後援をいただいた文部省、大阪府、大阪市、大阪商工会議所、関西経済連合会、NHK、ジャパンタイムズ、協賛をいただいた五〇余りの関係団体、そして「土曜フォーラム」でシンポジウムを放映していただいたNH

K及びNHKエデュケーショナルの各位に、この場を借りて深く御礼を申し上げます。そして、より多くの方々にこの素晴らしい内容を伝えたいという主催者の願いに賛同して、この出版にご協力下さいました松下電器産業株式会社山下俊彦相談役、フィリピン在住の西本至神父、PHP研究所松本道明編集長、同第一出版部の中沢直樹の各氏に心からの感謝を申し上げます。

平成四年三月十日

社団法人 国際MRA日本協会

会 長 住友義輝

専務理事 藤田幸久

宗教が語る世界の平和 ● 目次

— アジアから人類へのメッセージ

第一部

世界の平和は心の平和から

● 宗教を越え、
ナシヨナリズムを越えて

第一章 未来の世代のための世界平和を……………ダライ・ラマ十四世……………17

人間らしい思いやりと愛の心を 19

世界平和に欠かせない宗教間の協調 22

非暴力の道をつらぬいてきた日本独自の役割と責任 24

第二章 平和は良心と連帯の産物……………マニラ大司教 ハイメ・シン枢機卿……………29

平和は神からの賜物という現実からの出発 31

人間の本源にたちかえることが、世界平和への道 34

全人類は一つという視点にたつ見返りのない援助が必要 36

平和を確立するための二つのアプローチ 38

平和への内面的なアプローチ(良心の育成) 40

平和への外面的なアプローチ 43

「平和は連帯の産物である」 45

平和実現のためのビジネス界の役割 47

人の尊厳と卓越性を重んじる原則 48

仕事の人的価値と資本に対する労働の卓越性 50

ビジネスの目標は利益の追求だけであってはならない 52

投資の倫理的・道徳的側面 53

「人間生態系」の保護と推進 54

第三章 死んだ平和でなく生きてきた平和を……世界イスラム協議会事務総長 イナムラ・カーン博士…… 57

すべての宗教が調和を求める 59

平和と安全保障の両方が必要 62

イスラム教の共存の精神と平和主義 64

高まる世界的不安 67

相互依存と分かち合いの世界 70

第四章 祖国愛から人類愛へ……………ラジモハン・ガンジー上院議員……………85

これからの十年がアジアの未来を決する 73

平和の創造者としての日本の役割 76

新しい歩みをはじめた日本と世界 80

世界宗教の発祥の地アジアで数限りない紛争を起こしてきた 87

『マハーバーラタ』の真髄をヒンズー教徒は理解していない 88

世界平和への普遍的な倫理とは 90

自分が傷つくと思うことを他人にしてはならない 92

今こそマハトマ・ガンジーの教えが求められている 93

世界は一つに結ばれている 96

共産主義とナシヨナリズムの共通点 98

アジアの果たすべき役割とは？ 102

ヒンズーの包容力が幸福な未来をつくる礎に 104

日本ならではの良さをアジアに輸出してゆく 106

日本は世界の友に 108

第五章 世界平和は一人ひとりから…………… 111

「和を以て貴しとなす」に秘められた意味とは…………… 四天王寺管長 瀧藤尊教…………… 113
戦争の原因は私にあった…………… 一燈園同人 石川 洋…………… 118
日本人、英国人、中国人への…………… 高等教育推進協会会長 サレハ夫人…………… 125
謝罪を通して得た平和……………

第二部

「日本の役割、日本への期待」 ● アジアそして世界への
貢献をどう考えるか

- バネリスト・ハイメ・シン イナムラ・カーン
- コーディネーター・樺山紘一
- ラジモハン・ガンジー 石原俊 曾野綾子

平和と新秩序のあり方を問う

132

人権と人類の調和としての人の尊厳

138

与えられた人権に値する行動を

141

アジア人自らが招いた民族対立

144

- 世界の平和と安定と日本の役割 147
- アジア人と言える日本人 153
- 神への愛が問題解決の基本 161
- アジアとアジア人を考える 164
- 与えることの喜び 168
- 人権とは普遍的なものである 172
- 世界への恩返しとしての日本の貢献 174
- 和解と架け橋作りこそが人権の最大の擁護 176
- 平和は、一人一人が良心に基づいた役割を演じれば達成できる 180
- オスカーワイルドの短篇から人権を考える 183
- 次代を創る「子供の権利」こそが必要 186
- 企業が人権について考えるべきこと 187
- 良心の声に従い、共通の道徳基準を基盤に 189
- 一人ひとりの責任とお互いの連帯 191
- 祖国愛から人類愛へ 193
- まず身近なアジアに人類愛としての援助を 196
- 今、平和のために何をなすべきか 200

第一部

世界の平和は心の平和から

—— 宗教を越え、ナシヨナリズムを越えて ——

第一章 未来の世代のための世界平和を

ダライ・ラマ十四世

(チベット人・仏教)



ダライ・ラマ 14 世

1935 年生まれ。4 歳で転生によるダライ・ラマ 14 世として即位。50 年中国軍のチベット侵入。54 年毛沢東との和平交渉失敗。59 年インドに亡命。88 年欧州議会にて「中国と共に」自治民主チベット建設を謳う和平案提案。89 年この非暴力的努力に対しノーベル平和賞受賞。他宗教との交流、地球環境保護にも努力を傾けている。

人間らしい思いやりと愛の心を

物質的には進歩した現代、私たちは依然たくさん問題に直面しています。しかし、これら問題のいくつかは私たち人間がつくりだしたもののなのです。「これほど科学や技術が進歩したのに、どうしてこんなに問題が多いのだろうか？」という疑問がおきます。それは、こうした問題をつくりだしたのは私たち自身だからです。とくに西欧の科学と技術は現代文明、文化にたいへん大きな影響を与えました。しかし、この文明は少し物質の方に重きがおかれすぎているように思われます。しかも、この傾向は強くなる一方のようです。

科学や技術は、人間の内面の魂、内面の成長とバランスをとりながら利用されるかぎり、それ自体はたいへんよいものです。科学・技術と内面の魂、この二つが手をたずさえていけば、ものごとは好ましい方向へ進みます。しかし内面の成長、魂の成長のないところでは、近代技術は人間自身を滅ぼしかねないものとなります。

外面の進歩と内面の進歩とが歩調を合わせていかなくはなりません。私たち人間は機械でつくられたものではありません。もし機械でつくられたものだとしたら、人間の要求もまた、すべて機械がかなえてくれるはずで、つまり私たちはどこかほかのところから来たのです。物質

的要求が満たされるだけでは不十分なのはそのためです。なにか別のものがもっとほしいのです。それは精神性でしょう。

十九世紀から今世紀のはじめまで、物質さえ十分に供給されれば人間の問題はすべて解決すると信じられていました。幸い今日、科学的、物質的進歩はこれほどまでの高水準に達しました。それでも、物質的な進歩だけでは人間のかかえる諸問題への完全な答えにはなっていないことがいまや明らかになっています。

物質だけでなく、内面の成長も、また重要なのです。内面の成長というのは、思いやり、許しの心、愛など、人間の基本的な好ましい性質のことです。あなたが神を信じているか否かはいたいした問題ではありません。私たちに必要なのは人間らしい愛と思いやりです。これはとても大切なものです。人間の本来の性質は、根本的にはおだやかで、攻撃的なものではありません。それは理想主義だと言われるかもしれませんが、人間の本性がもしも殺しあい攻撃しあうことだとすれば、人類はすでに滅んでいたのではないでしょうか。

戦争をし殺しあう人たちよりもずっと多くの人たちが、互いに助けあい愛しあい慈悲の心を持っていたからこそ人類は生き延びてきたのです。ですから、もう少し努力すれば、私たちは内面の魂を変えることも、より好ましい精神、好ましい考え方を育むこともできるのです。

もっと思いやりの心を持つことができれば、あなた自身が幸福になるだけではありません。

おのずと周囲に愉快的な空気がかもしだされて、隣人、友人、それに鳥やほかの動物までが楽しくなり、みんなに幸せがおよぶのです。

思いやりと愛とは人間が存在し、存続していくための土台です。思いやりを實踐することは宗教の問題ではなく、私たち自身の存続と未来とがかかった問題なのです。とても大切なことなのです。

東洋というと、私は、一種違ったタイプの哲学、つまり心あるいは内面世界とつながりをもった哲学を思い浮かべます。一方、西洋というと、進んだ社会——科学、技術によって発展した社会のイメージがすぐ心に浮かびます。内面世界の平和、内面の幸福、成長という問題では、東洋の哲学ならではの役割があると思います。私たちアジア人は人類に貢献するなんらかの力を秘めていると思います。

私たちは他人の役に立つ前に、絶えず自分自身を点検しなくてはなりません。MRA (Moral Re-Armament: 道徳再武装) の大切な実践の一つに「セルフ・チェック」、自己点検があります。一人一人が変わること、まず自分自身が変わることが大切というわけです。西洋、少なくともヨーロッパ大陸ではこの四十年の間、比較的に平和が保たれています。ヨーロッパは、過去には戦争で数多くの苦しみをなめました。今は違いますがほんとうの平和が育ちつつあります。

世界平和に欠かせない宗教間の協調

たしかに私たちのアジア大陸に目を転じますと、依然、たくさんの紛争が目に入ります。しかしアジアには長い伝統と豊かな文化遺産があります。したがって人類に貢献する力は持っています。ただ私たちに欠けているのはこの豊かな伝統を日々の生活に生かすことです。

世界平和は誰もが考える問題です。永続的な、ほんとうの平和は相互信頼の上に育てられなくてはなりません。この信頼を育てる土台は、人間的な思いやり、許しの心、愛です。心が憎しみに満ちた人が世界平和を望んでも、それは無理です。真の世界平和をつくりだすにはまず内面の平和が必要です。それ以外に永続的な、ほんとうの平和をうちたてる道はありません。

なんととっても私たちが人間は同じもの、同じ人類家族の兄弟、姉妹です。私たちが住むところはこの惑星の上しかありません。したがって、よりよい人類社会、よりよい人類家族、よりよい世界をつくる責任は人間一人一人のものであります。今日、人間は、過去の経験から学んだ結果、より大人になっています。いまや、人間の魂と思いやりの上にたったこれまでとは違った新しい道を考えるべきときです。ここに世界の諸宗教は特別の責任を持っています。だからこそ異なる宗教の協調が不可欠となるのです。



残念なことに、過去において、また現在でさえ、宗教の違いが人類に紛争・分裂をもたらしています。しかし、世界の主要宗教をよく見れば、たしかにそれぞれの哲学は異なっていますが、思いやり、許しの心、愛というもつとも大切なメッセージは共通しています。この共通の土台に立てば、すべての宗教は共存し、また協力することができます。いま、さまざまな宗教が人類に貢献するという一つの目標に向かって進むべき時代が訪れています。ですから、私は、異なる宗教の指導者が一堂に会するこの会議でお話しすることを、とりわけよろこばしく思います。

今日、世界は新しい時代に入ろうとしています。対話をとおして紛争を解決するのが大切だ、と誰もが考えています。これは希望のもて

る状況です。たしかに世界中のあちらこちらに問題はありますが、全体として状況は、はるかに希望のもてるものになりました。すでに、核兵器廃絶、軍縮が人々の口にのぼっています。きわめて好ましいきざしといえるでしょう。戦争の無意味さ、イデオロギー対立の空しさを強く意識し、さまざまな民族同士の紛争を乗りこえて、人類が和解を目指すときが来しました。こうした機運の高まったいまこそ、平和を願うすべての人々は、せつかくのチャンスのをがさず、フルに活用すべきです。

非暴力の道をつらぬいてきた日本独自の役割と責任

このシンポジウムが開かれる日本では、豊かな伝統とあらゆる近代的設備とが共存しています。これはすばらしい組み合わせです。精神性を土台とした古い伝統と近代的科学技術のモニュメントとの共存です。

しばしば感ずることでありますが、さまざまの苦しみ、困難を克服して、日本は物質的に高度の発展をとげました。近代科学とテクノロジを高度に発展させたと同時に、仏教の影響を受けた豊かな伝統と古い歴史を持っています。この物質と精神の二つが結びつくことはきわめて大切です。古くからの豊かな伝統は直接、内面の平和につながっています。この伝統を無視するな

ら、心の平安、心の平和は失われるでしょう。表面は豊かでも、心の奥には多くの不安が宿るでしょう。文化の保存が重要なのはこのためです。とはいっても、仏教に根ざした文化はお寺の中にしまっておくだけではいけません。この豊かな伝統を心のなかに生き生きと息づかせなくてはなりません。いま、日本がその努力をしなければ、この良き伝統は失われてしまうかもしれません。

そこで、先ず大切なことは内面の軍縮ではないでしょうか。つまり、憎しみ、猜疑心、恐れを減らすことです。次に、外面の軍縮が必要です。全世界から兵器を一掃するという究極の目標にむかつて、一歩一歩進みましょう。兵器が減り、さらに最終的には生産されなくなれば、この地球が平和になるだけでなく、環境問題も改善されます。

日本は平和に貢献する大きな底力を持っています。ですから、私はきわめて楽観的です。私の知るかぎり、日本では、他国に兵器を売ることを禁じています。また、軍隊を海外に派兵することも厳しく禁じてきました。こうしたことはたいへん正しい、賢明なことです。現在生まれている新しい状況においても、対応を変える必要はないでしょう。日本が軍事装備を輸出しないできたという事実は非常に大切な点です。

武器をビジネスにするのは無責任であり危険である、と私は機会あるごとに言っています。アフガニスタン、レバノン、南米などで罪もない人々を殺している武器は、みな外国製です。

他人に武器を売って得た金で生活を楽しんでいる人々の気持ちだが、私にはとても理解できません。それは恐ろしいことです。だからこそ、日本のしていることには意義があります。日本がこれを堅持、継続すべきであるのはもちろん、世界が見習うべきことなのです。日本は高度に発達した技術を持っています。アメリカその他の国の友人に私は冗談めかして言います。

「日本は武器を売らず、時計、カメラ、ビデオなど非暴力的な品物を売って金持ちになったのだ」

これはよいことです。日本は技術的に高度に発展した国でありながら、厳しく非暴力の道を守っています。経済的には未来に大きな可能性を秘めています。

最近気づいたことですが、日本の人々は、暴力に訴えない、ということが日本独自の役割、自分自身への責任だと自覚しているようです。しかしそれにとどまらず、世界の他の地域に平和をもたらすという、より大きな役割をも考えているように思います。日本がもつと多くの貢献を果たすことを希望し、またそれができると信じます。

もちろん、世界平和は現在のためだけでなく、未来の世代のためのもでもあります。より健全な環境も未来の世代に残さなくてはなりません。こうしたことについては、すべての人間が責任を負っています。科学者、政治家、法律家など、それぞれの分野に応じて責任があります。ビジネスマンにも独自の役割があるのは当然です。たいへんに重い責任があります。

私はいつもこう説明します。人間社会では、さまざまな人々がさまざまな分野で活動しています——科学、技術、宗教、政治、軍事、経済など。これらの仕事はみな、基本的な人間的感情、人間の幸福とつながっていないければなりません。つながっていても、基本的な人間的感情から切り離されたものはダメになります。たとえ宗教でも、この感情から切り離されたときは悪しきものとなります。

それは、たとえてみれば、手の指のようなものです。指は手のひらとつながっているから役にたつので、そこから切り離されてしまったら使えません。おなじように、すべての人間の活動は、強力なこの人間的感情のもとでコントロールされなければなりません。

このように、ビジネスマンもまた人間社会の重要な一部であり、独自の役割を担っているのです。

第二章 平和は良心と連帯の産物

マニラ大司教

ハイメ・シン枢機卿

(フィリピン人・キリスト教)



ハイメ・シン枢機卿

1928年生まれ。父親は中国人。日本軍占領下、死刑の危険を冒しても米軍放送を聴いた勇気の少年。59年ロハス市の大学卒（教育学）。74年マニラ大司教区教区長。76年最年少の枢機卿に指名。86年大統領選で民主勢力一本化を支援、ピープル・パワーの精神的支柱としてマルコス政権打倒の無血革命を成功に導く。

平和は神からの賜物という現実からの出発

平和に関する議論では、どうしても現状でのマイナス面ばかりを見てしまい、悲観的になりがちです。というのも、現代社会は敵意や争いごと、不和に満ち、暴力や物欲、権力がはびこっていることを私たちはつねに目のあたりにしているからです。残念なことに、この世界は未
来に向かつてより深い和解へと歩んでいるのではなく、多くの勢力が対峙たいじしながら危険かつ複雑化していくことがあまりに多いからです。

そういう中でこそ、私はキリスト教の希望の精神に基づく世界平和への取り組みをすべきだ
と思います。希望といっても、単なるナイーブな楽観主義ではなく、人類の歴史の中で起こる
様々なできごとの基盤にある現実^{じじつ}に根ざしたものでなければなりません。

いま、このような希望の兆し^{めがかり}が世界中で芽生えはじめています。まったく予想もできなかつ
たところからも多くの芽が顔を出しはじめたのです。もちろん、相反する無益なことも相変わ
らず存在しています。ちょうど善と悪が隣り合わせにあるがごとく、あるいは破壊と建設が共
存するように、銀色に輝く陽の光の背景に暗い雲が存在しているのです。

こういう状況を、主イエスは雑草と小麦のたとえ話で説いています。世界の中でプラス面が

マイナス面に圧倒されるのをそのまま見過ごすのは非常に悲しむべきことです。世界のあちこちで差し始めている光が闇にかき消されてしまうのを、私たちは手をこまねいて見ているわけにはいきません。

ご存知のように、東ヨーロッパ諸国で政治の自由を取り戻す動きが起りました。全体主義と弾圧に命をかけて抵抗する勇氣によつて、共產主義諸国は崩壊していききました。核の抑止と軍縮の問題も、紆余曲折はあるものの明るい方向に向かつて、大きな変化を遂げています。今まで困難と考えられていた各地域での民族的自立も、今後ますます現実化してゆくでしょう。この流れの中で、いずれ人種差別に対する態度も改まるのではないかという期待さえもつことができます。

一九八五年にジュネーブで開催された国連四十周年シンポジウムで、立正佼成会の庭野日敬師が演説され、その内容はたいへん共感できるすばらしいものでした。

「人間性は時代と共に、かえつて悪くなつていくという批判もありますが、人間進化の歴史を見ると、人間は常に向上しつつあるものであり、人間が、この地球上に誕生してから約百万年を経た今日に至つて初めて人間は平和の大切さを学び、その創造のために真剣に取り組まねばならぬ段階に来ていると私は考えるのであります」

庭野師の名言はこれだけにとどまりません。次のようなことも述べていらつしやいます。

「武力ではなく、宗教のみが平和な世界をつくる原動力となりうるものとかたく信じております。つまり、互いに尊敬し合うことが大切であります」

ここで、宗教と人間に対する尊敬、平和との関わりについて首を傾げられた方もおられるかもしれませんが。そのことについて、もう少し詳しく述べたいと思います。

宗教の意味するところは、超越的な存在の神秘によってしっかりと包容されること、そしてその体験をすることです。宗教的存在としての第一歩は、信じる者自らが踏み出すのではなく、信仰する神によって導かれるものなのです。神が主導され、私たちはそれに応えるのです。神は愛をもって私たちを包み込み、私たちは愛をもってそれに応えます。神は私たちの生活を善で満たし、私たちは感謝の心を神に捧げます。

広い意味でいえば、平和とは崇高なる神の手によって与えられる最高の賜物なのです。このような平和の本質についての奥義を理解することなしに平和を達成することはできません。平和は私たち自身の手によってつくりだし与えるものだと考えている以上、平和の実現に挫折することは目に見えています。

もう一度いっておきます。平和とは神からの賜物だということは何よりも理解しなければなりません。まず私たちが自身が満たされ、それを周りにも及ぼしていく、己の分を超えるような豊かさを受け継ぎ、それを他人にも分け与える。それが平和を達成することなのです。これ

が、宗教と平和の結びつきの意義といえるでしょう。

この考え方は謙遜の意識に端を発していると思われるかもしれませんが、そうではなくてむしろ現実主義からうまれてきているのだということをとくに強調したいのです。人間が跪いたとき、あるいは頭を下げたときに偉大であるように、世界の平和は私たちの手によってかなえられるものではないと悟ったとき、初めて、真の平和を築く人になることができるのです。

人間の本源にたちかえることが、世界平和への道

私たちが平和を達成しようとするとき、超越的な真理（神）との意思の疎通は内なる次元を通して行われます。世界の偉大な宗教は、様々な差異があるにもかかわらず、神の愛と人の愛とがひとつに収斂するということについては、どの宗教も同じ考え方をとっています。人格には神が宿る特権が与えられているのです。神は他ならぬ人間のうちに宿っています。ですから、隣人を見い出すことなく神を見い出すことはできないのです。宗教と呼ぶにふさわしいものはすべて、人間の尊厳に絶対的な敬意を払うことが基礎となっています。平和の基盤としての普遍的な倫理は、このような脈絡においてはじめて理解されるのです。

地球社会の基礎としての倫理規範は、すべての国に受け入れられる規則やガイドラインに言

及することではないはず。むしろ、人間の行動、態度、決定の本源、すなわち超越的な存在に宿っている生身の人間の奪うことのできない尊厳にもどることを意味するのです。世界がこの本源を見失っているために、平和を達成することができないのです。

東ヨーロッパを席巻^{せつらん}している自由を求める新しい動きの中心となって取り組んできた人々が、次のような預言的な発言をしているのは興味深いことです。

「核保有国は核の影を超えて非核世界をつくるべきです。人類は普遍的な倫理から離脱した政治に終止符を打たなければなりません。国際関係を人道的なものとするためには、人道主義の分野においても同様に適切な行動をとることが必要です。それが平和の倫理的な保障を生み出すのです。そしてそのことが平和の物質的な保障を達成する一助となるのです」

これは一九八七年二月十六日に、ゴルバチョフ書記長（当時）がクレムリンで行った演説の一部です。

国家間の政治的、経済的および文化的交流において、平和のもつ超越的な特徴がそれぞれにおいて実現されるとき、私たちはこの世が平和であるということを実感することができます。これが、今回のシンポジウムの「アジアと日本は平和と世界に対して効果的な取り組みを示すことができるか」というテーマに対する私の最後の答えです。

全人類は一つという視点にたつ見返りのない援助が必要

平和とは単に戦争がない状態ではありません。国内外で経済問題をかかえ、基本的ニーズに対する人々の要求が世界中で高まり、破壊的な戦争の恐ろしい代償に目覚めた今日、軍事的な紛争解決はますます無意味なものと受けとめられるようになるでしょう。今まで多くの国が平和を維持するためだといひながら戦争の脅威を弄もてあそびてきました。今こそすべての努力を結集し、平和の魅力を訴えることによつて、戦争の無意味さを知らしめるべき時です。

程度の差こそあれ、私たちは職業や肩書きによつて人間が規定されるという間違つた見方をしてきました。兵士であるとか、政治家であるとか、経済学者であるとかいうように人をそれ以上には見ないことにならされているのです。私たちは人間性の全体像を取り戻す必要があります。なぜなら私たちは現在、歴史の転換点に立っているからです。全人類が一つであり、地球の運命を共有しているという認識をもつことで、新しい世界秩序の扉を開くことができるのです。

全人類は一つという名のもとに、地球の資源をアジアの兄弟姉妹との共通の財産として取り扱うよう、アジアの豊かな国々のみなさんに願いたいと思います。地上の授り物の所有者とい

うよりはむしろ管理者という意識をもってほしいと思います。

市場メカニズムの観点からだけではなく、全人類は一つという視点にたつて、ただ単に利益を追求するのではなく、真に相手国の経済発展に寄与するような海外投資を行つてほしいと思います。全人類は一つという視点にたつて将来の見返りを期待しない援助、紐付きでなく、また条件をつけず、災害や天災のとき限りというのではない援助が望まれます。貸借に金融の法律を適用するだけではなく、自らの「義務」を果たそうと努力している債務国に同情を寄せてほしいのです。支配するという意識からではなく、全人類は一つという視点にたつて、アジア諸国民と科学技術を共有してください。そうすれば彼らは基本的ニーズを自力で満たす力を切り開いていくことでしよう。

国際関係が人間の顔をもつとき、アジア大陸はまったく違ったものとなるはずで、これを夢で終わらせてもよいのでしょうか。それとも実現をめざすべきでしょうか。自己中心主義や利己愛から抜け出すことができるでしょうか。キリスト教徒である私が崇める平和の創造者は、自らの命を投げ出すことによつてのみ、平和を勝ち取ることができたのです。他人を生かすために彼が十字架に自分の命を捧げたことは、平和が大きな代償を必要とすることを私たちに思い起こさせます。

平和を確立するための二つのアプローチ

ここで一つの伝説をお話ししましょう。

海岸から二マイルのところの島に神殿が建っていました。その神殿には世界でも最高の職人によってつくられた一〇〇〇個からの大小の鐘がついており、風が吹いたり嵐が吹きすさぶたびに一齐に鳴り響き、誰もがうっとり聞き惚れる音楽を奏でたのでした。

しかし何百年もするうちに島は海に沈んでしまい、神殿も鐘も姿を消しました。伝説によれば、その後も鐘は止むことなく鳴り続け、よく耳を澄ませば聞こえるということでした。その話に心動かされた若者が、何が何でも鐘の音を聞きたいと何千マイルの道を通ってその浜辺へやってきました。彼はかつて神殿が建っていた場所に向かい合って何日間も浜辺にすわり、一心に鐘の音を聞こうとしました。しかし、聞こえてくるのは岸に砕ける波の音ばかり。そこで若者はなんとか波の音をさえぎって鐘の音を聞こうとあらゆる努力をしましたが、それも無駄でした。波の音が宇宙全体にあふれているように思えました。

それでも若者は何週間も努力を続けました。気落ちしたときには神殿の鐘の言い伝えを熟っぽく語ってくれる村の物知りや、実際に鐘の音を聞いたという人々の言葉に耳を傾けました。

その都度勇気づけられた彼でしたが、その後も何も聞こえず、再び落胆してしまいました。

ついに若者はあきらめることにしました。自分は鐘の音を聞ける幸運な人間ではなかったのかもしれない。伝説自体がうそだったのかもしれない。故郷に帰って失敗をいさぎよく認めよう。今日で最後という日に、若者は海や空や風や椰子の木に別れを告げようと、浜辺のいつもの場所へやってきました。砂の上にすわって空を見つめ、波の音を聞きました。その日は波の音に逆らうこともしませんでした。むしろ肩の力を抜いて聞いているうちに、波のたてる轟音も耳に心地よい、心安らぐ音であることに気づきました。

ほどなく若者の心は波の音に我を忘れるほどになり、彼の心は深い静けさで満たされていきました。その深い静寂の中で、彼はついに聞いたのです。小さな鐘が次から次へと鳴っているのを。やがて一〇〇〇個に及ぶ神殿の鐘は一斉に鳴り響き、彼の心は驚きと喜びの気持ちでいっぱいになりました。

私たちは今日、恒久的な真の平和という願いをかなえ、夢を実現させ、そんな世界を心に描くために共に集いました。そうです。どんなにか平和を願ひ、平和を夢みて、その実現に取り組んできたことでしょうか。私の基本的な考えは、次の一言に凝縮されます。

真の恒久的な平和を実現させるためには二つの重要な動きが同時に必要とされます。つまり人間の良心を育成し変えてゆくという平和への内面的なアプローチと、教会が平和に対してな

すべき青写真を描く外面的なアプローチです。

平和への内面的なアプローチ(良心の育成)

日本に来る飛行機の中で雑誌を読んではいたら、日本の科学者が、人間の体は一体どれだけの価値があるかという計算をしていました。最後のぎりぎりの所まで測定をして、価値を極めていったわけです。

すると、人体の中に含まれている鉄分は、小さなコンピューターを一台作れるくらいあります。糖分は、コーヒー一杯に必要な砂糖が入っている。塩分は、肉を一回調理できる程が含まれています。人体に含まれているリンからは、二二〇〇本のマッチの頭ができる。それから、一回写真のフラッシュがたげるだけのマグネシウムが含まれています。電卓でそれらを計算していくと、一九八九年の時点で、人体一体あたり八ドル四〇セントの価値があった、ということです。

ところがこの日本人は単なる科学者でも、技術者でもなく、宗教の心を持っていた人であったのです。宗教の目から見た人の価値は貴重な存在で、人の価値は内なる意識や良心で決まるものである、としています。万物を統一した天の陰の存在であるのが人間だと思えます。今回

このように集まって、討論をするたたき台として、人は尊厳ある存在だから、ということが重要だと思えます。人類のためになぜ努力をするのか、という問いに対して、神の手によって造られた最も貴重な存在が人間だからという答えになると思えます。それは、日本人であっても、ドイツ人であっても、フィリピン人であっても、アメリカ人であってもその人の尊厳のために、人類のために努力をしなければならないことだと思えます。

人の心の中には、神によってしるされた法が存在します。この法をどれだけ守れるかによって人の価値が決まり、裁かれます。人にとって良心とはその最も秘めた部分にあり、また神と向かい合い、その奥深くに神の声を聞く聖域でもあります (GAUDIUM ET SPES, NO. 16)。

ローマ法王ヨハネ・パウロ二世は次のように述べていらつしやいます。

「人は今日、個人の人間性重視という名のもとに神を拒む誘惑にさらされています。しかし、神を拒絶しようとするところには必ずや恐怖がその影を落とします。恐れとは、人の良心の中で神が死ぬときに生まれます。人の良心の中で神が死ぬとき、神の似姿につくられた人間も死を免れないということは、人は誰もおぼろげながら知っており、恐怖を覚えるからなのです」

〔平和と青年はともに前進する〕一九八五年一月二日、世界平和の日のヨハネ・パウロ二世のメッセ
ージ)

成熟の域に達した良心は、社会経済および政治文化的な環境に道義的な重みを与えます。良

心は善意ある人々に社会を徹底的に変革するという夢をみさせ、実際にそれに取り組む力を与えます。世の中に悪がはびこるのは、善人と呼ばれる人々が悪に対して何もしたくないためです。良心は、私たちに状況を改善せよと促し、挑んでくるのです。

良心の育成——とりわけ貧しい人々や若者を対象にする場合には、真実、自由、正義、連帯などの価値観の形成と同様に、家庭や学校、マスコミ等の社会的なネットワークを通して教育していく必要があります。

対話と洞察力と行動を通じて形成される社会的な良心は、人類が家族国家であるという意識から始めるべきです。しかし社会的良心の形成の出発点として必要なのが、個人の良心の育成と改善です。

ここに一つの話があります。

スーファイ・バヤズイッドは自分のことをこう言います。

「私は若い頃革命家としてならし、『神よ、世界を変える力を与えたまえ』としか祈らなかつた。中年期にさしかかるにつれ、人一人変えられぬまま人生の半分が過ぎてしまったことに気づいた私は、神への祈りを次のように変えた。『神よ、私の出会う人すべて、つまり私の家族と友人の心を変えるための力をください。それだけで十分です』。老齢に達し、余命いくばくもなくなつた今日、私はやっと自分の愚かさに気づき始めた。今の祈りはこうである。『神よ、



私自身を変える力をお恵みください。最初からこのように祈っていたら、人生を無駄にせず
にすんだのに！」

「地球に平和を、平和づくりは自分から」と古い歌にもあるように、平和は私たち自身から始まるのです。

平和への外面的なアプローチ

一八九一年にレオ十三世が最初の社会回書を公布してからちょうど百年目にあたる一九九一年は、ローマ・カトリック教会にとって重要な年です。

カトリック教会によるこの豊かな教えの数々も、平和を最重要項目に挙げています。信仰という伝統を代表する人間として、これらの教え

をもとにした平和に新しい名前を与えるなら、愛に根ざした正義、総合的な開発、連帯であると呼びたいと思います。

「平和とは、正義と愛が実を結んだものである」

一九六五年、第二回パチカン公会議は現代社会における教会憲章を承認しました。この歴史的な文書の第五章は、平和の確立と国家間の親善促進に充てられています。

平和とは、単に戦争の不在をさすものではありません。対立する勢力の均衡がとれている状態でもなければ、専制的な支配から生まれるものでもありません。むしろ「正義の成果」と呼ぶべきものでしょう（イザヤ書 三三章一七節）。

平和とは、物事に秩序を与えた成果であり、この世界の創造主である神が人間社会に授けたものであり、また正義による支配を渴望する人間によって実現されるべきものなのです。さらに平和を達成するには、他の人々の尊厳を認め、友愛を意識的に実践することが不可欠です。

よって平和は愛の産物でもあります。愛は正義を超える存在だからです（GAUDIUM ET SPES, NO. 78）⁽²⁾。

「平和は、総合的な開発である」

総合的な開発とは、一九六七年にローマ法王パウロ六世が POPULORUM PROGRESSIO という教書の中で使った平和の新しい呼び方です。社会経済情勢が急速に変化する中で、パウ

ロ六世は総合的な開発、つまり内面的にも社会的にも、人のあらゆる面での発展を促すことを強調しました。

よって総合的な開発は、人をあらゆる社会組織の基盤、原因、目的として捉えています。つまりすべての社会経済プログラムを評価、批判、判断する基準を人に求めるのです。またプログラムの評価は、貧しい人々や社会的に弱い立場の人々の目で行われ、すべての社会的プロセスや決定は、世界中で貧困にあえいでいる無数の人々の観点で捉えられるべきです。

「平和は連帯の産物である」

西暦二〇〇〇年が近づくにつれ、通信・交通手段の発達に伴った「グローバル・ビレッジ（地球村）の実現に近づいていることを誰もが実感しています。同時に、複雑な関係に組み込まれつつあることも感じています。ヨハネ・パウロ二世はこの現状を踏まえ、キリスト教の教義に基づいて平和の新たな呼び名として「連帯」を提唱しました。法皇はこの連帯を「人類全体のために、万人および一人一人に対して責任をもち、その幸福のために自らを捧げる断固たる決意」と定義づけています。これを実現するには、どんな人間も尊厳において平等であり、環境を変えていく知性と意志が備わっていることを認め、正義と愛と総合的な開発が必要であ

ると認識することが前提となります。

さらに連帯は、私たちに行動的非暴力の姿勢を貫くことを迫ります。非暴力の戦略をとるには、精神と行動の両面での連帯が必要となります。一九八六年はフィリピンでピープル・パワーが立ち上がった忘れ難い年です。自由、真実、正義を推進する活力と信仰の力があいまつて、新しいフィリピン人としての意識が出現したのです。我々はロザリオと花で戦車と銃を阻むことに成功したのです。このような出来事は、中国やロシアやあらゆるところで起きています。実に感動的なことです。

最後に、連帯は民衆に対する権力の委譲を促します。これには意思決定への参加、政治、および経済の分野における平等、民主主義の普及と参加のそれぞれを拡大することが含まれます。これらは独裁や国家間の不信、欲望、基本的人権の蹂躪じゆうもくが横行する今日の世界で、その実現が待ち望まれるものばかりです。

一九八九年十二月八日、六回目のクーデターが失敗した翌日に、平和の元后である聖母マリアに捧げられたEDSA乙女の聖堂が祝福されました。この聖堂は、危険のさなかにある国民を支える平和の元后マリアを祭った記念碑に他なりません。

この聖堂は、平和の君イエス・キリストを生んだマリアにちなんで名付けられました。数カ月後、オランダからカリヨンの鐘が届き、聖堂の塔に据え付けられました。これらの鐘は毎時

に鳴って、平和への強い願いが決して薄れたり踏みじられたりすることのないよう警告を發してきます。善意ある多くの人々、ともに神の力を借りて平和を維持し、真の平和を未来永劫に築きましょう。高らかに鐘の音を響かせましょう。平和、平和、平和と！

平和実現のためのビジネス界の役割

一九八九年末から一九九一年初めにかけて世界は大きく変化を遂げました。東ヨーロッパおよび中央ヨーロッパで繰り広げられた予想もしなかつた事態、多くの犠牲を払った湾岸戦争の終結、旧ソビエト連邦を席卷し、現在も大きな変化をもたらしている民主化の波、超大国の指導者による大胆な兵器削減といった一連の動きを背景に、世界は私たちの夢である恒久平和の実現に向けて大きく近づきました。

皮肉なことに、時代錯誤的イデオロギーとそこから生まれた政治体制の崩壊をもたらした激動は、大規模な地政学的変化と再編成を起こす可能性も多分にあります。そのため人類の未来は、今よりさらに危険で不確実なものになるといふ分析と予想をする専門家もいます。しかしながら、一つだけ確信をもっていえることがあります。私たちは歴史の転換点に立っています。そして互いに連帯して、正義と公正に基づいた真の恒久的な世界平和の土台となる新しい

世界秩序を実現する正しい選択と決断ができるのです。

世界で最も強い影響力をもつ先進産業国のビジネス界を率い、支えておられる日本のみなさんは、より人間的で安定した世界経済秩序をつくりだす重要な役割を担っています。つまりこのような崇高な目的の実現に大きく貢献する責任があると思われまます。

実業界のみなさんが経済面だけではなく人間としての責任を果たされるとき、カトリック教会が味方であることに気づかれるでしょう。また人類の半数以上が直面している非人間的な厳しい貧困を緩和する、新しい世界経済秩序を打ち立てようとするとき、教会が欠くことのできない手助けとなることに気づかれると思います。教会は、特定の行動や経済計画、経済戦略などを提示するわけではありません。こうしたことは教会の能力の範囲外であるからです。しかし、普遍的かつ超越的な妥当性をもった基本的かつ人間学的、倫理的原則を提示することはできます。これが正しい選択や適切な行動をとる際の指針となるのです。

人の尊厳と卓越性を重んじる原則

人に関して指導的立場にある教会がつねに主張し続けてきた基本的かつ人間学的、倫理的原則についてお話ししようと思います。

人は誰も、人であるが故に奪われることのできない尊厳を有しています。これは何者にも簡単に侵されることのできないものです。神さえも、この尊厳を大切にされます。すべての人は創造主によって知性と自由を与えられ、単なる「もの」としてではなく「人」として存在しているのです。

キリスト教徒にとって、人の尊厳はさらに重要な意味をもちます。なぜなら神の子であるイエスが各人と一体となり、十字架上で命を捧げることによってその罪をあがなったからです。神は私たちの中に存在するのです。このため教会は、社会経済的、政治的活動における人の卓越性をつねに主張しています。人はすべての社会経済活動の本源であり、その中心でありまた目的です (GAUDIUM ET SPES, NO. 54)⁽³⁾。経済システムの一構成要素でもなければ、生産過程の歯車の一つでもないのです。

人の尊厳を大切にすることは、必然的に人の権利を大切にすることに結びつきます。個人の所有権、妥当な賃金を受け取る権利、労働組合などに代表される結社の権利、労働時間や労働条件の枠を設定する権利、正当な休息をとる権利、婦女子がその労働内容や労働時間について特別な配慮を受ける権利、労働者が宗教上の信仰を表明する権利などがその例です。

ここで強調したいのは、人の魂が超越的な存在を必要とするのは、人の基本的欲求だということです。人は本来その地上ではかない存在に究極的な意味と価値を与える超越した存在を

待ち望んでいるのです。このような超越性を求める傾向は人の心の中から決して消えることはありません。この百年間、神の存在を否定するマルクス主義は、神を求める心は無用のものと唱えてきました。しかし現実には人の心を混迷に導いたにすぎないので、(CENTESIMUS ANNUS, NO. 24)⁽¹⁾。

人の尊厳や権利を尊重することと平和の推進は本質的に不可分の結びつきをもっています。人の権利が尊重され、擁護され、推進されることなしに、また人の尊厳が無視され剝奪されるところに、平和の実現はあり得ないのです。

人の尊厳や権利を尊重する倫理的義務は、人種、国籍、肌の色などのあらゆる違いを越えるものです。これに関連して、私は日本で働いている何千人もの外国人労働者の福祉と保護を考えていただきたいと思います。多くは祖国で適当な就業の機会がないために日本に来ているのです。さらに重要なのは、祖国に残してきた子どもや家族の生活を向上させるために働いているという点です。彼らを搾取したり、差別したり、無視したりする理由はどこにもありません。彼らを軽蔑の対象にする理由はさらさらありません。

仕事の人間的価値と資本に対する労働の卓越性

労働は単なる経済的価値を超えるものです。仕事は本来人間的な性格と価値を備えています。なぜならそれは人から始まり、人をその本来の目的に導く活動であるからです。人は労働の対象であるとともに労働する主体なのです。何よりも、労働は意識と自由をもつ主体である人によって実現されるものです。

人は、知性と自由な意思を備え、自ら決定する能力をもち、自己達成を求めます。労働は人から始まるものですから、その人の性格を帯び、侵すべからざる尊厳に基づいた価値を備えています。さらに人は、仕事によって自己を達成し、自己実現を図るのです。

それゆえに、仕事の価値の根底にあるのは仕事をする人間そのものです。労働の価値はその効率や労働の対価として支払われる給料の額でなく、労働をする人間そのものに価値があるのです。このような仕事の人間的価値を認識するとき、人が仕事のために在るのではなく、仕事人が人のためになければならないのです。

労働とその労働を行う労働者は単なる「もの」として取り扱ってはなりません。ここから、労働は資本を卓越するという原則が導き出されます。資本は、労働と労働者に仕えるのであり、その逆であってはなりません。このことが、仕事の人間的価値と存在論的に人はものを卓越するという基本的な倫理条件を満たすのです。

ビジネスの目標は利益の追求だけであってはならない

これまで述べた原則から、ビジネスの計画や目標は、利益のみを追求するものであってはならないことがわかりただけでしよう。利益よりも大切なのは、人に何が起こるかということです。教会はビジネスにおける利益の正当性を認めています、それがビジネスにおける唯一の判断基準であってはなりません。ローマ法皇ヨハネ・パウロ二世は、先頃発表した回勅の中で次のように述べています。

「教会は、ビジネスが順調に機能していることを示すものとして、利益の正当性を認めている。企業が利益を上げるといふことは、労働力が適正に行使され、それに対応する労働者のニーズが十分に満たされていることを意味する。しかし企業の状況を示すのは利益率ばかりではない。財政的には健全でありながら企業にとって最も価値の高い資産であるはずの人間が、屈辱的な取り扱いを受けたり、その尊厳を侵されていることもありうる。このことは道徳的に許し難いだけでなく、結果として企業の経済効率に悪影響を及ぼすものである。

利益を追求することだけが企業の目的ではない。むしろ、個人が基本的ニーズを満たすために様々な方法で努力しながら、社会全体に奉仕するための特定の集団を形成することが企業と

しての存在意義である。たしかに利益はビジネスの活気を示す物差しではあるが、これがすべてではない。人間的道徳的要素も斟酌しんしやくされなければならない。これこそ、長い目で見れば、利益と並んでビジネスの活性化になくてもならないものがある」(CENTESIMUS ANNUS, NO. 35)⁽⁵¹⁾

理想をいえば、ビジネスではいくら儲かったかということばかり考えるのではなく、経営者や被雇用者に何が起こったのか、その企業が提供する製品やサービスを買った人はどうなのかと問うことの方が大切なのです。

投資の倫理的・道徳的側面

ビジネス活動における唯一の指標は、利益だけでなく、むしろ人の幸福や真の意味での人の全人的形成にあるとすれば、その帰結はローマ法皇ヨハネ・パウロ二世が回勅の中で述べています。

「どこに投資を行うか、どここの生産分野に投資を行うかという決定は、つねに道徳的、文化的な選択である。新しいニーズに対し新しい方法を用いる選択は、人間存在のすべてを考慮し、物質的、本能的な部分を内なる精神的な部分に従属させるような、幅広い人間観に基づいたも

のひなければならぬ」(CENTESIMUS ANNUS. NO. 36)⁽⁶⁾

表面的で人為的なニーズを美化し、経済活動を絶対化して、生産と消費を唯一の価値として社会活動の中心に位置づける消費主義に惑わされてはなりません。このような消費拡大を煽る態度は、深刻な社会秩序の混乱の現れです。今日多くの先進工業国を悩ましている慢性的な麻薬濫用問題もそのことを証明しています。これは根の深い道徳的、精神的空白の兆しであり、人を単なる経済的存在、消費を行う存在におとしめ、「より豊かに生きる」よりはむしろ「よりたくさん手に入れる」ことが人間の究極的な幸福だとする間違った人間理解に基づくものです。しかし、本来人はより豊かに生きようとする生き物のはずです。

「人間生態系」の保護と推進

私たちが行ってきた不合理で身勝手な自然環境の破壊については、地球上の多くの人々が問題視していますが、それと同じくらい、場合によってはもっと重要なのが真の「ヒューマン・エコロジー」の保護を押し進めていくことです。残念なことにこのことはまだほとんど認識されていません。ヨハネ・パウロ二世は、回勅の中でこの点をはっきり強調しています。

「人類は、絶滅の危機に瀕している動物種が生息する自然環境を守ることに、十分とは

いえないものの少なからず関心を払っている。なぜなら自然界のバランスを保つ上で、動物がそれぞれ重要な役割を果たしていることを認識しているからである。ところが、真の「ヒューマン・エコロジー」の道德水準を保護する努力はほとんどなされていない。そういう意味で、今日の深刻な都市化の問題や人の生き方に関係する都市計画の必要性という大きな問題に言及する必要がある」(CENTESIMUS ANNUS, NO. 38)

私たちは正しい人間理解、正義、真の兄弟愛と全世界の連帯の原則に基づく新しい世界秩序を作り出す歴史的瞬間に立ち会っているのです。この重大な課題に誇りと勇氣、道義心と寛容さをもってともに立ち向かっていきましょう。

最後に、アシジの聖フランシスコの祈りを結びに代えたいと思います。

「平和を求める祈り

わたしをあなたの平和の道具としてお使いください。

憎しみのあるところに愛を、

いさかいのあるところにゆるしを、

分裂のあるところに一致を、疑惑のあるところに信仰を、

誤っているところに真理を、絶望のあるところに希望を、

闇に光を、悲しみのあるところに喜びを

もたらずものとしてください。

慰められるよりは慰めることを、

理解されるよりは理解することを、

愛されるよりは愛することを、わたしが求めますように。

わたしたちは、与えるから受け、ゆるすからゆるされ、

自分を捨てて死に、永遠のいのちをいただくのですから。

アシジの聖フランシスコ」

(注釈)

(1)第二ヴァチカン公会議公文書「現代世界憲章」No 16

(2)同右No 78 (3)同右No 54

(4)教皇レオ十三世の発布した最初の社会問題に関する回勅「レールム・ノヴァートルム」の百周年にあたって(教皇ヨハネ・パウロ二世の回勅、一九九一年)No 24

(5)同右No 35 (6)同右No 36 (7)同右No 38

第三章 死んだ平和でなく生きた平和を

世界イスラム協議会事務総長

イナムラ・カーン博士

(パキスタン人・イスラム教)



イナムラ・カーン博士

1914年ビルマ生まれ。36年ラングーン大卒。42年日本軍の侵攻に伴いインドに避難。47年インドとパキスタンが分離独立し、48年以後パキスタンに居住。62年世界イスラム協議会事務総長。84年世界宗教者平和会議(WCRP)会長。88年他宗教との交流など「イスラムの移動大使」としての活躍にテンプルテン賞受賞。

すべての宗教が調和を求め

優れた道徳的規範としての宗教は、高い理想を培うという非常に崇高な役割を果たすことができるでしょう。また、宗教は人のより優れた高潔な資質を育むことにより、隣人に対して正しく接する人間になるのを助けます。今日の「隣人」の定義には、自分のまわりの人間のみならず、人種や国籍、肌の色、物質的な富の多少を越えた人類全体が含まれます。さらに宗教は、さまざまな背景をもつ人々の意見や行動に調和をもたらしとうとします。

完全な調和は容易でないかもしれませんが、調和をめざす努力は、よりよい理解と調和に対する貢献に他なりません。宗教家には、当然のことながら分別をそなえた人格と行動が求められます。つまり宗教指導者は、その振る舞いから判断されるべきものなのです。なぜなら調和の雰囲気づくりには、含蓄あるきれいな言葉の羅列よりも、その人となりと行動が求められているからです。

神は唯一の存在です。慈悲深い、情け深い、至上の、寛大な、哀れみ深い、愛情深い、優しい、公明正大な等々、実にさまざまな名前前で呼ばれてはいますが、これは神の豊かな資質を反映するものです。イスラム教における神の正式な名称はアラールですが、同様の理由からラーマ

ン、ラヒム、カリムなどと呼ばれることもあります。神の存在を信じ、その資質を自分の生き方や考え方、信仰生活などの模範とする限りは、神をどの名で呼ぼうと構わないのです。神は宇宙全体を創造し、護持する方でもあります。

信仰をもつ私たちは、他の宗教の欠点をさがすために時間とエネルギーを無駄にすべきではありません。すべての啓示宗教（自然宗教に対して、神の啓示をより所とする宗教。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教など）が永久で普遍的なものであり、全人類が一つであること、神が一体であることという共通な特色をそなえているのですから、互いの宗教のすぐれた点を認める姿勢が大切です。そこで、正しい視点から宗教を理解することが必要です。

世界平和に対するアジアの貢献には、はかりしれないものがあります。アジアは世界最大の大陸であるとともに、多くの文明を育み、世界的な宗教の発祥の地でもあります。仏教やユダヤ教、ヒンズー教、キリスト教、ジャイナ教、神道、イスラム教が生まれてきました。その起源は、伝説上の歴史が始まる前にまでさかのぼります。宗教の開祖はブツダであれ、モーゼであれ、キリストやモハメッドであれ、究極的には神という同一の根源から発しているため、名前は違っても、みな同じ神に帰依しており、真実と正義、平和、調和、善意という、基本的に一致する永遠のメッセージを伝えたのです。いずれの偉大な預言者も、当時の様式や、それぞれの土地の言語で善意と平和と調和のメッセージを伝え、宗教を定義づけたといえるでしょう。

う。つまりこれらの偉大な師や伝道者が取り上げた事例も、当時の土地や時代の生活様式に近いものであったことが考えられます。しかしながら、その教えを深く研究し分析してみると、すべての教義に調和の大切さが謳うたわれていることに気づきます。偉大な師たちは決して、他の宗教や伝道者の短所を見出し出そうとして時間を浪費するようなことはありませんでした。むしろ人類全体のことを考え、常に前向きな姿勢を貫いたのです。特定の問題に取り組む方法こそ違ったかもしれませんが、建設的なテーマを取り上げ、伝道したという点で共通しているのは明らかです。哲学的な方法を採用した人もいれば、演繹えんえき的もしくは帰納的な分析法を好んだ人、科学研究的な側面を強調した人とさまざまですが、いずれにしても最終的な目的は、人と人との間に調和をもたらしことにありました。

どの宗教であろうと信仰を持つ人々は、一九四八年に採択された国連の世界人権宣言に謳うたわれているように、宗教と文化の完全な自由、ならびに人権の全面的な擁護をめざして全力を尽くさねばなりません。これらの高尚な原則は、人間の原則と言えるものであり、人類全体が受け入れてゆくべきものです。

平和と安全保障の両方が必要

平和の受益者と、平和の創造者、といった区別を無理やりするのは間違いです。なぜならすべての人々が、異なる形で平和に貢献しているからです。歴史を遠くさかのぼる必要もないでしょう。不要であった湾岸戦争は終結したと人は言いますが、果たして本当に終わったのか、形を変えて復活するのは誰にもわかりません。日本は今日、最も熱心な平和論者であり、第二次世界大戦後の記録がその主張を裏づけていますが、五十年前にはその日本が真珠湾の悲劇を引き起こしました。歴史の変遷には興味深いものがあります。広島や長崎の惨事を引き起こしたのはアメリカ人でしたが、今日どの国よりも熱心に世界平和を主張しています。よって、せめて市民のレベルだけでも、終始一貫して平和が語られねばなりません。異なる宗教を持つ人々が一堂に会する国際的なダイアログの開催も、世界平和の実現と存続にとって有益だと言えましょう。

経済のリーダー的存在で、繁栄を続ける工業国日本が、人類全体の明るい将来のために、今後は産業のみならず文化的な面でも、大規模かつ健全な交流プログラムを担って下さることを期待しています。私たち世界イスラム協議会は、日本の宗教団体と協力して、アブガニスタン

の難民にテントを、後には交通手段を提供するという、二種類の福祉プログラムをてがけた経験があります。

何としても一九三九年〜四五年に経験した世界的な悲劇が繰り返されないよう努力をしなればなりません。各種の再建や開発プロジェクトを推進することは、この美しい世界を破壊することなく、人類の平和な未来を約束することになるのです。

平和と安全保障は、両方あってこそ価値があることを忘れてはなりません。個人の自由を危険から守り、安全な状況を保障するものでなければ、これらの言葉は意味を成しません。戦争が停止したことが平和を意味するのではないのです。たとえ言葉によって安定が保障されても、押しつけられた平和は本物ではありません。世界は、世界中の人々が自由に受け入れることができる恒久平和を必要としています。命令によって達成された平和は、戦争状態の終結を意味するに過ぎません。

いま私たちは、人類全体の存続を考えてその先を行かねばなりません。すべての人間が健康で暮らせることをめざさねばなりません。平和の時代に、人間の尊厳を回復したいのです。選ばれた少数の人間ではなく、世界中の人々の安全と人権が保障されて初めて、人間の尊厳を守ることができるのです。また私たちが忘れがちなものに環境保全があります。東西南北にかかわらず、世界各地で環境破壊が行われ、先進国になるほど深刻です。

一九四五年に原子爆弾が使われて以来、人命や安全保障に対する脅威は増す一方です。世界で最も権威ある討議の場である国連では、致命的な核兵器を中心とする軍拡競争への反対決議が毎年のように可決されていますが、満足できる世界平和は訪れていません。技術の進歩に伴い、大量破壊が可能な武器の貯蔵が可能になったのです。抑止理論の説得力はあまりなく、理性ある人々を納得させることはできません。核戦争は、意図的に、もしくはわざとかな不注意、過失、誰かのミスからも起きかねないのが現状です。どのように始まろうとも、その悲惨な結果は変わりません。通常兵器であろうと核兵器であろうと、人命を奪う可能性のある兵器には嚴重な管理が必要です。国連の数字によれば、今日の世界には約五万の核弾頭が存在し、核兵器の威力の総計は広島原子爆弾の一〇〇万倍に相当することです。こんな話をして皆さんを怖がらせるつもりはないのですが、一触即発の危険な状況にあることを是非理解していただきたいと思います。死火山や休火山でさえも、危険な転換期を迎えていることは確実であり、全人類の安全のために、宗教的価値観を効果的に再生して行く必要が高まっています。

イスラム教の共存の精神と平和主義

私たちが望んでいるのは、よほど活気のない平和ではありません。生きた平和が必要な

です。なぜなら平和を通じてこそ、すべての人々に進歩と繁栄をもたらし、正義と道徳的価値観の輪を大きく広げることが可能になるからです。真の平和を実現するには、すべての崇高な特性を持ち寄る必要があります。また寛容さに欠ければ、宗教や信条の異なる人々と平和を築くことはできません。

宗教の違う人々とつきあうときには、大きい心をもって、コーランの言葉「あなたにはあなたの宗教、私には私の宗教」を鉄則とすべきです。「生き、生かす」すなわち共存という素晴らしい精神を普及させましょう。この広い世界では、みんなが幸せに暮らすことができるのです。イスラム教には、儀式や祈りだけでなく、力強い精神と生命を包み込むシステムがあります。宗教はよんだ儀式的なものの連続ではありません。むしろ活気のある行動的な勢力であり、それに沿った生き方が求められるのです。

イスラム教のイスラムという言葉は、アラビア語で平和を意味し、世界中の人々の名誉と尊厳を重視した平和の実現を目的としています。イスラム教徒の聖典はコーランと呼ばれ、理解を深めるために繰り返し読む書物という意味があり、いかなる理由があろうとも侵略を仕掛けてはいけなさと戒めています。湾岸戦争はクウェートという小さな隣国を侵略したフセイン大統領の馬鹿げた間違いです。繰り返し返しますが、イスラムに侵略はあり得ないのです。傲慢さと力の過信から侵略に走った彼の結末は見た通りです。

戦争を仕掛けられたら、反撃はむろんしなければなりません。ここで、戦中や戦後におけるイスラム教徒の行動についてくわしく触れるつもりはありません。ただコーランが、武力の行使は最小限にとどめること、敵が剣を鞘に納めたり武器を捨てたなら戦いの中止を呼びかけること、また病人や幼児、弱者などを襲ったり傷つけたりするのを禁じていることを挙げるにとどめておきます。

気が高ぶる状態が続く戦争のさなかでも、人々には慎重さを失わず、神の徳で定められた行動規範を守ることが要請されます。殺し合いを奨励する宗教はありません。どの宗教も、人々が繁栄することを望みこそすれ、ケガをしるとは言っていません。私たちは常に心の平安と外面的な平和を達成し、また局地的にも国家や地球のレベルでも安全保障を実現するために努力すべきです。この崇高な任務をまっとうする上で、マスコミは大きな役割を果たします。マスコミこそ、人々の心の中に戦争回避の信念を植えつけ、平和をめざして立ち上がるのを助けます。マスコミが抱える責任は重大なのです。

世界宗教者平和会議の百周年を祝う一九九三年もそう遠くありません。MRAもまた異なる宗教を結びつける運動であり、今後世界世界の宗教と手を取り合って、世界中の人々が名誉と尊厳を回復してよりよい生活が保障されるという新しい時代を実現する大切な役割を果たしているか、と確信しています。

高まる世界的不安

国連の統計によれば、軍事部門だけで世界の研究開発費の二五パーセント強を占めており、ちなみに農業と衛生、エネルギー、環境事業の研究開発費を合計しても二三パーセントに過ぎないといえます。

毎日四万人の子供が、栄養失調や病気、医薬品の不足から死んでいる一方で、先進国では通常兵器・核兵器の双方に浪費を重ねているという状況は、まったく理解に苦しみます。年間一兆ドル、一分間に一八〇万ドルが軍備に費やされ、新しい兵器システムの開発に使われる研究費も膨大な額にのぼっています。

国際社会の最大の懸念は、水や食糧、農村地帯の貧困などの生活にかかわる基本的な問題ばかりです。第三世界諸国では、依然として教育と社会的な遅れが悩みです。開発途上国では、人権の欠如を実感せずにはいられません。公正でバランスのとれた開発が行われれば現状も改善されるでしょうが、残念ながら開発計画は、逆に先進国の利益に供するあべこべのものばかりです。国連の統計によれば、一一億一六〇〇万人以上の人々が、貧困ライン以下の生活を強いられているといえます。

湾岸戦争以来、アメリカは「新世界秩序」を宣言していますが、ブッシュ大統領もペーカー
國務長官も明確な定義づけを行ってはならず、漠然とした概念に埋没しています。新世界秩序
とは、信頼にたる安全保障制度を確立するものであることが望まれます。いっどこでいかなる
紛争や平和への脅威が生じても、的確な共同行動で対応できる制度であるべきです。みんなが
手を携えて納得できる対応にあたることが重要です。

今世界で一番必要とされているのは、恒久平和と総合的な安全保障を約束する効果的なシス
テムを樹立することです。共に力を合わせて新しい世界を築き、政治面のみならず社会や経済
面での正義が存在し、子供を含むすべての人々に平等な機会が与えられ、相応の開発と繁栄を
享受できるようにすべきです。つまり、手に手をとって協力し、より住みやすい世界を築いて
ゆかねばならないのです。

一九一七年に大々的な宣伝とともに誕生した共産主義の社会・経済体制は、七十三年間にお
よぶ実験ののち、完全な失敗であることが立証されました。北の先進国と南の途上国との格差
は縮むどころかかえって拡大する危険を帯びています。このような状況下で、機能する新世界
秩序を確立し発展させることは可能でしょうか。認められた計画を実行に移す前に、現代社会
を徹しく注視する必要があります。この点で、莫大な財源と優秀な技術集団をもつ日本は、新
世界の計画段階から大いに寄与することが求められています。

長年にわたる対立関係や民族問題など数多くの混迷は、国際的に極めて不安定な時期をもたらし、不幸にも開発計画の遅れの要因となつていますが、これらはおそらく、社会・経済的不公平をさらに助長することになるでしょう。これに環境による被害が加われば、世界の問題はさらに深刻さを増します。

これらが総じて総体的に不安定な状況を生み、安全保障を脅かす要素も明確に認識されています。ここで忘れてならないのは、国連はかつての国際連盟に比べてその影響力や、信頼度、業績という点でまさっているとはいえ、拒否権を有する五大常任理事国を中心として真に信頼に足る存在になることができるか、ということです。現在のままでは、常任理事国のおかかえ組織に過ぎません。恒久平和を打ち立てるには、貧富の格差を縮めねばなりません。同様に南北間に横たわる大きな格差も埋める必要があります。

今日、世界の人口のほとんどは南に、世界の富の大半は北に集中しています。毎日のように新世界秩序が話題にのぼり、識者や政治家は、世界中の紛争や衝突を国連の問題として取り上げるべきだとしています。常任理事国が世界平和をもたらす力を有する唯一の国際機関であることは確かですが、それだけでは、公正な新世界秩序の構築は不可能なことでしよう。

相互依存と分かち合いの世界

この緑の地球には三〇〇種類を超える言語を話す五〇億人以上の人々が住んでおり、国際連合加盟国は一六六カ国にのぼります。近年は、政治や経済の問題のほかに、環境保全や地球資源の問題をどう解決するのかが最優先課題になっています。自然に対する現代人の一方的なアプローチによって人間自身の生活環境までも破壊され、現代文明のあり方への再検討が求められています。

人類の歴史は、生命の炎を世代から世代へと引き継いでいく終りのないリレー競走のようなものではないでしょうか。私たち人類が地球に生き残れるかどうかは、過去の膨大な歴史的、文化的遺産から最もふさわしい生活様式を選べるかどうかにかかっています。現代科学技術は飛躍的な進歩をとげ、とくに情報化の高度な発展と運輸技術の進展により、現代の世界は「グローバル・ビレッジ（地球村）」となっています。知識・思想が伝わる速度は増し、範囲もどんどん広がっています。一方、宗教が示す精神主義の本質は、一つの人類家族を作り出すことでなければなりません。しかし、これまでの歴史は宗教や、理想や、思想をめぐる多くの戦いに満ちています。多くの人たちが平和と理解をもたらしべく努力していますが、残念ながらそ



れとはまさに正反対の力や不寛容の心も作用しています。宗教もまた抑圧者であり、かつ被抑圧者なのです。

二十一世紀を目前にした現在、宗教の多元性は現実となっており、誰も無視することはできません。伝統、人種、肌の色や富を基準に、他者より優れているとか最高のものとして選ばれたと主張することも誰もできません。創造主の前ではすべての人々は平等であり、敬虔さに勝る者のみが他者より優れている、とコーランの戒律は説いています。

今や信仰を持つ者すべてが調和と協調のために努力するときです。相互依存と分かち合いの精神で、単に天然資源についてだけでなく、獲得した富をも分かち合うことが必要でしょう。そしてあらゆる人々の共通の福利のために心を

尽し連帯する崇高な意識を共有することです。ここで、イスラム教徒としていわせていただくなら、あらゆる精神的行為や規範、理想を追求し、内外を問わず幸せと調和と秩序のある状態に到って、地上の楽園を築くところにイスラムの真髄があるのです。

宗教の本質は美しいモスク（寺院）や教会を作ることにはありません。モスクや教会の壁やレンガではなく、こうした建物を通して、あなたが人類を救うために何をするか、ということにあるのです。

世界的に大きな問題が数多くあるなかで、とくに平和の維持、紛争の解決、資源の活用、持続可能な開発の達成、環境問題、基本的な医療の欠如、飢餓と貧困問題の解決が重要でしょう。また、様々なイデオロギーや理念、理論がこの混乱した社会に対する救済策として提示されてきましたが、実際のな効果を持つかに見えた解決法も効果はありませんでした。

失敗の理由は単純です。奪うことのできない権利を有する人々に対して本当に公平な措置がとられない限り、真の平和が達成されることはないのです。公正、善意、正義は、いつも旧来勢力による足の引つ張り合いや権力政治、そして戦争につながる権謀術数、攻撃的な主義主張におびやかされてしまうのです。

二十一世紀を目前にひかえた現在、平和を阻害する最も大きな要因は世界の物質的進歩と精神的遺産とが調和していないことにあります。現代の西欧化された人間の生活、とくに世界の

政治と国際問題においては、倫理と道徳の効果的な役割が忘れ去られています。どうやって鳥のように飛び、魚のように泳ぐかを人類は学びましたが、この地球上を真つ直ぐに歩く方法は忘れてしまったのです。

人は誰も自由と平等の権利を持たねばなりません。また誰も他人の自由を侵せないはずで、人類を常に戦争へと陥れてきた強大な権力へのとめどもない貪欲と飽くことなき渴望を抑制することができれば、世界は真に平和で自由で民主的で正義のある発展をとげることができるとでしょう。

これからの十年がアジアの未来を決する

現在、世界はすっかり変貌して、アジア太平洋地域においても急速な変化が続いています。かつては糧となる意義ある本を読む時間がありました。しかし現在、私たちは人間社会を風刺した、単に言葉の遊びである本を押し付けられています。これらの多くは汚らわしく卑猥なものです。そして、家での時間のほとんどをテレビやビデオを見て過ごすため、人々にはこうした見かけだおしの本を読む時間さえもないのです。

第三世界における現金需要は深刻さを増し、アジア諸国の通貨価値は下落の一途をたどって

います。この状態が続けばアジア諸国の政府は外国経済の支配に屈することになるでしょう。今後、一九七〇年代から一九八〇年代初頭の経済状況よりもさらにひどい、大変な不景気につながる可能性もあり、アジアはこのような経済の落ち込みがもたらすあらゆる現象に苦しむことは目に見えています。信用危機と石油価格の上昇は、必ずやアジアにある第三世界の国々の苦しみを増すことになるでしょう。これらの国々では湾岸危機によって送金が途絶えたことで、国内での問題がさらに増大したのです。

第二次世界大戦後、日本国民は民族や政府間における紛争解決の手段としての戦争を放棄しました。以来、日本国民は常に、国際的紛争や地域内での新たな紛争を解決する手段として脅や武力は行使しないとの原則を固持してきましたが、イラクによるクウェート侵攻の後に日本には新しい意識が生まれました。日本が石油輸入の多くを中東に依存していることを忘れてはなりません。日本の首相が中東、とくにイラクとサウジアラビアを訪問したことは日本の中東危機への関心の高さを示しています。また、一九九一年春の、海部首相（当時）の東南アジア諸国訪問は、日本のアジア問題への関心を示すものであり、これはアジア諸国にとってよいことでしょう。

これは、新たな好ましい日本の姿であり、今後の日本国民及び政府の歩みの成功を、感謝の気持ちで祈りたいと思います。

パレスチナの問題が今また脚光を浴びています。これはこれまで四十年にも及ぶ問題で国連を通して何度も努力されましたが、結果をもたらせるかどうかは、未だに予断を許しません。国連でさえも有効な影響力を行使しえないのです。

現代にはあらゆる悪と悲しみがありますが、この二十世紀の最後の十年間はきわめて重要な十年間であり、日本を含むすべての国々は自らの歩みを注意深く見詰めなければなりません。

アジア太平洋地域の問題はまず政治であり、そして経済と文化の問題です。これらの問題は、新たに作り出されたものでないとしても、北の帝国主義とその余波である新帝国主義によってさらに悪化しました。そして、経済はしばしば得体のしれない力が握っており、経済力もまた人類のニーズに対する配慮や人類の命運についての真剣な考えなど持たない投機家の掌中にあるのです。強大国家はいずれも自らの政治的支配を保障するために自国の文化様式を押し付けてきます。強大国にはそれらの国々の文化様式を甘受しなければならない者の福祉については配慮に乏しいのです。

ユニセフの「世界の児童報告一九九一年」によれば、開発途上諸国全体の支出の二五パーセント強が軍と、非能率的な国营企業や関連機関への補助金に当てられており、その最大の部分を軍事支出が占めています。この報告書はさらに、環境破壊は富んだ国々の消費者が起こしているだけでなく、生態系を破壊することになっても燃料や食料、また家計収入を得なければな

らない飢えた人々によって行われていると述べています。さらに、この報告書には、子供を多く失う人々ほど、何人か生き残って家族を支え、親が年老いた時の安心のためにより多くの子供を産んでいると記されています。

平和の創造者としての日本の役割

広島と長崎への原子爆弾の投下によって、人類に対して初めて核が使用されました。これらの大量破壊兵器は非道德的で違法であり、生まれたばかりの罪もない赤ん坊を何の理由もなく何十万もの人々と一緒に殺したことは人類に対する犯罪です。イスラム教では兵士と市民を区別しないこのような兵器の使用をはつきりと禁止しています。同様に、老人、病人、非戦闘員、女性、児童を殺すこともイスラム法では許されておらず、また果樹園、畑、礼拝所、学校、病院等の破壊も禁じられています。

この原子爆弾の投下によって、日本国民は意見の主張や問題の解決のために軍事力を行使することは正しい方法ではないことをしっかりと肝に銘じました。その意味では、日本が平和を信じ、覇権獲得や戦争を目指すことなく、持続可能な開発の達成に向けて献身的に努力を傾けるために結果的に役立つたのかもしれない。核兵器撤廃を狙った草の根レベルでのこの平和

運動は精神性と道徳的価値を基盤にしたものが多く、日本国内ばかりでなく、たとえば庭野平和財団、平和のための日本宗教家協議会 (Japanese Religionist Council for Peace)、平和の波運動 (Peace Wave Movement) のように海外にまで活動範囲を拡げたものもあります。

さらに、道徳や倫理に基づく平和を旨とする国際団体 (たとえばMRA、世界宗教者平和会議 <World Conference on Religion and Peace>、世界イスラム協議会、国連大学等) は、日本が平和、愛、道徳、倫理に恵まれた青々とした樹が根を張り成長するのにふさわしい肥沃な土壌であることを知ったのです。日本には他にも多くの地方を基盤にした団体や全国規模の団体そして国際団体の支部がありますが、正義と調和のとれた共存を基盤とした平和のためにささやかに活動する一人として、これらすべての団体とそれを支援する皆様に敬意を表したいと思います。

七〇年代の終りまで、とくに西欧世界は日本の心を知ろうとはしませんでした。しかし日本が主要国として頭角を現し、産業や開発の分野における巨大国家となるにつれて、世界経済、とくに米国経済への影響力は増大しました。西側が日本の力を評価し始めたことは喜ばしいこととて、アジア人として誇りに思います。日本が全人類に仕えるという役割を是非全うして欲しいと思います。西欧世界は、敗戦以後、他から学び受け入ることを続けてきた国民が、今や、産業の活性化や開発について誇れる立場にあり、自らの考えを伝える用意があることに気づいたのです。一九二〇年に設立された世界最初の国際的イスラム団体で現在はカラチに本部を持

つ世界イスラム協議会（アラビア語で「モタマール・アルアラム・アルイスラミ」）はこの状況を認識し、早くも一九八一年には「イスラムと新しい世界秩序」をテーマに日本の役割を念頭に おいた世界セミナーを東京で開催しました。

この東京セミナーでの決議の一つは日本の役割を大きくアピールしたものでした。戦争で破壊されながら当時既に世界の大国となっていたアジアの自信あふれる国家である日本の使命について、「日本とイスラム世界」との副題で次のように記しています。

協議会はすべての小国が超大国の相反するイデオロギーやアプローチに巻き込まれないことが世界のより大きな利益につながり、偉大な文化遺産と現代性をあわせもつ日本は、人類の良き将来へのかがり火と希望としての役割を果たすことができると信じる。

戦後日本は、さまざまな科学技術分野において驚異的な進歩を遂げ、強力な工業国となった。協議会は、豊かなOPECのイスラム諸国や、労働力、農業資源、鉱業資源の豊富な他のイスラム諸国と協力することで、日本は世界から貧困を追放する、平和な世界秩序作りに大きな役割を果たすことができると考える。

協議会は、進歩的な日本政府と日本国民に対し、開発途上国が西欧への依存から脱却し、現行の混沌とした世界秩序を正すためにイスラム諸国と足並みを揃えて努力を傾け

るよう訴える。

今や唯一の超大国であるアメリカも、日本に関する限り無関心ではいられなくなりましした。一九九〇年四月二日号の『ニューズウィーク』誌は、「日本の対米貿易黒字が増したと同様に、日本が米国に注ぎ込む金額も増加した。東京はアメリカの事実上の銀行家になったのである。今や米国の金利は日本の投資家や政策決定者の態度や行動に大きく依存している」と書き、さらに同じ『ニューズウィーク』誌は、「日本の金融機関によつて、アメリカは巨額の予算赤字を出しながら経済的破滅を回避できている」「好むと好まざるとにかかわらず、日本は自分たちの考えを米国に伝える立場にある」とも述べています。同時に、日本はたとえ米国からであつても押しつけられるには飽き飽きしていることを世界は認識すべきでしょう。

残念ながら、豊かさのために怠惰になつた西欧は日本を御しやすいスケープゴートと見ており、また米国やヨーロッパ、なかでもフランスとドイツではジャパンバッシングが盛んである、と『ニューズウィーク』は述べています。しかし、彼等がビジネスにおける日本の能力と成功には賞賛の念を抱いているのもまた事実です。つまり、日本に対しては恐れと賞賛の念の双方を持っているのです。

日本はもはや純粹に経済的なことだけに關心を向けるのではなく、政治的な問題にも取り組

む必要があるでしょう。

新しい歩みをはじめた日本と世界

戦後四十年にわたって、日本はほとんどのような製品であれ、最高の品質のものを生産してきました。そして、九〇年代に入りその購買力を世界に顕示しはじめました。日本の経営者が一九九〇年五月にゴッホの「医師ガシエの肖像」とルノアールの「ムーン・ド・ラ・ギャレット」の二枚の名画を総額一億六〇〇〇万ドルという記録的な価格で購入したことは、日本人の金離れのよさを示しています。一部の大富豪といえる人たちだけでなく、一般の人たちまでも含め買い物熱にかき立てられており、たとえば人口一億二〇〇〇万の日本が世界のダイヤモンドの二〇パーセント以上を購入しています。階級的うらみの徴候が平等主義の日本の社会に入り込まないことを願ってやみません。

何年前かに日本の家庭で静かな革命が起こり始めました。この革命は、これまでは女性活動家の皆であった日本の消費者運動によって育てられたものです。九〇年代になると、彼等の政治力もますます増大し、二人の首相を辞任に追い込む一助となりました。これは、これらの運動の産みの親でさえも夢にも思わなかった事態だったでしょう。事実、一九八九年には日本の

マスコミは「女の時代」を主張し始めました。

一九九一年春、海部俊樹首相(当時)は、マレーシア、ブルネイ、タイ、シンガポール、フィリピンという、かつて日本が占領していた東南アジア五カ国を歴訪して大成をおさめ、何らいまわしい思い出を想起させることはありませんでした。シンガポールで海部首相は平和についての日本のビジョンと世界における日本の役割に関して明快な基調演説を行い、先の湾岸危機は日本にとって試練の時であったと述べられました。これは、「世界平和を維持する努力」において、日本がどのような役割を演じるべきかを真剣に考える機会となったでしょう。さらに、首相は、二大超大国を軸とした二極同盟は速やかに消滅しつつあり、それに代わるのは貿易を基盤とした多極的な構造であると述べられました。世界の指導者による最も誠意ある声明のひとつは、一九九一年五月三日にシンガポールで海部首相が行った重要政策演説であり、この時首相は「今年には太平洋戦争勃発五十周年にあたる。この転機にあたって今世紀の前半を振り返り、私はアジア太平洋地域の非常に多くの人々に堪え難い苦しみと悲しみを与えた日本の過去の行動に対し、心からの遺憾の意を表するものである。日本国民はこのような行為を二度と再び繰り返さないことを固く心に決めており、過去四十五年間にわたり平和国家として生きるとの理念と決意を実際の政策にいかすために懸命の努力を重ねてきた」と発言されたのです。たしかに「平和国家として」という言葉は首相の演説の中で繰り返し述べられたテーマでした。

このテーマを追求する中で、首相は国際関係における決定要素としての軍事力を否定されました。そのかわりに、首相は「重要なのは、経済力、科学技術力、社会的安定および秩序の総力である」と力説されたように、これらは日本の強みなのです。そして首相は初めて、日本の新しい役割はこれを超えて「政治、社会、外交政策の領域で努力する」ことであると指摘されました。私は平和と進歩を象徴する日本の蝶が、得体のしれない繭の中から抜け出すのを見る思いがしました。

少なくともトロイの略奪からクウェートの市街地での大虐殺に至るまで、歴史には集団虐殺の心理が数多く見られます。この地球というひとつの共同体において、私たちは共存し互いに助け合わなければなりません。いかなる宗教も、生き、生かし、相互に助け合い、愛し合うとの教えに反するものではありません。

元国連大学副学長で現在明治学院大学におられる武者小路公秀教授のように、「すべての宗教が望ましいと考える世界秩序について見解を表明しているわけではないが、『望ましい社会』の問題についてはすべての宗教が取り組んでいる」ことを指摘する人は多いでしょう。日本で進められている草の根レベルでの平和運動とともに、これらのことを考えあわせると、平和国家である日本は、差別のない、全人類のための平和の創造者としての途上にあると確信します。

日本はゆっくりと、しかし着実に、世界の平和維持にとって有効な力となりつつあります。日本は物理的には中東から遠い国ですが、先の湾岸戦争における日本の立派な役割は高い賞賛に値します。日本は湾岸戦争における侵略を終結させるために多額の財政的貢献を行ったばかりでなく、海部首相は中東地域に平和を確立するために中東の主要国すべてを歴訪しました。国連における日本の役割は同様に理解できるものであり、賞賛に値するものです。世界の七大富裕工業国の中でも日本の役割は最高の賛辞にふさわしいでしょう。第三世界諸国の国民は、国民の水準をあらゆる社会経済分野において引き上げる上で、日本がなお一層効果的な役割を演じるよう期待しています。偉大で有能な平和の使者としての日本に素晴らしい未来が訪れるようお祈りします。

第四章 祖国愛から人類愛へ

ラジモハン・ガンジー上院議員

(インド人・ヒンズー教)



ラジモハン・ガンジー上院議員

1935年生まれ。祖父は独立の父マハトマ・ガンジー。56年デリー大学経済学修士。MRA創始者ブックマン博士と各国で平和活動に従事。64年「ヒンマット誌」編集長。76年検閲制度に反対して投獄さる。85年米国で宗教対立を越えたインド亜大陸の和平を研究。89年上院議員。90年彼の生涯「真実との出逢い」が映画化。

世界宗教の発祥の地アジアで数限りない紛争を起こしてきた

世界の主な宗教はアジアの地で生まれ育まれてきました。この事実を私たちはむしろ恐ろしいことだと捉えなければなりません。アジアの地は精神的に豊かであるにもかかわらず、そこに住む人の心はかたくなに閉ざされ、預言者や聖人の言葉を聞く耳を持たなかったというところにほかならないからです。神が預言者をアジアに遣わしたのは、預言者を遣わすに値するほどアジアの人々が立派であったのか、それとも墮落しきっていて誰よりも預言者を必要としていたからなのか、ぜひとも神に伺いたいものです。

アジアが世界平和に対して、どのような貢献をできるのかを見極めるまえに、私はアジアでどれほど多くの紛争が起きてきたのかを指摘しておきたいと思います。第二次世界大戦後の歴史だけを見ても、インド人とパキスタン人同胞による殺害（一九四七年）、ベトナム戦争、カンボジアの大量虐殺、バングラデシュでの流血、イラン、イラク戦争、湾岸戦争などが起きています。この他、民族のアイデンティティーや宗教の権利、ナショナリズム、分離独立運動、領土保全を旗印とした衝突など、あまりとりあげられていない対立が無数に起きています。

さらに、このような不愉快な真実には耳を貸さない地域が随所にあることを認めなければな

りません。他人を非難するためではなく、謙虚な気持ちで私はこの事実を直視したいのです。アジアの過ちはすなわち私の過ちであり、反省こそすれ責める気持ちはありません。とりわけ、私に関わる地域（インド）を思い描いてみても、インド国民の八三パーセントはヒンズー教徒ですが、ほんとうのヒンズー教の教えを理解している人は果してどのくらいいるのでしょうか。

「マハーバーラタ」の真髄をヒンズー教徒は理解していない

古代ヒンズー教の叙事詩として有名な「マハーバーラタ」の作者ヴヤサは詩人であると同時に預言者でもありました。しかし、人生のジレンマやパラドックスの描出、善や悪の功利描写、心に残る人物や忘我の状況を描くことにかけては天才的な詩人であったためかえてそれが災いし、ヒンズー教徒は詩人としてのヴヤサのみを心に留め、預言者としての彼を忘れている場合が多いのです。

ヴヤサが「マハーバーラタ」に込めたメッセージは単純明快で、「暴力と復讐の行き着く果ては空しい」ということでした。憎しみや欲望などの激情は深い空しさに通じることを表現しており、事実、物語は全員が滅亡することで幕を閉じます。悪漢が征服されるだけでなく、英

雄も消えていなくなつてしまふ。最後には何もなく、虚無だけが残される。虚無は憎しみという暗闇から生まれ、憎む者も憎まれる者も滅ぼさずにはおかないのです。

このウヤサの教えはなかなか、人の心の目にとまりません。「正義」の指導者であるクリシユナやユドヒスチール、アルジュナの行為についての議論は盛んに行われています。また、「悪」の指導者であるカルナとドリオドハーナが何度となく見せた勇敢な行為についても議論されています。これらの議論は学問的で、たいへん熱がこもっています。

一説のように、ウヤサが唯一の著者であれば詩人ウヤサの魂（数人の詩人がウヤサの名のもとに書いたのであればその詩人たちの魂）は、二千年以上も後までこの作品が引き続き討論のテーマになつてゐることを大いに誇りに思うことでしょう。しかしながら、預言者としてのウヤサはどうでしょうか。インド国民に警告を無視され侮辱されてきたのですから、おそらく誇りとは裏腹のものを感ずるでしょう。ほとんどのヒンズー教徒は、『マハーバーラタ』の複雑な人間模様について聞かれればよどみなく答えるでしょうが、『マハーバーラタ』の教えの真髄は何かとたずねられると答えに窮してしまいます。

蛇足ですが、日曜朝の連続テレビドラマ「マハーバーラタ」（二年間放映）は我が国きつての人氣番組でした。また、この現代版「マハーバーラタ」の脚本を書いたのはラーイ・マスム・ラーザというイスラム教徒で、彼は私の友人でもあります。ラーザはウヤサのメッセージ

を強調しようとしたのだと思いますが、依然としてヴヤサは預言者としてよりも詩人としての知名度の方が高いのです。

世界平和への普遍的な倫理とは

ヒンズー教は懐が深くさまざまな宗教やしきたりをおおらかに受け入れます。そのためヒンズー教の信仰の中心は何かと訊かれると答えに困りさえするので。解釈はいろいろあります。多くのヒンズー教徒は、有形無形を問わずさまざまに理解することのできる、唯一至上の存在あるいは唯一の神を信じ、生命の普遍性や神聖さを信じています。そしてすべての真正な宗教は神の純粹な愛の表れであり、寛容をもって理解すべきだと信じているのです。

『マハーバーラタ』の詩篇の一つである「バガヴァッド・ギータ」(神の歌の意味)では、無私
の行為は人の義務であり、神の人への慈愛は人の希望であるとたたえています。また、『マハーバーラタ』には、現代の平和と協調をもたらす重要な鍵がとくにユドヒスチールの性格にとよせて書かれています。ユドヒスチールは、「天国が極楽であつても、兄弟や敵しい旅についできた忠犬も一緒に入らないのなら入らない」と言います。このような思いやりの心を持っていたために、天国の管理人に呼び止められ、彼は願いを聞き入れてもらった上で天国に入る

のです。死の神は、ユドヒスチールの「正義感、眞実を語る言葉、許しの心、自制心」を褒めたたえているのです。

国家、宗教および人種を越えた融和と共生をもたらし、世界平和の基礎となる普遍的な倫理を何に求めればいいのか。私は、死の神がユドヒスチールに認めたこの四つの資質、つまり「正義感」「眞実を語る言葉」「許しの心」そして「自制心」が世界調和の鍵であり、求めている普遍的倫理の核になりえると考えています。そして、これに『ラーマーヤナ』の英雄ラーマが備えていたと言われる資質、「語り口のさわやかさ」も付け加えた方がよいでしょう。ラーマは「語り口は優しく、決して激することはなく、常に喜びを与えるように話した」と伝えられています。

この四つないし五つの資質と後述する「隣人の痛みを思いやること」はアジアの地で教えられたものでありながら、アジアおよびインドの人たちにとって自然なこと、当たり前なことではありません。しかしながらこれらの資質は、世界、アジアそしてインドの社会が必要としているものでしょう。

自分が傷つくと思うことを他人にしてはならない

ボンベイやプーナから汽車で数時間行くとアーメドナガールの町に着きます。イスラムの支配者たちが砦を作った町で、英国統治時代その砦はイギリス将兵の宿舎になっていました。一九四二年から一九四五年にかけては、一九四七年に独立したインド政府の立役者となったネールやパテル、アザドを含むエリート囚人が拘留されていたのです。

彼等エリート囚人は読書や執筆や庭いじりをしたり、トランプやバドミントンに興じたりしていました。独立インドの将来について話し合うことはありませんでした。いかにインドから英国を追放するかに気をとられていたのもその一因でしょうが、彼等の戦略には大きな隔たりがあり、感情が激昂し、互いに大きな溝ができていたことが主な原因でした。これまでの出来事を振り返るために彼等も一度は顔を揃えましたが、結局は非難の応酬で会談は決裂してしまつたといひます。

語り口のさわやかさや許しの心、自制心が欠如していたために、祖国の将来の青写真に合意するせつかくの機会をみすみす逃してしまつたのです。

悲しいことに、このように人の話を聞かず合意形成ができないのはインドの国民性であり、

この国民性をどうにかしなければ世界平和にはとうてい貢献できません。たとえば、我が国の議員は常に相手の話を聞き合意形成につとめる努力を怠っていると云わざるを得ないので。議員が「政府や他党は他の意見を聞かない」と非難するのは日常茶飯事です。非難した当の議員が自分の言いたいことを言い終わると、人の演説など聞く耳持たぬとばかりに原稿をつかんでさっさと退場する光景も珍しくありません。また、数人あるいは大勢の議員が同時に話しまくることすらよくあります。

『マハーバーラタ』の中で聖人ブリハシパティはユドヒスチールに「とどのつまり正義の原則とは、自分が傷つくと思うことを他人にしてはならないということである」と言っています。この定義にしたがえば、自分の話は聞いて欲しいくせに、人の話は聞きたくないというインドの議員は正義に反していることになるでしょう。インドの国会議員がたまたまこの講演を聞いたとしても、私の率直な意見を不愉快に感じられる言葉とは思わないでくれることを願っています。

今こそマハトマ・ガンジীর教えが求められている

インドは他の国に影響を与えてきました。一九九一年の九月下旬、ポーランドでワレサ大統領

領の仲間やアダム・ミクニツクを含む「連帯」の指導者たちから、「ポーランドが自由と民主主義を求めて戦ったときに、マハトマ・ガンジーの民衆と一体となった非暴力主義を何回も使わせてもらった」という話を聞きました。また、バルト海に面したりトアニアでもガンジーの教えを一部使いたいという人がいることも聞いています。

マハトマ・ガンジーが暴力に訴えず、かつ外国の支配者に対して憎しみの感情を極力おさえてインドの独立を勝ち取ったことは素晴らしい業績です。無数の人種、宗教、種族を抱える今日のインドにとって、この非暴力の教えは以前にも増して重要でしょう。しかし、我々は毎日憎しみや暴力行為に走り、ガンジーをはじめ我が国の多くの偉人の教えを無視しているのです。

また、「善き人とは他人の痛みが分かる人である」というガンジーの教えも無視されていません。この「善き人」の定義は、グジュラート出身のヒンズー詩人ナルシー・メータの詩からの引用であり、ガンジー自身が作ったものではありませんが、この定義は重要かつ革命的なものです。「善き人とは、規則や戒律や断食日をすべて守る人を言うのではない。善き人とは他人の痛みが分かる人のことである」とマハトマ・ガンジーは教えています。つまり、イスラム教徒の痛みが分かるヒンズー教徒は良き人であり、ヒンズー教徒の痛みが分かるイスラム教徒は善き人であり、アンタツチャブル（ヒンズー教の四階級にも属さない者）の痛みが分かる上位カーストのヒンズー教徒は善き人である、と。この考え方は今なお革命的といえるでしょう。つ

マハトマ・ガンジーの言葉
(Words of Mahatma Gandhi)

7つの罪悪

(The Seven Sins)

- (1) 原則なき政治
(Politics without Principle)
- (2) 労働なき富
(Wealth without Work)
- (3) 良心なき快樂
(Pleasure without Conscience)
- (4) 徳なき知識
(Knowledge without Character)
- (5) 道義なき商い
(Commerce without Morality)
- (6) 人間性なき科学
(Science without Humanity)
- (7) 犠牲なき信仰
(Worship without Sacrifice)

いにガンジーは、「イスラム教徒に対して妥協策をとった」と思い込んだ人々に暗殺されました。今でもインドにはガンジーのイスラム教徒やアンタツチャブルに対する姿勢を是としない人がたくさんいます。しかし、これだけはためらうことなく申しあげたいのです。「隣人の痛みを思いやらねばならない」というガンジーの教えは、民族やナショナリズムがぶつかり合っている今日の世界にこそ重要なのです。この教えこそ、我々が求めている倫理の核に組み入れるべきではないでしょうか。

ヒンズー教の視点から世界平和の基礎となる倫理の核を説明しようとしたわけですが、これは仏教やキリスト教、イスラム教の倫理の教えと矛盾しないどころか、それほど違わないものです。「隣人の痛みを思いやらねばならない」という表現は大まかで不完全ではありますが、アジアのメッセージと表現しても通じるものだと思います。

世界は一つに結ばれている

最初に、アジアの悲しくも不穏な現実について触れましたが、ここで、果たしてアジアのメッセージが世界にとつて関心があるものか考えてみたいと思います。

ヨーロッパやアメリカ、アフリカ、オーストラリアなどでは、今日さまざまな不安を抱えて

います。これらの地域の人々はアジアの協力を息を殺して待ち望んでいるのでしようか。私の考えでは、世界は日本や東アジアの経済の繁栄を賞賛と羨望と警戒心のいり混じった気持ちで眺めていると思います。それ以外のアジア地域については無関心と心配とが交錯していると思われまふ。アジア以外の地域でも自国に大きな問題を抱えているから無関心であり、アジアは膨大な人口を抱え、人は一所に留まら^{ひびく}ないから心配なのです。

九一年九月に訪欧した際、フランスの雑誌の表紙には「移民か侵略か」という文字が躍り、ドイツの移民收容所の外では若者の集団が氣勢を上げながらデモをしていました。世界はアジアについては心の窓を開こうとはせず、かえつて家の戸を閉じようとしています。短絡的だと言われるかもしれませんが、あながち間違つてはいないでしょう。

この数年間にソ連や東欧、南アフリカに起きた歴史的な変革は一体何を意味しているのでしょうか。その全貌を把握することはまだまだ難しいのですが、地球上の自由な地域が広がり、平和の展望が拡大したことは確実に言えるでしょう。一般人から恐怖が去り、圧制的な政府は支配する意志を失い、ドイツの悪意の壁や、南アフリカのアパルトヘイトなどの醜い壁が崩壊し、人々は街に繰り出して、自然に盛り上がった感謝の集いで喜びを発散し、財布の紐を緩めたのです。東欧であのような変化が起ころうとは誰も考えず、予想だにいませんでした。九月にワルシャワで会ったポーランド人の教授の言葉を借りれば、まさに、「奇跡だった」の

です。

世界は多くの地域に分かれているようで実は一つであり、お互いに結ばれています。その意味で、人知れぬ間接的な方法であれ、神秘的な方法であれ、東欧やソ連、南アフリカの人々の人権を求めて真剣に努力したり、自由の到来を心から祈ったアジアの我々も、それなりの役割を果たしたといえるでしょう。その力は恐らく小さかったにしても、大きな変革に役立つたことは確かでしょう。

ヨーロッパで新しく自由を手にした国々や自由にもう一步という南アフリカの人々の幸福や希望を我々が共に考えることで、アジアは世界の未来と平和に多少なりとも貢献できるのではないでしょう。また、ごく最近独裁を退け、より自由の空気に触れているラテン・アメリカの人々のことを自分達自身の問題として考えましょう。

共産主義とナシヨナリズムの共通点

アジアの我々は引き続きヨーロッパやアフリカで新たに世界を悩ましている妖怪について心から祈ろうではありませんか。ナシヨナリズムは今に始まったことではありませんが、共産主義という蓋の下で隠れて見えなかっただけです。むしろその蓋の下でナシヨナリズムは激化し

ていたのです。「まさか」と思われるかもしれませんが、共産主義とナシヨナリズムに全く共通しているのは罪の転嫁です。「我々が抱えている問題の原因は他人にある。他の階級や他の民族あるいは他の国家を束縛、鎮圧、包囲すれば平和はおのずと実現し前進する」という考えが共産主義とナシヨナリズムの核心にあるのです。

セルビア人とクロアチア人は相戦い、バルト諸国は共産主義を捨て、旧ソ連の共和国は独立を宣言しました。この調子で行くと国連に加盟する小国は三万七〇〇〇国になるだろうと国連事務総長は言っています。数が少なければよいというものでもなく、数が多いから悪いわけはありません。国旗が増えたからと言って、地平線の景観が損なわれるわけはなく、世界地図に描き込まれる色が増えても、それはさしたる問題ではありません。いちばんの問題は民族がきちんと分布ないしは分離されていないという点にあります。

旧ソ連では非ロシア系共和国に住むロシア人は三〇〇〇万人にのぼっています。また、セルビア人でクロアチアに住んでいる人もいれば、クロアチア人でセルビアに住んでいる人もいます。クロアチア人がクロアチアの中でもセルビア人が多数を占める地域に住んでいる場合もある。境界線を引いて、こちらはセルビア人だけ、あちらはクロアチア人だけというわけにはいかない。世界中のどこでも複数の民族がいる地域や領域、国は例外なくこのような地図上の線引という問題を抱えているのです。



この問題は想像以上に深刻です。国や、人種、種族、一族、宗教など自分の同胞に対する愛は自己愛とは比較にならないほど崇高であるだけに、一層深刻にならざるを得ないのです。

著名な東欧評論家ティモシー・ガートン・アツシュが指摘しているように、「国旗を見ると胸が高鳴り、国歌を斉唱すると声が詰まる」ことをとやかかいうのはおかしいでしょう。ところがそれが裏目に出ると、相手の国旗を見て剣を抜くこともあるでしょう。また、他国民や他民族などに対する嫌悪が自国民や民族同胞に対する愛にすり替えられている場合も多いのです。ナシヨナリズムは愛国心の衣をまとい、憎しみの声は喉をからすほど叫ばれ、ますます狭くなっている世界で部族意識が膨らんでいます。

南アフリカでいまだに続いている黒人部族間の紛争が解決されなければ、アジアやヨーロッパの民族紛争に見られるのと同じような悲しみと幻滅が生まれるでしょう。

アジアはこの点について語る必要がありますが、悲しいかな、今日のアジアにはその資格がないのです。実績から見れば、アジアは紛争を奨励していることになりました。しかし、その昔インドの聖人は「この人は味方、あの人は他人と思う気持ちは狭い心である。優れた人間にとっては世界全体が一つの家族である」と言いました。

ヨーロッパの一部で再燃しているナショナリズムは、EC設立の原動力であり欧州合衆国の実現にまで至るかもしれない国家を超越した欧州主義からの離脱であることは言うまでもありません。この「新しい」ナショナリズムの延長線上で、一部のヨーロッパ人の胸中には「キリスト教のヨーロッパはイスラム教の中東に対して立ち上がらねばならない」という考えがあります。この考え方でいくと、ヨーロッパの白人キリスト教徒対アジアの有色イスラム教徒という図式になってしまいます。

このような考え方が短絡的過ぎることは明白です。ユーゴスラビアやアルバニアやハンガリーのイスラム教徒は有色でもアジア人でもない。エジプトのキリスト教徒はヨーロッパ人でも白人でもない。ヨーロッパに参入したいというトルコの願いはどうなるのでしょうか。短絡的過ぎる考え方に上に問題があるのは愚かさです。十字軍の復活は、イスラム教徒にとってもキ

リスト教徒にとつても、いや世界にとつても何の益にもならないのです。キリスト教徒もイスラム教徒も神の名において無神論を唱える共産主義を拒絶しました。今キリスト教とイスラム教が対立すれば大きな災いが生じるばかりではなく、無神論を立証することになります。まさにキリスト教とイスラム教の双方に多くの配慮と知恵と勇気が求められているのです。

アジアの果たすべき役割とは？

このような世界でアジアはどのような役割を果たすべきなのでしょう。まず、自分の身の回りを整えることです。預言者や聖人がアジアの地に生まれ、紛争の原因を診断し、解決方法を示したという事実が今日ではプラスよりもマイナスに働き、アジア人を物知り顔にした独り善がりになっています。

仏陀の慈悲の教えと七〇年代半ばから後半にかけてカンボジアで起きた出来事や近年のスリランカでの出来事は両立するのでしょうか。イスラムの神への服従を語る預言者と、誇りとナシヨナリズムをかけた近年のイラン、イラクの長期戦、イスラムの教えと湾岸戦争、ガンジーの教えと、日々憎しみに火を注ぐインドの暴力とをそれぞれ並べて考えてみるべきです。自我を葬ることを唱えたキリストの教えと今日の中東各地で見られる他者を葬るといふ現状とをどう

考えればいいのでしようか。このような現実の下で、アジアが預言者や聖人の生誕地であると思ふに、得意になつて吹聴できるでしようか。

いや、このような状況で得意満面で慰めを追い求めるのは現実からの逃避に過ぎません。我々が必要としているのは慰めではなく勇氣と知恵と忍耐です。私には他人の痛みが分かるだろうか。敵の考え方を理解できるだろうか。人の話を聴いているだろうか。対話をしているだろうか。許すことができるだろうか。自制をしているだろうか。自分の話は正直かつ控え目で率直の中に優しさがあるだろうか。私の近所で、祖国で、世界で弱者は保護されているだろうか。アジア人はこのことを自問自答しなければならないのです。

また、なぜアジア各地でテロリズムが台頭しているのかも考えなければなりません。テロが横行するのは、立法、行政、司法そして報道機関が虐げられた人々をないがしろにするときです。言論が沈黙させられると弾丸が飛びます。弾丸が飛べば被害を被るのは罪科のある人々よりも無実の人々です。弱者は抑圧され、民主主義は弾圧され、文化的アイデンティティは銃の煙にまかれて消えてしまうのです。民主制度が腐敗するとテロリズムが榮え、テロが横行すると民主主義を擁護する人は非民主的な手段を用いることになり、テロリストは新たな活力を得ることになります。独裁者とテロリストが力をつけると、両者の間で人民は押しつぶされるのです。

貧困は確かに暴力の温床でしょう。世界各地で市場経済が国家主導型経済に比べて格段の成功をおさめているのも確かです。しかし、市場経済がアジアや世界からテロを一掃し、民族や国家主義的なグループの橋渡しをする宗教であるかのように錯誤してはならないのです。共産主義には欠点があり残酷でした。共産主義の滅亡に泣くことはありませんが、共産主義と共に理想主義を埋葬してはなりません。享楽主義もまた欠点だらけで残酷なものになりえるのです。

ヒンズーの包容力が幸福な未来をつくる礎に

アジアに秩序を回復すべきであるとする、ヒンズー教徒はまずヒンズー教が直面している試練を乗り越えなければなりません。イスラム教徒にも、キリスト教徒にも、仏教徒にも同じことが言えるでしょう。

現下の世界情勢でヒンズー教はたいへん難しい課題を抱えています。ヒンズー社会の諸悪の根源はヒンズー教徒以外の責任であるとする否定的ヒンズー教の闘士達にヒンズー教は占拠されてしまっています。この否定的かつ危険なヒンズー教徒は、ヒンズー社会の視覚障害者や身体障害者の苦しみ、ホームレスの人々の窮状を直視しようとしません。また依然として階級制

と媚びへつらいの多い生活、インドのあらゆる場面で見られる汚職腐敗を直視しようとはしないのです。さらに他教徒からヒンズー教徒に対して行われた過去の不公平な行為をひたすら強調することもありません。

幸いなことに、否定的ヒンズー教徒、現状追認型ではないヒンズー教徒が、よりきれいな環境、より和があり、より平等でより繁栄し、倫理観が高く、平和なインドを目指して活発に発言を始めています。

ここで、我が国のカースト制について触れると、それには目覚ましい改善が見られます。階級制の考え方が一掃されたわけではなく、残念ながら暴力や抑圧はまだ続いています。カーストが違えば社会生活も異なるという状態もいまだに広く浸透しています。しかし、以前に比べれば、異なるカースト間の婚姻や混在が広まっており、子供がいないヒンズー教徒の夫婦が下のカーストの子供を養子にする例も増えてきました。女子を養子に迎えることについてもこだわりが少なくなってきました。

長い試練をじつと耐えることができるヒンズーの懐の深さ、困窮の極に達していながらも本当に困っている他人に米やパン、はては狭い場所さえも分けることができるヒンズーの包容力がより幸福な未来を作る礎となりうるでしょう。不屈の精神と分かち合う気持ちは徳であり、貧しいながら人生を積極的に生きようとすることもまた仁徳です。ただし、その徳は心しない

と悪徳や宿命論、停滞につながる危険をはらんでいます。

和解といえ、インド東北部に住む友人のことを私は思い出します。彼は部族対立で兄弟二人を失い、その憎しみのあまり復讐を計画しました。しかし、そのときに自分の心の奥底で、「おまえは人に傷つけられたことにこだわっているが、人を傷つけたことはないのか？」と囁く声を聞いたといふのです。傷つけ合い、憎しみ合うなかからは果てしない争いしか生まれず、復讐はまた新たな復讐を生んでしまいます。彼は自ら反省し、丸腰で「敵」に近づくことと和解が成立しました。この話に感化された人は多く、今の私達に役立つ話だと思えます。

日本ならではの良さをアジアに輸出してゆく

日本で言うアジアとインドで言うアジアはまったく異なっています。日本の政治家は非常に礼儀正しく、言葉づかいも爽やかなようです。セミナーや討論会でも講演者の話が中断されることもないし、講演者が着席した後に反論もありません。日本では優秀さ、完全さ、美しさ、清潔さ、きれいな空気を大切にしているようです。

日本の世界への影響力は今に始まったことではありません。パリのオルセー美術館に行けば日本美術が斬新なフランス印象派の隆盛に果たした役割を見ることができます。一九九〇年、

尾崎行雄記念討論会に出席するため来日しましたが、その時には東京の古い町並みの店の裏の曲がりくねった路地裏でも、ごみ一つなく文句のつけようもないほど清潔なのに驚きました。ものや食べ物、飲み物、人間は溢れていても、地面や壁にはごみ一つ、引つ掻き傷一つありませんでした。日本は果敢にも経済、スポーツ、技術で金メダルを目指して努力しています。日本人は個人の勝利よりも会社や国の成功を優先しているようです。日本では政党があまり細胞分裂をくり返さず一つの手で数えられるくらいしかありませんが、インドやポーランドでは両手の指に両足の指をたして数えても足りないほどの政党があります。このような日本の良さを是非とも輸出して欲しいと思います。

今世紀初頭、日本がロシアに勝利したとき、アジア人はたいへん勇気づけられました。日露戦争の勝利によって「アジアは欧米に劣っている」という固定概念が打ち砕かれたからです。第二次世界大戦については、戦後謙虚な気持ちのステーツマンシップでアジア諸国に謝罪した日本の政治家の行動を思い出すだけにしておきましょう。その謝罪が相手の心を動かし、日本とアジア諸国に橋が架けられ、その橋の上を今日の日本製品が渡っています。謝罪をしたとき、輸出をすることは考えていなかっただけでしょう。輸出が実現したのは、普通ではできない謝罪という気高い意思表示に対して神が与えた褒美でした。その同じ気持ちで、九一年九月から十月にかけて明仁天皇は東南アジアで「日本は平和国家として生き、あのもっとも不幸な戦争

の惨禍は決して繰り返すことはありません」と述べられました。

日本では世界の様子がテレビを通じて茶の間に届けられています。そして、世界各地の貧困や紛争が映し出され、相互依存の世界についても認識されているようです。一方、世界各地では憎しみの感情が強く残っています。「国際化」という言葉も日本ではたいへんよく使われています。また、国連の平和維持活動に関する法令について審議されました。自国に直接脅威がなくても国際平和や国際的安定を保障する一翼を担うことを日本が考えていることは重要な進展だと思えます。

しかし、日本の役割はそれだけではないはずです。経済援助や平和維持活動は特定の地域で一時的に平和を維持させることができても、それらが平和をもたらしたり、平和を長期的に維持させるわけではありません。経済援助や軍隊は憎しみを和らげることはできないのです。

日本は世界の友に

では、憎しみを和らげることができるのは何でしょうか。九一年九月末に私はベルリンである人に会いました。この人はヒトラー時代からスターリン時代にかけて悲惨な経験をした人で、ドイツ統一を何よりも心から望み、その祈りが通じたのでした。私は彼に「過去四十五年

異質で不幸な状態に置かれていた東独の人がどうしたら西独に溶け込めるのか意見を聞かせて欲しい」とたずねました。その時、彼は「友情によって」と答えてくれたのです。この「友情」という一言が私の心を打ち、今なお鳴り響いています。

「日本は世界の友に」。どうかこの単純な考えを熟考していただきたいのです。友人ならば経済的援助もするでしょう。しかし、友人は経済援助さえすればいいというものではありません。友人は隣人の戦いを止めさせることができるかもしれませんが。しかし、友人は警察官ではなく、警察官以上のものです。出向いて話を聞くために時間を作り、また、親身になり、信頼を獲得し、以後ずっとその信頼に値しなければならぬでしょう。仲違いした夫婦や父と子を例にとると、まず別々に友人に話し、次に友人立ち合いの下で話し合い、そして友人が立ち合っていないでも進んで自分達同士で話すようになり、ついには元の鞘さやに納まる。カンボジアの和解交渉で、日本は重要な仲介役を果たしました。ただの仲介人なら「仲介料」をとり、仕事が終わればどこかへ行ってしまう。しかし、友人は消えてしまわない。友人とは仲介人以上のものなのです。

日本製のカメラやビデオは世界の友人や家族を親密にし、日本車は世界中どこでも同じサービスが受けられ、日本製のテレビは世界のあらゆる国の出来事を茶の間に伝えていきます。しかし、どんなに優秀で親しみのある日本製品でも、日本人の顔、手、心の代用にはならないでし

よう。

世界の友としての日本。セルビア人やクロアチア人、アメリカ人やアゼルバイジャン人、キリスト教徒やイスラム教徒、ヒンズー教徒、シンハリ人やタミール人、そしてあらゆる派に属するカンボジア人の友人になって欲しいと思います。このようなことを言うと、友を求める相手の数の多さに恐れをなすかもしれません。しかし、日本だけが友情を提供することにはならないと私は信じています。他の国々も友情の使節として日本との協力を望むでしょう。世界の友としての日本は、言い換えれば、これまでの祖国愛を人類愛へと改宗することによって実現します。現在は歴史的にも平和の気運が高まっている時期で、日本が世界平和の確立に貢献できるまたとない機会と思われます。日本が経済発展をなしとげた「忍耐」、「努力」、「想像力」、「きめ細かな心遣い」。こうしたことが平和を築くのに必要な資質です。その意味でも、M R A などと連携する形で紛争処理の研究センターのようなものを設けていただくよう日本の方々に要望したいと思います。さあ、共に平和を担う友情の航海に出ようではありませんか。

第五章 世界平和は一人ひとりから

四天王寺管長 瀧藤尊教

一燈園同人 石川洋

高等教育推進協会会長 サレハ夫人

(マレーシア人)



瀧藤尊教

1922年生まれ。東京帝国大学と京都大学で学ぶ。比叡山大仙院住職、四天王寺中学・高校長を経て四天王寺管長。



石川洋

1930年生まれ。一燈園創始者西田天香に師事。現在一燈園同人。アジアの難民、スラム、被爆者の支援等で活躍。



サレハ夫人

1923年生まれ。49年ロンドン大卒。現在高等教育推進協会会長。MRA マレーシア協会会長。マハティール首相義姉。

「和を以て貴しとなす」に秘められた意味とは

四天王寺管長 瀧藤尊教

今日、このような各宗教を背景とする最高の方々の立派なお話を拝聴いたしまして、心洗われた感であります。

今回の演題に「アジアの貢献」とありますが、それを見て私は一九二二年にアインシュタイン博士が日本に來られまして、去るに当たつて残されたメッセーヂを思い浮かべるのでございます。「世界の国々はまだまだ戦いに明け暮れているが、最後には戦い疲れるときがくるであろう。その時に人類はアジアに盟主を求めらるであろう。世界の文化はアジアに始まってアジアに還る」といったメッセーヂでした。今日いみじくもアジアにおいてそれぞれ指導を願つている聖者たちのお話をうかがい、アインシュタインのメッセーヂが思いおこされ、大変心温まるものを感じます。

しかしながら、今日までの人類を眺めてみますと、どうしてこう人間はこのような殺しあいの血がたぎっているのだらうと、悲しい思いにかられてなりません。強者が弱者を侵略し、その覇を競つて長い歴史が血塗られてまいりました。近代以降も、あるいは植民地政策や共産主

義の出現と、いろいろな惨禍を生んでまいりました。これからの人類は何としてもこういった惨禍から離れた共生の世界を確立せねばならないと、つねづね知らされ教えられ考えさせられています。しかし、なかなか共生の世界の本当の目覚めというのが容易にすべての人々に浸透しえない現状にございます。こういった世界の宗教職にあられる各賢者の方々がそれぞれの信奉者に対して教えをご徹底願うならば、それが燎原（ろうげん）の火となつて大きく世界に力を浸透させていくと思わざるえないでございます。

とき、あたかも秋が深まつてまいりました。私は落葉を見つめていとある詩を思い浮かべるのでございます。「はらはらと 落つる木の葉にまじりきて 栗の実ひとつ 土に声あり」という詩でございます。まことすべて世の中の営みというのは永遠に命が続き、流れているのでございます。大木から落ちた栗の実は、土という母なる故郷に帰りついて、その帰還を報告いたします。大地も温かく迎えます。やがてまた、そこから新しい栗の木が成長していくわけでございます。

いのちというものは、ガンジスの川の流れのごとく、宇宙という大きな川の中を流れる光の波であろうかと思うわけでございます。肉の眼に生と見え、死と見えるこの姿は、いわゆる現象面の現れにすぎない。本来的な命は永遠に変わるごとくなく、流れているものでございます。千差万別の宇宙のものみなすべてが、同じ我々の水のひとつの現れとしての、波であるといっ

た自覚がこの詩の中から汲み取ることができると言っています。

天地の間は空飛ぶ鳥も地を駆る獣も土も木も草もすべてが天地の命をそれぞれに宿し、それぞれに互いに助け合い、交わり合つて働くところにこそ、その真骨頂が存するわけでございます。ゲーテの詩の中に「あらゆるものが一つの世界をおりなしてある。一つひとつが互いに働き、互いに輝いてある」という一節があるように言っています。あるいは、「遠く近く、近く遠く、大は小に、小は大に、各々その姿を示現する」と言う詩も言っています。まこと、大波が小波に、小波が大波になり、遠い波が近くに現れ、近い波が遠くに現れる現象は千差万別ではあります。同じ泉の水の源であると知らされるとき、すべて皆同胞はらからの念に心のかぶりを覚ゆるわけでございます。

今から一千四百年前に聖徳太子が私のおります四天王寺を建立なされたので言っていますが、聖徳太子は十七条憲法の第一条に「和を以て貴しとなす」という名言を残しています。その和は単に仲よくせよという単純な言葉を述べたわけではないので言っています。本体たる命の源に思いを馳せ、すべて人類同胞だという大自覚に達し、相互の敬愛の念に立つことによつて、初めて成り立つ大和の世界を強調されたものであるかと拝察いたしておるわけでございます。またその十五条には、「私を持つことによつて争いが起り、私をなくすことによつて第一条の和が成り立つ」ということをさらに追求しておられます。

民族のエゴ、国家のエゴ、個人のエゴ。こういったエゴイズムがすべての社会を傷つけ、一つの世界だけに局限する人間の問題が、幾多の争いを引き起こしています。何としても私たちは、宇宙の中の同じ流れである各々の立場を相互に尊重し、敬愛しながらしっかりと手を差し伸べ、助け合った生きざまを確立していかなければならないと切に思う次第です。

今日の世界の情勢はまだまだ樂觀できない状況でございます。本当に心を宗教にいたす者は、あるいは思想にいたす者は今こそ団結して大いにこういった人類同胞の営みにまい進せねばならないと考えています。かつて、沼津の駅に下車いたしましたときに、「原子爆弾より強いもの、それは愛である」と石に刻まれた碑が立っておりました。「ちよつとキザかなあ」とそのときは思いましたが、今思い起こせば決してキザではなく、真に貴い教えだと思えます。日本は、広島、長崎において原爆の洗礼を受けた唯一の国、民族でございます。それゆえなお遙かに強い愛の心を全世界に私たちが手で大きく広げてゆく責務を感じるのでございます。

無尽燈という聖徳太子が注釈されました教えの一節に、居士に説得された悪魔たちが悪魔の世界に帰ることを大変いやがる物語がございます。それに対して、居士は「闇の夜に一燈の灯をつければ闇は明るくなる。さらに一燈を二燈に三燈にとつけてゆけば、無尽にその光が天地を輝かす。あなたがたはその一燈になつてもらいたい」と縷々（つづ）教示したところ、悪魔たちは潔く魔界に帰って行ったというのです。真の世界の平和への道はなかなか遠ございますが、一人

ひとりが絶えずそういった心を抱き、善念、良き想念を天地に大きく拡散しながら手を合わせ
て努力してゆきたいと念ずる次第でございます。

戦争の原因は私にあった

一燈園同人 石川 洋

「アジアの貢献」につきまして、私は難しいことは分かりませんが、日本人の一人、あるいは日本人の宗教家の一人として、どんな姿勢で平和に対する貢献を果たしたらいいのかと、常日頃思っていますことを、ご報告したいと思います。

私は一九三〇年に生まれ、現在六十一歳になります。中学に入学したときに、日本軍がシンガポールを占領しました。少年時代は戦争の真っ只中と申し上げてよいかと思います。戦争には参加していませんが、多感な少年の心で、戦争の中で生と死、人間の真実の生き方とは何だろうかと苦しみました。

大きな意味で私は三つの大きな疑問を持ちました。一つは、どんなことがあっても人を殺すことは間違いであります。戦争中でも仮に私が友人を殺害すれば犯罪行為であります。それが戦争という国と国との戦いの中では、むしろ評価されるわけです。どうして人を殺すことが評価を受けることなのか。それでも、人を殺すことは間違いだと思いました。

もう一つは、戦争という歯車の中でまったく偶然に多くの方々の命が失われていきました。

そんなに偶然に人の尊い命が失われていいのか。人間の歴史や運命とは何なのだろうか。もしも人を殺すことが悪いことで、尊い命が失われることが決して正しい生き方でないとしたら、私たちはどういう生き方をすればよいのか。そして三つ目は戦争の原因はどこにあるのだろうか。実を言うと少年時代から今までずっと抱き続けている私の三つの命題でございます。

十七歳になりまして、志を抱いて京都に参り現在お世話になっております一燈園の創始者、西田天香さんと出会いました。若い私でしたので、天香さんは私に分かりやすくおっしゃいました。「人はな、立派にならなくてもいい。偉くなくてもいい。人のお役に立つこと、人のお世話のできる人間になりなさい」。私は初めて、真実に生きる道は自分を捨てることから始まるんだと気づかさせていただきました。「人のお役に立ちお世話をさせていただくことならば、旗を持って先頭に立つ必要はございません。人の後かたづけをさせていただいて満足でございます」。そのお言葉をお聞きし、今日までの四十三年、人生を棒に振っても悔いはありません。

西田先生にお会いしても、私としては血を吐くような苦しみでしたが、少年時代に抱いた三つの疑問が解明したわけではありませんでした。何年かたちまして、ハッと気が付いてみましたら、戦争の原因は誰でもない私だということが分かりました。私が変わらなければ、私が平和的な生き方をしなければ、平和は生まれてこない。平和とは他人の問題ではない。まず、戦争の原因は私であった。平和は自分が変革されることから生まれるのだ、と分かったのです。

悲しいのではない、嬉しいのではない、とめどもなく涙が出ました。

私がアジアに最初に足を踏み入れましたのは、ニューギニアの遺骨の収集でございました。そして、沖繩の遺骨収集でも、ご縁がありまして、四七〇体の遺骨を供養させていただきました。ニューギニアではジャングルの中に累々と遺骨が散乱し、海の中に沈んでいる船の中にはご遺体が眠っていました。沖繩の洞窟の中でもおびただしい遺骨に出会いました。頭蓋骨の一つひとつに表情がありました。

私がもう五年早く生まれていたら同じ姿でございます。他人ごとだとは思えませんでした。この人たちの死が意味のない歴史の犠牲になるのか、平和のためにお役に立つのかは、残されたものの責任であり、死んでいった人たちの思いも含めて、平和に対する貢献をしなくてはならないと誓いました。私の平和への旅は、そのときから始まったと思います。

沖繩での占領を終えた基地の町でのご奉仕の中で、歴史の苦しみとか時代の痛みというものは、いつでも弱い人たちにしわ寄せされているのだということを知りました。大人よりは子供、男よりは女、富めるものよりは貧しいもの、健常者よりは障害者、いつでも弱い人たちの中に歴史の苦悩と時代の問題がしわ寄せされ、そして歴史はまったくそれを放置して前へ前へと向かって進む。私は、これでは本当の平和に対する姿勢というものは、生まれてこないのではないかと思わずにはいられませんでした。難しいことの分からない私は、その歴史のしわ寄せ

せの中で苦しんでいる弱い人たちと一緒に生き、そのあとかたづけをご奉仕する中で、歴史の方向性を見いだそうとしました。これは、師匠の西田天香さんから教えていただいた道だと思つています。しかも、その弱い人たちの中に飛び込んでいつて、その弱い人たちの中に生きることの尊さと愛の深さ、許しの大ききがあることに驚きました。

カンボジア三派連合の一つのソン・サン首相の難民キャンプに、当時はWCRP（世界宗教者平和会議）の難民のお仕事でまったく雲をつかむような気持ちで入りました。目の前で子供が死にました。声をあげて泣いたこともあります。その中で、ソン・サン首相の息子のスーベールさんは「難民とは武器を持たないものである。武器を持たないものは生き残らなければならぬ。武器を持たないものが生きるための努力と真心しんじんを傾けるならば世界は必ず平和になる。それが難民問題なのです」と言われました。私は支援したり、援助をするといった奢おごりがありました。この人々から生きることの尊さと愛の必要性と希望のある世界をつくる責任を学ばされました。

もう一つご紹介申し上げたいことは、日本に関わることでございます。広島と長崎の原爆の犠牲者の中に日本人ではない方がたくさんおられます。かつての不幸な歴史の中で、日本民族として強制連行され、日本人として戦争に巻き込まれた朝鮮半島の人々です。今でも確かな数字は分かりませんが、韓国では現在二万人ちかい方々が原爆被害者として苦しんでいます。そ

うした方々の多くは生活困窮者であり、また韓国には被爆者専門の病院もなく専門の医者もなく、ソウル郊外に住んでいますゴンさんという方は、おうかがいするたびに手で顔を覆って声をあげて泣きます。韓国は儒教の国、親より早く死ぬことはできません。九十歳を越えたお父さんが元気でおられ、死ぬこともできないのです。地下の部屋に住んで、家賃が払えないために追われる身です。戦争はもう遠くに去りました。しかし、戦争の傷跡は弱い人の中に生きているのです。

最初に被爆者の調査に入ったときは韓国の人にはずいぶんと叱られ、ひよっとしたらこの人たちに殺されるのではないかという恐怖さえ感じました。しかし、眼を閉じて聞いていますと、もつともなことだと思えました。韓国の人たちは戦争の必要性はなかったのです。言うなれば、私たちが原爆の被害者ではございますが、朝鮮半島の人たちに対しては加害者です。日本はその責任をとるためにアジアの発展に貢献しなければなりません。

韓国被爆者の会会長をしておられましたカン・スンウォン先生は、当時朝鮮の独立運動に参加していたために拷問を受け、広島のいちばん日陰の独房に入れられていたので助かったそうです。韓国に戻って、日本を呪い、日本の記憶を抹消し、日本を忘れたいと思ったそうです。なかなか忘れることができない苦しみの中で、原爆被爆者会会長として再び日本を訪れました。その時にカンさんは「自分の考えが誤っていたことに気がついた。韓国の人以上に我々韓

国被爆者のために命をかけて真心をつくしお世話してください、愛のある日本人に出会ったからです。日本を呪うのはやめた」と言ってくださいました。

越えられない戦争の渠みちを越えるには、愛のある人間になる以外ありません。私はカン先生の手を握って、心の底からお詫びをし本当に泣きました。私は韓国に行つて愛のある韓国人にめぐりあうことになろうとさえ思つていませんでした。

私たちは第二次世界大戦後、多くの国々のご協力によつて確かに経済成長をいたしました。発展途上国に援助できるようにもなりました。しかし、ただそれだけでよいのでしょうか。援助といつても物質的で急激な開発は、私はある意味では大きな過ちを残すのではないかと思つています。MRA運動の創始者であるフランク・ブックマン博士は、「平和とは戦争が存在しない状態ではなく、人と国とが変わるときに実現する」と言つておられます。

ただの非暴力とか、武器を売るとか売らないとかだけではなく、もつとも大事なことは私たちの社会が、経済が、教育が、福祉が、政治が、一人ひとりの家庭が二十一世紀の本当の幸せとは何であるかを考え、その価値観をアジアの多くの先輩に学びながら、少なくとも私たち日本人は死んでいった日本人だけではなく多くの犠牲者の思いを生かしきるほどの深い信仰と愛の活動をしなくてはいけないのだと思います。ご恩を大切に、ただ単なる宗教者だけではなく、サラリーマンも主婦の方も経済人も教育者も、みんなアジアの問題とは何か、貧困の問

題とは何かを考え、一食を節せる中で大衆が本当に深い精神と友愛を持って、自らが変わり、国を変え、世界に貢献しうるそれぞれでなければならぬと思つています。

日本人、英国人、中国人への謝罪を通して得た平和

高等教育推進協会会長 サレハ夫人

今朝私は日本の経済界の人々と同席して、この方々の責任感と献身ぶりに感動しました。そしていまは、この国の尊敬すべき精神的指導者の方々と席を共にしています。富と精神を兼ね備えた日本からこれ以上何を求めることができるのでしょうか。これまで講演された方々は著名な精神指導者の方々ですが、それに比べ私は単なるボランティアのソーシャルワーカーです。私が唯一誇れる資格と言えるのは、MRAの世界の仲間の一員であるということです。

私がMRAとのかかわりをもったのは一九四六年、ロンドンの経済大学の学生時代で、当時の大学は共産主義の学生であふれていました。私は第二次大戦で日本に踏みつけられたマレーシアを後にしましたが、当時の気持ちは言葉では言い表せません。占領されたということを償ってくれるものは何もなかったのです。私は、侵略した日本を嫌い、戦いの中で私たちの国を見捨てたイギリス人を嫌い、打算的で、欲深く、戦利品までも狙っているような中国人を嫌っていました。私はこうした気分で英国に留学したのです。

私は両親のおかげでイスラム教徒として育てられました。憎しみを抱くべきではなく許さな

ければならないということです。

私はMRAに出会い、その後初めて日本人と出会うまでは、そういう自分がいつも正しいと感じていたのです。つまり私が憎しみを抱いたことを謝罪したいと思います。同じ人間である私には、憎しみをもつ権利はなかったのです。

いま私たちはいかに世界に平和をもたらすかについて話し合っていますが、その答えは自分から始めるということです。つまり自分に平和を見い出して初めて、他の人に、それがたとえ敵であったとしても、平和を見い出すことができるのです。

それ以来私は日本人、中国人、それに四年近く留学したイギリスの人々と多くの友情を培うことができました。そして私は日本人とともうまくいっていることをお伝えしたいと思えます。また、平和な時代になって日本がマレーシアに多くのことをして下さったこともお知らせしたいと思います。プラトン・サガという最初の国産車のことを聞いたことがあるかと思いますが、これも日本の助けによるものでした。

マハティール首相の「ルック・イースト」政策は広く受け入れられ、大きな成功を収めました。日本企業の方々から科学技術をはじめ多くのことを学びました。とくに私も関係しているある建設会社から多くを学びましたが、この企業で私はMRAの考え方を実践しています。礼節と正直を旨とするこの会社を政府も高く評価し、高い信頼を寄せています。こうした信頼関

係を築くには両方が努力を傾ける必要があります。

何をするにもまず自分から始め、そこから家族、隣人、国の人々、隣国、そして世界中に広がるのです。これは簡単なことではなく、長い時間を要しますが、まず始めることが大切です。今ここから平和な世界作りを始めることができると思います。今回のシンポジウムは歴史的な意味を持つことになると思います。他の精神指導者の方々がそうであるように、平和な気持ちでここに参加した私は、ここで得た平和を携えて前進したいと思います。

第二部 「日本の役割、日本への期待」

——アジアそして世界への貢献をどう考えるか——

● バネリスト、ハイメ・シン、イナムラ・カーン
ラジモハン・ガンジー、石原俊
曾野綾子

● コーディネーター、樺山紘一



ハイメ・シン枢機卿

東欧の民主化にも影響した無血革命の精神的支柱。最年少枢機卿として登場以来アジアの代表的キリスト教指導者。



イナムラ・カーン博士

理性と寛容を重んずるイスラム教の教えを説き、イスラム各派や他宗教との交流にかける「イスラム教の移動大使」。



ラジモハン・ガンジー上院議員

民族・宗教の対立を越えたインド亜大陸の一括独立を目指した祖父ガンジーの遺志を継ぐ、ヒンズー教の良心。



石原俊

日産自動車会長。社長在任中は積極的な海外戦略を展開。経済同友会代表幹事時代は歯に衣着せぬ直言を行った。



曾野綾子

作家。敬虔なカトリックで、国際的人道援助活動でも活躍。政治や社会問題にも鋭い論評を寄せる。夫は三浦朱門氏。



樺山紘一

東京大学文学部教授。西洋中世史、文化史専攻。東洋とのつながりや人物を通しての歴史を身近に伝えてくれる。

平和と新秩序のあり方を問う

樺山紘一 樺山でございます。

本日は、ハイメ・シン枢機卿、イナムラ・カーン博士、ラジモハン・ガンジー上院議員、日本側から日産自動車株式会社の石原俊会長、作家の曾野綾子さんをお迎えしております。

そして、私、樺山紘一をコーディネーターといたしまして、六人でこれからゆつくりとさまざまな問題について考えてまいりたいと思っております。よろしくお願い申し上げます。

さて、これからのアジアにおいて、平和および新しい秩序がどのような形であり得るのだろうかという問題につきまして、午前中の議論を深めていく前に、私のほうから一言、二言申し上げて、口切りとさせていただきます。

この一兩年、ことに一九八九年夏に始まりました東ヨーロッパ世界の大きな変動は、その後、ソビエト連邦、あるいはさらには中国、そしてアジア諸国、さらには、南アフリカ共和国を含むアフリカ全土、その他、つまり全世界を大きく巻き込む行動、変動を引き起こしました。すでに一九八五年ペレストロイカを掲げて登場したゴルバチョフ書記長とともに、世界の大きな変動はじわじわと始まっていたのかもしれない。

その間に、私たち日本人、あるいは私の周辺を取り巻いている大きな変化、変動がさしあたり三つほど私たちの注意を引いたように思われます。

第一番として、第二次世界大戦後、私たちを取り巻いてきたいわゆる東西軍事対立が急速に解消し始め、その結果、軍事、政治、経済、その他さまざまな分野における国際関係が大きく変化しました。長い間にわたり核戦争の脅威にさらされてきた人類は、少なくとも以前よりは安定した状態を迎え、平和に向けての新しい希望が私たちの周りで沸き起こってきたように見えます。

しかしながら、このような東西軍事対立の解消は、必ずしも直ちに世界平和の全面的な実現に結びついたわけではありません。むしろ逆に、たとえば九〇年代のはじまりとともに私たちは心配させた湾岸戦争以外にも、朝鮮半島問題やユーゴスラビアをはじめといたしまして、東ヨーロッパ各地で起こっている、従来想像だにしなかったような諸問題など、新たな課題が次々に登場しています。

第二には、日本は戦後の長い経済成長を達成し、世界で一、二を争うような経済大国に成長しました。このような経済成長は、むろん私たちに物質的な繁栄をもたらしましたが、そのことによつてかえつて私たちはその繁栄がもたらすある種の空虚さを常に日常的に感じ始めました。

そればかりではなく、このような経済的な力量が、同時に私たち日本人の、あるいは日本国家の世界における地位の高さを保証したかと言え、必ずしもそうではありません。

かえって世界的な構造変化の結果として起こったさまざまな問題に対して、私たち日本人は必ずしも責任ある確固たる方針に基づいた行動を取り得ない、そのようなジレンマに悩まされています。つまり私たち日本が国際社会の中で自立した決断を行っていく、そのような可能性とチャンスに恵まれていながら、なおそれを達成できていないという現実を直視せざるを得ません。

かつて東西対立が存在し、その両側陣営の谷間、もしくはそのいずれかの側について、私たちの道を選んでいる間は、まだ比較的判断は容易でありましたが、今やそのような時代ではなくなつてまいりました。私たち日本人は、国際社会の中で何を考え、どのような行動をとるべきかということについて、早急な結論、判断が求められています。

そして、三番目に、このような世界および日本の変化の中で、アジアという問題が急速に私たちの関心の意識の上に浮かび上がつてまいりました。アジアでは、さまざまな諸国がそれぞれ価値を持ってこれまで成長してまいりました。しかし、アジアという言葉はかねてからあったにもかかわらず、私たちはいずれかと言え、日本の進路の選択にあたって、アジアの一員という意識を持たないことがしばしばであり、その結果、アジア諸国に対し、時には軽

蔑、侮蔑の行動を働いたり、あるいはかつては軍事的な侵略を行ったり、そして、時々無視したり、さまざまなことがあります。今、私たちは、このアジアがこれから世界の中でどのような地位、位置を占めるかということ抜きにして、日本のあり方を考えることができなくなっています。

以上、世界全体の大きな構造変動と、日本の置かれている位置、地位の問題、そして、アジアの問題と、この三つが私たちにとって直面する大きな問題であると考えております。

きょう、これからお話しいただきますのは、それらの問題に直ちに明快な結論が出ないといえども、アジアそれぞれの大宗教を背後にお持ちになりながらおいいただいた方々です。そしてまた日本の企業、あるいは文化、それぞれを代表するパネリストの方々もまたこの問題について何をお考えになり、またその討論を通して、どのような新しい視野が展開されるかということ改めて考える機会にしたいと思います。

さて、すでにきょう午前中皆様方と一緒に三人の方々のスピーチをお聞きして、私もいろいろに刺激され、裨益するところがきわめて大きかったと思っております。それらを今ここで簡単に整理するわけにはいきませんが、大まかに申しまして、次の四つのことを私はたいへん強く感じました。

まず第一には、先ほどガンジーさんがお話しになりましたが、アジアが抱えている問題はき

わめて深刻であり、アジアに数多くの預言者が現れたのは、アジアが豊かだからではなくて、むしろアジアが墮落しているから、アジアに預言者を遣わされた。確かにアジアは、私たちにとって現在豊かで、優れた祝福される状態では必ずしもないといえます。このアジアが今抱えている問題を、世界の現在の問題と、また日本を含むアジアの諸国の問題と絡ませながら考える必要があるということを感じました。

二つ目には、本日おいでいただきました三人の外国人の方々は、それぞれ大きな宗教を背後にお持ちになるその代表者の方々ばかりであります。午前中の話は、私は率直に申し上げて、初めは宗教だけが平和をつくるのだというお考えを伺うのではないかと思っていました。

しかし、宗教はもちろんのことでありますが、直接宗教について強い関心を持たない者も、また当然異なった宗教を持つ者も、あるいは国家、政府、企業、そしてさまざまな団体も、それぞれの方法で世界の平和、アジアの繁栄のために努力をする可能性があり、また義務があるというお話を伺いました。

それぞれの団体、それぞれの国民、それぞれの民衆が、この行動をどのような立場に立ち、またどのような分野で、またどのような方法、どのようなスタイルで行っていくことができるのか。それぞれの国民、それぞれの宗教を背景にお持ちになっている方々や、あるいは日本のパネリストの方々にも、この問題を考えていただく必要があるだろうとお話を伺いながら感じ

たのであります。

三番目に、先ほど午前中の最後のところで宣言文として読み上げられましたが、四大宗教を背後にした代表者の方々が、とりわけこれからの新たな社会秩序、世界秩序の中で人間の内面の道、精神的な価値のあり方について、その重要性についてたいへん印象的な言葉で述べつづられました。私たちににとっては経済力も、政治的な力も、さまざまな力がありますが、同時に、精神的な価値、内面の価値、そうしたものがいかにこれから世界平和、あるいはまた世界の私たちが多くの諸民族の共同のために必要であるか、その内面的価値のことを改めて強く感じさせられたような気がいたします。

そして、最後に、すでに三人の外国からのパネリストの方々が午前中にお話しになりましたとおり、それらの方々が皆私たち日本の、あるいは日本人の現在と将来に対してきわめて強い期待と、またいくらかの不安とをお持ちになっておられます。日本に対して今アジアで、あるいは世界の中でどのようなことが期待され、またその期待に対して私たち日本がどのようにこれを受けとめ、考えていかなければならないかということを改めて強く問いかけられたような気がいたしました。

以上、私、コーディネーターとしての四つの受け取り方を主要なベースにいたしましたので、これから、それぞれ今申しましたような問題につき、順次それぞれパネリストの方々のお考えを

伺うことにいたしたいと思えます。

問題点を繰り返ささせていただきますが、第一に、伺います。この数年間、東ヨーロッパ等々で始まった世界の大きな構造変化がアジアにも及んでいるにもかかわらず、なぜアジアでは、なお自由や平和についてさまざまな取り組みがいささかおこなわれているのか。アジアがある種の墮落した後進の状態になおとどまっているところがあるとすれば、それはなぜなのか。たとえば人口とか、環境とか、民族対立とか、貧困とか、あるいはその他まだまだ数多くの問題をアジアの諸国民は抱えております。こうした問題について、それぞれの国民のお立場、あるいはそれぞれの宗教のお立場、またそれぞれの個人としてのお立場からお話しいただきたいと思えます。まずハイメ・シンさんから、最近私たちを取り巻いているさまざまな状況とアジアのありさまについて、常日ごろお考えのところを伺うことができればと思えます。

人権と人類の調和としての人の尊厳

シン枢機卿 私は、人は世界を支配するために神に創造されたことに鑑み、かんが人権と人類の調和の基本である人の尊厳について話しました。

しかし人の尊厳の卓越性を信ずることと、利益や権力欲などがからんだ価値と競合する中で

この確信を維持することとは別のことです。歴史的状況、物事を素早く能率的にすませることの必要性、成功しなければという義務感などが、人権の卓越性を、建前は別としても、実質的に否定してしまうことが多々あります。

やがては「なぜ人が最優先されねばならないのか？ もしこれを否定すればどうなるのか？」ということまで問いかげざるをえないかもしれません。これは私たちの確信を試すいい問いかけです。正直にこれに対峙すれば、この答えが決して易しいものではないことがわかります。

人や組織は、人の尊厳に対する哲学的裏付けを与えることができます。しかし、先にも述べたように、実用主義が支配する世界では、人の人道的理解は世俗的目的や野心の前ではほとんど立ちうちができないのです。最も重要な価値とは皮肉なことに最も脆いのです。何故なら価値とは機能的ではない領域に存在するからです。

価値とは良いから良いのであって、何かを起すことではないのです。それらは認識され、評価され、尊敬されるものであって、生産され、開発され、活用されるものではないのです。それらは支配されたり、操作されたりする環境では長くは生き残れないのです。最も重要な価値が成長するためには肥沃で温和な母体で育てられねばならないのです。

次に自由について話したいと思います。自由とは為すべきことをすることであって、好きな

ことをすることではありません。これに関連して人の尊厳と人権は結局、それを信じる社会の中でしか効果的に守られないのか、という重要な問いかけがあります。これに対して、ヨハネ・パウロ二世は言います。「信仰は、存在全体に意味を与え、かつ行動のガイドラインとしての価値基盤となる超越したものの実体を認識する」と。

行動は意思決定に従います。そして個人であれ集団であれ、意思決定には世界観や決意が不可欠な役割を果たします。こうした基本的な視野が物や歴史だけに限られるか、それとも精神の存在や行動にまで及ぶかどうかはきわめて重要です。超越した視野は人権や自由に関するあらゆる種々の意思決定を行うのに対し、世俗的なことに限られた視野は異なる意思決定を行うのです。ただし、すべての宗教が人の尊厳の偉大さを信じているのです。

私は、ここ三十年間にわたって「貧しい人々の意識」と正義との連帯意識とが世界中で顕著に高まったのは、歴史の偶然ではなく精神の働きによるものと信じています。ラテンアメリカの兄弟姉妹がたびたび強調されたように、「解放」という言葉が人権の新しい名前となったのです。これは世界中の善意ある方々が同意してくれることと思います。

金持ちは金持ち過ぎて何も受けることができなほ金持ちでもなく、貧しい人は貧し過ぎて何も与えることができないほど貧しくもないので、金持ちも貧しい人も一緒に働くべきだと申し上げたいのです。

樺山 ありがとうございます。午前中のご紹介にもありましたとおり、フィリピン社会の現実を背景にして、ハイメ・シン枢機卿がこれまで活動されてきた大きな足跡を背後に置いて伺いますと、今の話は、たいへんじんとくるものがあるように思います。

では、続きまして、イナムラ・カーンさんにお話をいただきましたのですが、午前中にもお話をいただきました、パキスタンを含む中近東、あるいはアジア、さらには世界の大きな構造変動、その中で起こっているアジアの諸問題について、午前中のお話をさらに推し進めてお話しただけことができると思います。

与えられた人権に値する行動を

カーン博士 あなたがアジア人か、ヨーロッパ人か、アフリカ人かという区別は全く必要がありません。それは一人の人間であるあなたの一部分にしすぎないのです。人は誰でも人権を持っており、これは生来の権利です。他の人から与えられたものでも、他の人の親切や好意や寛大さによって与えられたものでもありません。人はすべての法の下で平等であるのです。法の前では貧富も、肌の色や国籍の差も存在しないのです。こうした人権は異なる宗教によって異なった形で表現されています。

各宗教は独自の定義をもっていますが、イスラム教のコーランによれば、人権の程度が皮膚の色やふところ具合によって決められることはないとしています。社会における尊敬や地位を得るものは、人そのもの、信仰心、善行であり、金持ちだけが人権を有し、その他の人々には有しないといった区別はないのです。

こうした権利は人に内在するものですが、それを行使するためには、それに値することを自ら証明しなければなりません。それには自分の日頃の善行しかありません。良い隣人であるか、息子であるか、父であるか、兄弟であるか、生きている社会の良い市民であるかということ。人権は要求することによって得られるのではなく、行動によるのです。人はその行為や行動によって評価されるものであり、これは世界のあらゆる民族に共通するものです。

樺山教授のご指摘のように、植民地主義時代の日本は多くの間違いを犯しました。今日の日本が過去にそういう過ちを犯したことを認める勇気をもっていることは素晴らしいことです。唯一の救いはこうした過ちを繰り返さないことです。神が私たちに地域や国を任せる機会を与えて下さることは、その人々の役に立つような力を発揮する機会が与えられているということです。

世の中の状況が変わったことはとてもいいことです。拷問や軍国主義の時代は終わったのです。今は民主主義の時代で、議会を通して権利を行使できるのです。そして誰かが他人の権利

を侵害すれば、常に法廷の扉をたたくことができ、正義が行使されるのです。こうした人権が与えられていないのであれば、法廷等を通して得られるということを繰り返し申し上げたいのです。

樺山 ありがとうございます。人権という考え方、これはしばしば西ヨーロッパ世界、西ヨーロッパの近代民主主義の中から出てきたものであり、アジアの私たち諸国民にとつては無縁なもの、縁の遠いものだと言われがちでしたが、そうではない。イスラムという宗教においてはお互にむろんのこと、さまざまにアジアの宗教においても、この人権という考え方を通して、私たちはアジアからの発言を行うことができるのだという趣旨と受けとらせていただきました。

続きまして、ラジモハン・ガンジーさんにお話しいただきたいと思いますが、ガンジーさんからは、アジアは墮落したからこそ預言者が必要だったのだというたいへん強烈なメッセージがあつたように私には思えます。それも含めまして、世界の大きな変動とアジアの変動という問題についてお考えを伺うことができればと思います。

アジア人自らが招いた民族対立

ガンジー上院議員 「アジアが墮落したから預言者が必要だ」と申したつもりはありませんが、以下のような問いかけをしました。それは、聖人や預言者がアジアに生まれたということは、アジア人がとりわけ善良で預言者を頂くにふさわしいのか、それともアジア人に欠点が多いが故に預言者と聖人とを必要としているのか、という問いかけでした。

さて、樺山先生から、世界全体が激動する中で、アジアをどうとらえるかというご質問をいただきました。昨今の変化は、アジアの人々や政府に大きな挑戦をもたらしています。アジアはあまりにも広大であり、あまり細かい表現を使ってもアジア全体にはあてはまらないと思います。

まず世界の大きな変革と呼応して起こったカンボジアの注目すべき決着について言及すべきです。この和平は今始まったばかりで、注意して動向を見守り、この和平が永続的であり、カンボジア国民に役立つような助けが私たちにできるような望みたいものです。

アジアについて必要なコメントを一つ述べたいと思います。西洋の国々が不公平、不当、あるいは横暴であった時期は確かに幾度かありましたが、私たちアジア人自身がアジアの分裂に

荷担したことを忘れてはなりません。今日アジアでは民族対立が増加し、かつ激しくなっているのです。こうした対立には国内で起こっているものと、隣接国間で起こっているものとがあります。しかしこれらのほとんどに共通すると思われるのは、それを解決する能力が私たちになく、状況がますます悪化しているということです。時の流れに、和解をもたらす術の進歩が伴わなかったのです。

アジア人としてはこのことを真剣に考える必要があります。民族対立が悲劇と流血を増大させるのがわかつていながら、なぜアジアの民族対立が解決されず、協定が守られないのかを、問い直さねばなりません。

また、自らの宗教を誇りにし、説いている私たちはこの点についても直視せねばなりません。宗教の名において憎しみに油が注がれ血が流されたのはその通りだと思えます。

むしろそれが真の宗教でないことは事実です。自分の信仰や宗教社会を愛しても、それが取り上げられたり記憶にとどめられることはないのに対して、他の信仰や宗教社会を否定すると、取り上げられて問題が始まるのです。こうしたことが實際存在するわけで、宗教関係者として考えなければならぬ問題です。

もう一つ申し上げたいことは人権の問題です。人権はアジアの、いや、世界中の多くの国々で侵害されています。政府が人権剝奪を行うケースと暴力的なグループの人間が行うケースと

があります。ここで共通点があると思われるのは、私たちは自国内における人権よりも、他の国々における人権に対しての方がはるかに熱心だということです。

先ほどの民族対立に戻りますが、これはもちろんアジアだけに限ったことではないことを申し上げたいと思います。ヨーロッパやアフリカにも同じように存在するのです。ヨーロッパにおいて歴史的な大変革が起こっているときに、こうした民族対立がマルクスやレーニンやスターリンの亡霊を最後に笑わせることのないようにすることが肝要です。

樺山 ありがとうございます。アジアが解決についての技術を必ずしも持ち得ていないというこの無力を私たちはどうしたらいいんだろうかという、たいへん困難で深刻な問いかけを含んだお話だったと思うのですが、これらについて、まだこの後も他のパネラーの方々からお話を伺うチャンスがあればと思っています。

それでは、続きまして、日本人のお二人のパネリストからお話をお伺いしたいと思います。まずは石原俊さんから、昨今の日本および世界も含めて、大きく起こっております構造変動や、その中でアジア、あるいは日本がどういう問題を抱えているかについて、日ごろお考えになつておられることをお伺いできればと思っております。

申しおくれましたが、石原さんはわが国の企業人として、とりわけ私たち日本人が抱えているさまざまな問題につき、常日ごろから非常に明晰な発言をなさつておられることで知られていま

す。本日の席でもどうかひとつご遠慮なしにご発言をいただければと思います。

世界の平和と安定と日本の役割

石原俊 第二次世界大戦後の日本はどうであったかと言いますと、戦争に対する反省と平和憲法の精神から、紛争や戦争の当事者となることを極力避けてきました。日本はもっぱら経済復興、発展ということに専念してまいったわけであります。東西の冷戦構造が厳しく存在した中で、わが国はアメリカや西ヨーロッパからの経済援助、あるいは技術支援を受けた結果、終戦後十年で復興を終えまして、一九六〇年代から七〇年代にかけて高度経済成長を実現したのであります。その後も二回の石油ショックや急速な円高の進行を比較的うまく乗り切りました、世界の中でも非常によい経済状況に現在あります。

こうした経済成長の結果、日本は世界経済の中で大きな地位を占めるに至っています。また、わが国の行動が逆に世界各国に及ぼす影響も結果的には大きくなっております。たとえば、一九八五年のプラザ合意は、先進国間の国際収支の不均衡の是正を為替の調整で行おうとするものでありますが、急速な円高の進行に対して、日本は非常によくこれに対応ができた結果、我々はたいへん良好な経済状態を迎えることができました。あるいは逆に言えば、この

為替による日本経済の調整というものをうまく逆手にとったということになると思います。

こうした日本の構造調整の努力の過程においては、アジアにおける現地生産に日本は非常に大きく努力すると同時に、アジアからの製品輸入の急増もブラザ合意以後になされたのであります。それらが後のアジアの飛躍的な経済発展の契機となりました。

台湾、あるいは韓国、香港、シンガポールというアジアNIEsから、さらにはタイ、フィリピン、インドネシア、マレーシアというようなASEANへと経済発展が進みまして、それが中国の沿海部などへも波及しつつあります。その結果、日本のアジアにおける経済的影響力がたいへん大きくなったと言えます。

さて、現在、世界は東西の冷戦構造の終結に伴いまして、新しい国際秩序の構築を迫られております。その中で、日本は今後みずからの経済発展を追求するだけでなく、その経済的地位にふさわしい世界の平和と安定、そして、それを裏づける世界経済の安定的で調和的な拡大を維持することに積極的に貢献することが求められております。

具体的に申し上げますと、まず、アジアおよび世界経済の安定的な成長の持続と、それを通じた経済的格差の縮小。二番目は、人類共通の課題に対する積極的な取り組み。三番目は、世界の安全保障体制構築への貢献ということに尽きると思います。

最初に申し上げましたアジアおよび世界経済の安定的な成長の持続と、それを通じた経済的



格差の縮小についてですが、紛争や戦争の原因には、民族問題や宗教問題、ナショナリズムの問題もありましようが、貧困や貧富の格差の問題も背景にあると思われます。アジアにおいて経済的影響力が大きくなってまいりました現在、日本の重要な役割は、アジアを世界に開かれた地域として貿易や投資を一層活発化させ、世界の成長センターとして発展させていくことだと思えます。それが世界経済の持続的成長に貢献し、ひいては世界の経済的格差の縮小につながるかと考えております。

ところで、アジアの安定を考える上で、私どもは旧ソ連の存在を抜きにしては語れないと思います。政治的には韓国との関係改善を進めつつありますし、経済的にも旧ソ連をはじめとする旧社会主義諸国が市場経済への移行や西側経

済への接近を進めつつあります。ベトナムや中国で経済開放の動きが一方で見られますが、それとともにアジアの各地で経済圏と呼べるような各国地域間の貿易や投資など、経済的なつながりが深まりつつあります。

この旧ソ連の行方とも関連しまして、わが国が直接関係するものとしては、極東における中国、旧ソ連、南北朝鮮、日本を含む、環日本海経済圏と呼ぶような構想があります。極東の資源開発を共同で行おうというものでありまして、まだ具体的にはなっていないませんが、これが成功すれば、資源の有効活用ができますとともに、極東の経済発展、ひいては政治的安定にも寄与すると予想されます。日本も資金、技術面でこの構想に貢献する余地が非常に大きいと思われます。

日本が貢献できます最大の点は、アジアへの投資や技術移転を継続することと並んで、アジアからの輸入の拡大であります。これが今まで日本経済の発展的な話の中でなかなか語られなかった点でしょう。今後とも、日本がアジア諸国からいかに多くのものを買うかということが日本の大きな責任であり、責務であるというふうに私は考えております。

そこで、市場開放を一層推進し、アジア諸国からの工業製品、あるいは農産物の輸入まで日本は拡大をして、日本が一種のショックアブソーバー的な機能を發揮していくことが、アジアの産業の発展に貢献できる早道であると考えます。これは、従来アジア諸国が日本を通り越し

て、アメリカなり、あるいは豪州なり、その他の国々への輸出をしていたわけですが、私はこの日本で現在大きな黒字国という点がある程度方向転換するためのアジアからの輸入の拡大ということを一層強く申し上げておきたいと思えます。

現在、さまざまな業種の企業がアジアの各地で現地生産を行っております。それに伴いまして、アジアの労働者を日本に受け入れ、日本での技術指導、研修を通じて、現地経済の発展に資するところの人材を育成している企業も増えてきています。今後はこういう問題を企業だけに限らずに、技術や医療をはじめとして、学術、教育の分野でも交流を深めて、アジアの経済のみならず、文化、学術の向上にも貢献していくことが日本の責務ではないでしょうか。

さて、次に、日本が果たすべき役割の第二は、アジアを少し離れて人類共通の課題に対する取り組みの強化であります。

人類は現在、貧困、麻薬、環境、エイズ、自然エネルギー、また人口爆発など、非常に困難な問題を多く抱えております。中には一国の身では解決が難しく、各国が協力して対処しなければならぬ問題も多くあります。日本はこれらの問題のうち、とくに貧困の撲滅、環境保全、それから省資源、省エネルギー対策、リサイクル問題等で主導的な役割を果たすことができるのではないかと考えます。

技術、資金、人材等の協力を全地球的な視野に立って、積極的に強化すべきと考えます。た

たとえば、各地で行われている砂漠の緑化や河川の治水、かんがい为例にとりますと、ガンジス川、メコン川の開発、それから第二パナマ運河となる国際運河の建設などがあげられるでしょう。いずれも大規模なプロジェクトであり、その地域の経済発展の基礎づくりに寄与するだけでなく、世界的にも有意義で必要性の高いプロジェクトだと思えます。

一方、日本の経済援助は、金額ではアメリカと一、二を争う程度になっています。一九九〇年の実績で約九二億ドルです。が、GNPに占める比率では、残念ながら先進国の平均を少し下回ったところになっております。そういう点では、日本は今後ともこの経済援助の額をさらに増やし、世界の必要なところへの資金援助をする必要があるかと思えます。こういう意味で経済援助の一層の拡充と、そして地球的な視野からのプロジェクトに貢献することが必要ではないでしょうか。

次に、第三の役割として世界の安全保障体制への貢献を指摘したいと思います。日本は政治外交面でも経済的地位にふさわしい貢献を行うべき時期にきておりますが、国民全体の意識としては、世界平和と安定へ向けて積極的に貢献する、あるいは平和のための負担をするという意識は必ずしも十分ではないように見受けられます。

現在でも日本でいわゆる国連への協力のための人員の派遣ということが議会で議論されております。しかし、どうもお金以外で、人が世界秩序の維持に貢献するという積極性があの議論

の中にも見られないのではないかと思います。日本が世界に誇る発言として、戦争の放棄、武器輸出の禁止、非核三原則があります。このような宣言は世界の先進国では日本だけです。これが世界、とくにアジアの平和と安定に向けてどのような貢献に結びつくかを今後考えていかなければならないと思います。

以上で私の議論を一応ここで終わりたいと思います。

樺山 ありがとうございます。日本が、とりわけ経済活動、もしくはそれに伴うさまざまな社会的活動を通して、世界あるいはアジアの中でいかに貢献し得るかという問題につきまして、いわば総論を展開していただいたわけでございます。これについてはむろんさまざま各論が伴わなければなりません、具体的な話につきましてはこの後のディスカッションで伺うことができばと思っております。

続きまして、曾野綾子さんにお話をしていたと思いますが、曾野さんにも少し冒頭でゆつくり時間をかけてお話しただけだと思っております。よろしく願います。

アジア人と言える日本人

曾野綾子 私は、小説を書いている者です。ですから、日産自動車という大きな背景をお持ち

になった石原さんのように、日本の進路を上から大きく見るということは私の仕事ではないわけです。外国では知識人というのは、すべての問題について答えなければならぬと言われていると伺いました。しかし、日本ではそうではございません。人は皆おのおのの分に応じた見方をしろということになっており、その辺は大きく違うようでございます。

私は小説家といたしまして、むしろ個人的な立場からのお話を申し上げたいと思います。私には、アジアとは何かということについて話すようにと言われました。そして、私は自分がアジアに属しているアジア人であるということを確認することが私にとっての大きな第一歩であったと思います。

日本人は自分がアジア人であるというよりも、たとえばヨーロッパで教育を受けたとか、アメリカ的な物の考え方をするとか、あるいはドイツの自動車に乗っているとかが、そういう形で自分をアジア人として見るよりもどちらか東西別の方向に目を向けようとしているように思います。

しかし、私は二十代の初めの非常に若いころに、西はパキスタンまで旅行いたしました。そして、そのときに自分はアジア人であることをはっきりと自覚して、その立場を失わずに今まで生きてまいりました。そのことを今から二十年ほど前に、ペイルートにあるP.L.O.の事務所長にいろいろインタビューをしたときに申し上げましたら、「日本人で自分がアジア人と言

った人に初めて会った」と言われたので、私は逆にびっくりいたしました。それで、「日本人というのはどこに属すると思ってるのですか」とたずねましたところ、「ヨーロッパ人だと思ってる日本人が多い」と言うのです。これはまた私は逆に驚きました。私は徹底して自分をアジア人だと思っています。

もちろんアジアは一つだということはまったくございません。各国各地域によって人間の心も、経済状態も、習慣も、すべてが違うわけです。しかし、問題は、個人であれ、あるいは政治家のような方たちでもですが、非常に多くの人たちがアジアを飛び越えてどこか別の方向を見ていたということです。しかし、私たちは近くの足許から、きちんと地盤を築いていかねばならないと思います。

私は、その後、中近東、アフリカ、それから中南米を旅行いたしました。ヨーロッパはあまり知らないのですが、むしろアフリカの砂漠のようなところに好んで参りました。私の受けた印象は個人的な、そしてまた小説家独特の偏見に満ちたものであろうと思われませんが、アジアの特徴というのは、一言でいうと、極端な飢餓がないということです。もちろん地域によってはそういう苦しみに遭うところもございますが、もつと具体的な言い方をすると、バナナの生えるところが多い以上、あまり餓死することはないんだということです。

私自身、バナナが好きですが、バナナの生える土地というのは非常に豊かな温かい気分を持

っております。ですから、運という言葉をもし用いるならば、アジアというのは相対的に、比較的運のいい地域なのだと思います。もちろん運だけではなく、個々の国々がさまざまな苦しみの中から相剋を乗り越えて努力して得たものも多くありますが、アジアはやはり豊かな地域だと思います。

サハラ砂漠を自動車で縦断したとき、一〇〇〇キロ以上にわたって、水もガソリンもないという無人の地域を何日も車で走っておりますと、やはりアジアというのは水と緑に囲まれた非常に豊かな地域なんだというふうに考えざるを得なかったのです。

そして、極度の飢餓がないために必然的にそこには優しい人々が住んでいる土地だという印象がございます。さまざまな民族対立の姿を少し書物などから勉強しますと、残酷なことがいくつも行われています。ごく最近でも、アジアの地域でたくさん人の虐殺が行われたことはわかっているのですが、それにもかかわらず、アジアというのは優しいところだと思えるのです。

文化をとくに対立して考えるつもりはないのですが、ヨーロッパの音楽というのは一つの音程がきちっと確立しています。ところが、日本の音楽やインド、あるいはインドシナ半島やインドネシアなどで聴く民族音楽というのは、音と音との間にリエゾンが入ることが多いのです。絶対音の持つ厳しさと厳密さも一つの美点ですが、アジアの音楽にはそうではない人間と人間がつながっているという実感を持った優しさがあらわれているように思うことがしばしば

ありました。

アジアの諸地域の非常に美しい特徴の一つは、困った人が一族の中に出ると、それを親族が助けていくことだろうと思います。これには悪い面もあります。というよりも、すべてのものにはよき面と悪い面が必ずあります。ですから、簡単に私たちはものごとを評価するとはできないのですが、貧乏になったり、病気になったりした困った人がいると、その一族の中の最も幸運で豊かな人が自分の財力と、それから精神的な庇護をもってその人を生かすということを続けてまいりました。

ところが、それは前近代的だという考え方が出て来て、日本では社会保障制度を整備するという方向に動いています。これはもちろん当然のことであろうと思います。国家が見捨てられた個人をそのまま放置しているということは、やはり政治の貧しさ以外の何物でもありません。しかし、同時に、政治がすべての人間の問題を解決しろというのもまた貧困のあらわれであります。政治の制度としては、それを制度的に救うということが必要であり、人間の心としては、あくまでそこに慈悲の心を持って不幸な人を救っていくことに喜びを感じるというように考えるべきだろうと思います。

よく言われていることですが、ウルグアイ・ラウンドでは、日本が一粒たりとも外国の米を入れないと主張していることがたいへんな問題になっています。日本は伝統的に水田をつくっ

てきた国です。そして、ご承知のように、水田というのはその社会が一つにつながって成り立ち得るものです。たとえば麦をまくのでしたら、私たちは、きょうはお隣の家が麦をまいた、しかし、うちはいろいろ都合があるから来週まこうということができるわけです。しかし、水田の場合には、高い田んぼから低い田んぼへと水が一定に供給されたときに初めて田植えができるのですから、自分が勝手に一週間早くしようというわけにはいけません。ですから、水田というのはいわば運命共同体のようなものがあります。

そこに、狩猟民族とか、他の農耕民族とは違った精神風土が培われてきたわけです。このことがおそらく外国人から見ても、日本人というのはどうしてもっと強烈なアイデンティティを持たないんだ、どうしてもっと自分の信ずるところに従って生活をしないんだという不満になるのだと思いますが、一応文化人類学的に言うところのそういうことでございます。アジアもいろいろ広いですから、すべてがそうだということはありませんが、やはり、そういう国がいくつもあります。

私はアフリカのマリとエチオピアとマダガスカルで、程度の違いこそあれ、かなりの貧困、飢餓というものを見ました。私などは、おなががすくということは、食物を食べたい、しかるに食べるものがないということだと思っていました。しかし、エチオピアに行ったときに、空腹と飢餓は違うことがわかりました。空腹は食べたいのですが、飢餓の最後には食べたくなく

なりません。もう食欲がなくなりそうです。

皆様方がよく写真でごらんになりますような、老人様顔貌という年寄りのような顔をしたやせ細っている子供は、あのような写真を撮られてから数時間のうちに死ぬ可能性を有しています。そのような厳しい飢餓というものを、アジアの人たちというのは比較的多くの土地で体験しないでやってきました。

それはどうということかと申しますと、アジアは世界の中産階級のような感じがするんです。中産階級というのは非常にあいまいな言葉ですし、アジアの多くの地域では中産階級が長い間育たなかったわけですが、しかし、中産階級というものは、世界の新しい方向とか希望を引きずっていくものです。一人の金持ちが独断的に自分の圧政を行う時代はもう過ぎ去り、私たちの多くが属しています中産階級が何を望んでいるかということが社会の情勢を動かしていくんだと思います。

新大陸とヨーロッパの間にあり、極東という名で呼ばれ、印象の薄かった地域がアジアではないかと私は思うのです。非常に荒っぽい言い方ですが、遠い地域に起きたことは、テレビがこれほど普及する前はなかなか見られなかった状態です。

しかし、そのようなアジアが来世紀に向かって、おそらく東に向かっても、西に向かって、世界の発展を助け、危険を薄めるべき大きな役目を背負っているように私は思うのです。

これはアジアがよその国の人より進んでいるとか、優秀であるとか、ということではなくて、かつてアジアが背負わなかった運命とか、任務というものを、来世紀に私たちは背負うのではないかと思っています。

日本では「遠い親戚より近くの知人のほうがいい」と言うのですが、そういう意味で近いアジアがともに手を携えて来世紀に向かうという、この大方針をやはり変えることはできないのではないかと思えます。

樺山　ありがとうございます。私たちも本当にみずからをアジア人と名乗ることが比較的まれでありましたが、今のお話を伺っていると、確かにこれから私たちはアジア人としての役割に大きな意識を向けなければいけないのではないかという気がしてまいりました。

バナナが生えるところには極端な飢餓はないのではないかという話がありました。ハイメ・シン枢機卿も、バナナは食糧であると同時にカリウムを補給する薬でもあるという話をされて、たいへんおもしろく伺いました。

ところで、五人のパネリストの方たちからそれぞれお話をいただきましたが、これまでの各内容につきまして、ご意見なり、ご質問がございましたらお願いいたします。

神への愛が問題解決の基本

シン 石原さんが言われたことは、何かが実際に起こっていることを示していると思います。この問題は一分や一日で解決できるものではありません。しかし、少なくとも日本やアジア全体で何かがなされていることに励まされ、勇気を持って帰国することができます。

今私たちが直面している文化などの問題は伝統に深くかかわるもので、一日で片付くものではありません。そこで人の全面的な自由を推進するために教会組織が何を行っているかをご紹介したいと思います。私が自由という場合、貧困からの自由も含まれます。

人の生活の向上を目指す国家は人の尊敬の向上にも努めなければなりません。教会と政府はこうした目的の達成のために協力してあたるべきです。私の国、おそらく日本や世界中でも、宗教と政治の分離の問題があると思います。キリスト教についていえば、かつて、教会と国家が統合された時代もあります。教会と国家の統合によって歴史上多くのいまわしい出来事が起こりました。

今日、フィリピンに起こった最大の出来事はこの教会と国家の分離なのです。しかし、この分離というのは隔絶とは違います。国家も教会も同じ有権者をもっており、いわば鉄道の線路

のようなものではないでしょうか。近すぎてもいけないし、脱線するので離れすぎてもいけない。この分離とは批判的協力、あるいは批判的連帯といえるでしょう。教会は政党政治に決して巻き込まれてはなりません。いったん教会が政治制度と結婚すると、次の時代には未亡人と化してしまふからです。しかし教会は人の生活の向上を果たすための関わりは持ち続けると、はつきり述べたいと思います。つまり教会は人の全面的な自由を推進する組織であり、国家と人の生活の向上にあたる組織であり、更に教会は人の尊厳を高める全ての動きを支援するのです。

私たちは人権と自由とを何か同じものにとらえ、交換可能な言葉として使うことがあります。よく人権を肯定的あるいは否定的な現実や価値、「からの自由」とか「への自由」として規定します。したがって、この二つが関係している根拠は存在しそうです。権利は自由として実現し、自由は権利の度合に応じて広がるのです。しかし、この両者を緊密に関係づける基盤は一体何でしょうか？

これは、一九四八年の世界人権宣言によって認められた人権の人類学的、倫理的基盤に行きつきます。それは、曾野さんがおっしゃったように、人権の保持よりも侵害がしばしばはびこる世界における人権の優位性を確認する勇氣ある行動であり、人類への偉大な貢献です。権利に関する今世紀の最も意義ある宣言は宗教組織ではなく国家による連合体（国際連合）という

世俗的組織から発しているという事実を、我々教会は肝に銘じるべきです。このことは、真の信仰とは全能の神の子に対する尊敬によつてはかられることに鑑み、教会に何かしらの宗教的眞正さが欠けていることの指摘かもしれません。たとえそうであっても、宗教的信仰はかつてと同じように、いまだに人権宣言の終極的基盤の守護者の榮に浴することができると思いません。なぜなら人権の基盤は法律や、政治や経済の領域を越えたところに存在するからです。これは社会組織や、システムや機構に優先する価値の領域なのです。社会の眞実や眞理は、人が誇りを抱く価値の保護と進歩のために存在するのです。人の絶対の尊厳と価値は市民社会によつて保障された権利と自由の倫理的基盤なのです。ですから、互いの尊敬があるとき人をまとめるにはこれが唯一の道であることを強調したいのです。

あなたも私も人間であるかぎり欠点が多く、日々様々な問題を起こします。私たちは完全ではなく欠点があることを認めて、朝早く神様に「神様お許し下さい」と願うことのみです。地獄の悪魔が今日まで許されていないのに、私たちはなぜ神様から許されるのでしょうか？ 私たちはどのように十字架を切り、両手を握り、ひざこ跪くかを知っているのに対し、サタンは今までこうしたことができなかったからです。

私たちは皆天を信じます。フルトン・シーンは「この天よ。天には苦痛のない愛があり、地獄とは愛なき苦痛のあるところです」と言います。しかしこの愛は効果的でなければならな

い。いつも情緒的であつてはならない。美しいことを言いたがる人は多いが効果はない。

愛は多くの優れたものを持っています。犠牲に基づく愛は真実の愛であります。私たちが行おうとしていることは正にこのことです。人の生活の向上という私たちの仕事に努力を注ぐことです。これは神に対する愛によるもので、これ以外に解決はありません。

樺山 いろいろと多様な問題にお触れいただきありがとうございます。これらの問題を一つ一つゆつくりと議論していきたいのですが、日本人のパネリストの話に対しまして、ガンジーさんからもご発言があるようですので、お願いしたいと思います。

アジアとアジア人を考える

ガンジー 石原さんや曾野さんについてのコメントですが、まず曾野さんが日本人はアジア人であることをはっきり強調されたことを高く評価したいと思います。同じく石原さんがアジアと世界に対する日本の責任を受け入れておられることに感謝したいと思います。

しかし、曾野さんがいわれた二つの点について、敬意を抱きつつ礼を失わないように、反対意見を述べさせていただきますと思います。アジアにおける飢餓は曾野さんがいわれたほど限られたものとは私には思えないのです。アフリカの飢餓は驚くほどの現実であり、その苦しみ



について考えなければならぬと訴えておられるのであれば、まったく同感です。しかし、アジアの飢餓は私たちが念願するほど限られているとは必ずしも思えないのです。二つ目は、アジアの優しさが、私たちが望むほど強く根ざしたものであるとは必ずしも思えないのです。

樺山 ありがとうございます。これにつきましては、おそらく曾野さんの反論があるうかと思えます。また、石原さんからお答えがあるかと思えますので、それぞれ手短にお願いたします。

曾野 アジアを論ずることは、象をなでるようなものだと言われますが、これはほんとうにいい言葉だと思います。確かに飢餓というのは、おながやすい死にそうなものから、毎日の生活の中にとってもこれは人間としての健康

を保てないようなものまでいろいろだと思つたのです。

それから、優しきの問題ですが、私はパキスタンとインドとの間の分離の問題のときのことなども少し書物で読みました。しかし、マハトマ・ガンジーが為されたことは、やはり私はアジア人でなければ考えつかなくかつたことだろうと思つています。今ここに「ガンジー自伝」という本を持つております。そこでマハトマ・ガンジーがストライキについて書いてある四項目がございまして、少し読ませていただきたいと思つています。

「決して暴力に訴えてはいけません。ストライキ破りを無視せよ。他人の義捐金に頼るな。そして、ストライキがどんなに長く続こうが終始断固とした態度をとれ、そして、ストライキ中は、何か他の正しい労働によってパン代を稼ぐ」

これは単にストライキだけではなくて、もつと敷衍していろいろな形にこの言葉を考えることができるわけです。私はこの間に、たとえば人々が国産の綿糸を守るために、輸入の生地を焼いたりしたスワデシということについてのいろいろな問題点というのは読んでいます。それにしても、こういう非暴力による抵抗というのは、私はアジア人だから思いついたのだと考えます。

樺山 続きまして、石原さんからのご応答がごありになるかと思つています。どうぞ。

石原 どうしてアジアが隣の国とさえ仲良くなれないのかということに関して、皮膚の色もあ

まり違わない、中には言葉もある程度似ているという国が数多くあります。ほんとうにばらばらな政治なり、宗教なり、いろいろなものを独自で持っている地域というのは非常に少ないのではないかと、私は考えております。このような点がアジアの歴史にどういう影響を与えたのかを、これから考えてみたいと思います。

樺山 ありがとうございます。シン枢機卿は、ご承知のとおり、フィリピンカトリック教会最大の指導者ですが、キリスト教の教会が現在抱えている問題に対してたいへん強い社会的な関心を持ち、そのことによって平和や、あるいは自由や、あるいは貧困からの解放といった問題について行動と態度を明確にしておいでになるという話がありました。

実は、この話をもう少し他のパネラーの方々にも引き取っていただきたいと思えます。教会だけでなく、国家や政府あるいは地方公共団体、企業など、さまざまな人々とさまざまな自治体がこの運動に参加すればその結果として、私たちの間に、アジアあるいは日本に、そして世界に新しい秩序が構築し得るのではないかと考えられます。

まずは曾野さんにお話をお伺いしたいのです。というのも、曾野さんがいわゆるNGO（非政府型の運動）を通して、世界のさまざまな貧困や、あるいは紛争に悩む地域での活動を支援なさっているということを活字で見せていただいた覚えがあります。教会や国家を含むさまざまな団体、あるいは個人がいろいろな方法によって、このような問題に参加していけるとい

う点について、ふだんからお考えのことを伺えればと思うのですが、曾野さん、お願いできますでしょうか。

与えることの喜び

曾野 国家がお互いに仲良くやっていくためには、もちろん強力な哲学を持った政治というものが絶対に必要です。日本の政治には哲学がない、つまり自分の身を滅ぼしてもこれだけは言うんだという覚悟が政治家個人にないとよく言われているのですが、私たちはやはり政治家だけにそのようなことを任せてはいけませんのであって、日本語では「草の根の外交」というのですが、ほんとうに小さな雑草の根つこのような我々皆がお互いに土の中に張ってゆくことでその土を保ち、隣の植物にまで影響を与えるということが大切だと思っています。

そのようないろいろな団体が動いておりまして、日本にもたくさんさんのグループがあります。私がこれからお話するのは、たまたま私がここにいたからというにすぎません。しかも、私はどうしてそういう小さなNGOの援助を作ることになったかという点、それは私がカジノをもってルーレットではか当たりをしたからなんです。決して人を助けようという上等な意思などではなくマダガスカルという質素な国にあるたった一つの外人用のカジノに入るときに、私

がもしここでお金がもうかつたら、それはその国で働いておられる貧しいシスターに寄附しますと心に誓ったのです。私もカトリックなのです。それがたまたまそのとおりになりましたので、お金を差し上げました。

それが基金になりました、どんどん皆様からも援助をいただくようになり、それでこの仕事をスタートさせなければならなくなったのです。実は、美談とはおよそ逆の方向からスタートしたグループなのです。

ただいま私たちの海外邦人宣教者活動援助後援会には、日本人から年間三〇〇〇万円ほどの寄付があります。そしてそのお金をネパールやフィリピン、アフリカ、あるいは南米の国などに実際に定住して活動しているカトリックの神父と修道女の管理のもとにいろいろなものに使って頂いています。お隣にいらつしやいます石原さんの日産自動車からは、たとえばザイルに向けてハンディキャップ用の、子供たちを輸送するバスを、先日は特別にお願いして発送していただいたところですよ。

そのようなときに、私たちが望むのは何なのだろうかと思つたのです。私は小さいときからカトリックのコンベンツスクールに育ちました。そのために慈善という言葉で戦前に言われませんでしたことに反感と恥ずかしさを覚えて、そういうことは絶対するまいと逆に思っていたわけなんです。自分が少し物を持っているから、ない人にあげるとするのは、むしろちよつと恥ずか

しいことだと思っていました。これは外国人の方には多分わかっていただけない羞恥心なのかもしれません。しかし、一方で今そこで倒れている人がいるときに、私たちはごく自然に手を差し伸べるわけです。私どものグループはそういう形で年間三〇〇万円ほどを各地にお送りしています。これはまったくほんとうに普通の個人からいただいたものです。

たとえば、私のところに毎月三六七八円というお金を送ってくる人がいるのです。何で私は三六〇〇円にしないのか、七八円という端数をなぜ余計にくつつけるのだろうと思っていました。その方がおっしゃいますには、昔イエス・キリストの時代に、収入の一〇分の一を神殿税として納める *Tithe* という制度があった。自分には子供があつて、とても一割も納めることができない、だから一〇〇分の一税を納めさせてもらいたいといわれるのです。

あるいは七十過ぎの老人の方が、自分は社会的な地位ある仕事をしていたのだが、引退をした後、公共のトイレのお掃除をすると、一地方自治体から五〇〇〇〇円の日当をいただける。自分はまだ体も不自由ではありませんので、そうして働いた五〇〇〇〇円をあなたのところに送って、いろいろな方にあげてくださいといわれる。

私どもは基本的に二つの考え方をとっております。それは、その国の方のプライドを傷つけないようにしたい。したがって、深くその国の方たちの心の奥底まで入るといふことはしたくない。ゆえに二つの事ならばよろしいだろうと考えました。

第一は教育です。識字教育であったりミシンのかけ方のように、基本的なお仕事を覚えることに役立てばいいだろう。もう一つは、いかなる社会のいかなる思想の中でも共通に普遍的に正しいとされることで、それは病気を治すことです。世の中にはいろいろな思想があつて、片一方の国では良いことが違う国では反対になつてしまふこともあります。それを私たちは無理に統一するのはいけないと思つています。

しかし、地球上のいかなる国にも、病気でいいという社会的な思想はないのです。それゆゑに私たちは病気を治すお手伝いをはじめました。

日本人は戦後一九四五年から今まで、貧乏な出発をしたためか、要求することが市民の権利だという教育を長いこと受けてまいりました。しかし、これは聖書の中にございます二千年来の真理ですが、「受けるよりは与えるほうが幸いである」という喜びを最近になつて日本人がはつきりわかつてきて、そのことに膨大な数の人々が心から喜んで参加するようになったのです。ただ、日本人はたいへん恥ずかしがり屋で、それに地味でございますから、あまり目立ちませんが、私はただそれをお手伝いするということをやっております。そして、そのことに日本人が大きな喜びをもっているということとはご紹介しておきたいと思ひます。

樺山 ありがとうございます。先ほどガンジーさんのお話の中に、私たち、アジア人の手元には紛争を含めまして、解決についての武力がいまだに残っているという話もありました。私

もそう思うのですが、しかし、今そうではあっても、なお、ただいまの曾野さんのお話のように、紛争や貧困、あるいは病氣や無知、そうしたさまざまな問題に対する私たちの解決方法も少しづつ気がつき始めたということではないかと思えます。

ガンジーさん、あるいはカーンさん、あるいはシンさん、今の曾野さんのような活動がわが国でも行われておりますけれども、これについてお考えがおりますでしょうか。カーンさん、いかがですか。

人権とは普遍的なものである

カーン 日本の方々の率直なお話に深く感謝したいと思えます。全体を分析した上でいくつかの提案をしていただき示唆深いものでした。ところで先ほどの人権の話に戻りたいと思えます。人権とは何も新しいものではありません。山河の歴史と同じくらい古いものです。現在のイラクにあたるメソポタミアのハムラビ皇帝が石板にそれを書いたことが歴史に記されていますが、この石板は今でも見ることが出来ます。後に、パールシー人の指導者が自らの宗教（ゾロアスター教）を唱えたときにも人権を定義づけようとはしました。また、モハメットは、機会あるごとに述べていますが、とくに最後の巡礼において人権についてきわめてはつきり言及し

ています。

世界人権宣言はイギリスの権利の章典から始まっています。国際連合が樹立された際に、エレーナ・ルーズベルト夫人と共に特別委員会が設立され、この婦人の素晴らしい働きによって世界人権宣言として知られるものができたのです。しかしこれとて、終極のものではありません。これからも新たな発展があるかもしれない継続的プロセスで、これまでのさまざまな経験をいかして改善をはかるとともに、単に読むだけではなく、自分の町や国や世界中で実践していくことが必要です。私たちがイスラムにも人権宣言があります。つまり、人権とは継続的なプロセスが必要なのです。

樺山 ありがとうございます。ただいまの人権の問題につきましては、アジアにおいても現在なおきわめて深刻な状況にありますし、また私たちにとってある種の普遍的な価値を持ちうるものでありますが、もちろんこの問題については、逆に人権という観念が普遍的な価値として、世界のあらゆる民族、あらゆる国家にとって受け入れることができる価値であり得るかどうかということについての反論があるいは予想されるかもしれません。

この問題は、後に議論することにさせていただきます。石原さんから、日本の企業なり経済界の役割についてお伺いしたいと思います。先ほど技術や医療、あるいは教育、文化といった側面で経済界がさまざまな形で支援を行わなければいけないというご指摘がありました。

私たちもそのとおりだと思いますが、具体的に個々の企業、あるいは経済界がどのような形で参加できるのかについて、日本の産業界の主張としてご説明いただければと思うのですが、いかがでしょうか。

世界への恩返しとしての日本の貢献

石原　日本が今のような問題についてかわりを持ち、世界の安定、あるいは進歩に貢献しなければならぬ理由の一つは、やはり日本の経済がこれだけ大きくなったことでしょう。なおかつ貿易バランス面でも大きな黒字を持っている日本は、その責務としてやはり世界に貢献しなければならぬ。これは経済的な余剰を獲得したから、単に経済の問題で返せばいいという問題ではなく、広く各国が困っている問題、あるいは世界各国が必要とする問題、各国がこれからよりよい生活を求めて国の発展を希望するときに必要となる援助を行ってゆくことだと思います。これは、日本が戦後、廃墟の中から立ち上がってきたとき、世界から受けた各種の援助に対する返礼ではないかと考えます。

もう一つの理由として、企業活動がボーダーレス化していることがあげられるでしょう。国境を越えて品物が行き来する、人間が行き来する、そこにビジネスが生まれる。そうした状況

のもとで、日本の黒字ができ上がっているとするれば、先ほど曾野さんが言われたように、やはり草の根の援助が必要になってくるのではないでしょうか。日本の各企業は世界の各先進国へ投資しているだけではなく、まだ十分に発展をしていない国、貧困な国へも投資しています。そのビジネスの行われる地域で、よき民間人として、良き市民権を得ることが非常に大切だと思います。そのためにも、単なる目先の利益にとらわれない運動をすべきではないかと考えています。

日本企業がビジネス面だけでなく、個々の文明の問題、あるいは教育の問題、保健・医療の問題などいろいろな形でかかわり合うことで、世界各国に対して一つの恩返しをすることにもなるでしょう。また、日本というものを改めて世界各国から見直してもらえるよきチャンスではないかと考えています。

樺山 ありがとうございます。すぐに結論が出る問題ではございませんが、平和や、自由といった大きな価値を目指して、さまざまな宗教の団体や政府、一般企業、そして曾野さんのお話にありましたNGOなどの市民団体他、多くの団体が広い範囲にわたって活動し、またそこで新たな目標を発見していくという過程を通して、日本、アジア、そして世界が新しい秩序をつくり出していく可能性が見えてくるように思われます。

和解と架け橋作りこそが人権の最大の擁護

樺山 私たちは、今日日本、あるいはアジアを含めまして、たいへん多くの問題を抱えておりますが、とりわけ人権にかかわる問題が新聞紙上も含めまして、たいへん広く話題になっております。この人権をめぐる、アジアの諸国ではさまざまな問題が引き起こされている。これはご承知のとおりかと思えます。

これまでのディスカッションの中でも、パネラーの方々からさまざまな形でこの問題について言及が行われましたので、しばらく時間をおかりしまして、この問題についてももう少し議論を深めてみることにしたいと思います。言うまでもなく、私どももこの人権問題を実は幾度も論じてきました。いつも結論は出ませんが、最終的な結論を出すためというよりはむしろ問題の広い展開と、より広い視野を求めて、ここでも多少の時間を使って、それぞれの考えを伺いたいと思います。

それでは、ガンジーさんからお話しいただきたいと思えます。ガンジーさんはすでに幾度ももわたり、この人権問題をめぐって、国際連合をはじめとするさまざまな国際的な場で活動しておられますので、この問題につき、広い角度から、あるいは具体的な問題からお触れいただ

き、ガンジーさんの問題提起を受けて、他のパネリストの方々からご発言をいただくことにしたいと思います。ガンジーさんよろしく願います。

ガンジー ご紹介いただいたように、私は一九九〇年国連人権委員会でインド代表の団長を務めましたし、インドにおける二つの市民権組織（市民自由連合と民主市民）のメンバ―として活動してきました。またジャーナリストとしての人権行使の過程で短期間投獄されたこともあり、ます。しかし、ここでは人権のある特別の側面について話させていただきたいと思えます。人権の問題はとても広範な問題です。政府のふるまい、国家のふるまい、圧力団体のふるまい、武器業者のふるまいなどが関係し、またマスメディアも人権に大きな影響を与えます。これらそれぞれが重要な側面ですべてに対応するのは不可能なのです。

しかし、私が強調したいことは、世界中で人権が深刻に侵害される一つの大きな要因は、激しい紛争が起きるときです。カンボジアでの悲惨な殺りくが起ったときに人権はありましたか？ 人権で最も大切な生きる権利はどうですか？ 今日アジアを含む世界各地で起きている衝突や紛争が、人間にとって最も初歩的な人権である生命そのものを奪っているのです。ですから、ある意味で人権の最大の擁護者は紛争に和解をもたらし、その根を取り除く人や組織や国であることを申し上げたいのです。

そこで、太平洋戦争の後、いかに日本の指導者の方々が次々と世界の国々を歴訪し、きわめ

て謙虚な謝罪をされたかをお伝えしたいと思います。当時青年であつた私はこうした謝罪を直接耳にする機会がありました。今日の日本の若い方々の中にはそうした謝罪が行われたことすらご存じない方もおられると思いますが、当時私は憎しみが溶け去り日本とアジアの隣接諸国との新しい関係が築かれるのを目のあたりにしたのです。こうしたことを過小評価することも、こうしたことの人権に対する影響を無視することもあつてはならないと感じます。

これに関して、フランスとドイツの間に起こつたことについて触れたいと思います。同時に私も知り合うことのできたあるフランスの女性について述べたいと思います。この人は貧しい人や女性や子どもの権利や人権について勇敢に戦つた社会主義者で、ドイツ軍がフランスを占領したときもレジスタンスに加わっていました。彼女の息子もレジスタンスに加わりドイツのゲシュタポによつて拷問されました。このイレヌ・ロー夫人も当然のごとくドイツに対する激しい憎しみを抱き、ドイツ語の声を聞かぬのも耐えられないというほどでした。

大戦が終わつて間もなく、彼女はフランス国会に最高得票で当選しましたが、そこであることが起こりました。ドイツの女性が彼女にとつても謙虚に謝罪したことによつて彼女の心が氷解したのです。ドイツに対する自分の憎しみと、ドイツが絶滅することを祈つていた自分に気が付いたのです。そして、ドイツにしばらくの間占領されていた側の国民である彼女が、憎しみを抱いたことに対して、占領した側のドイツ人に謝る決意をして実行したのです。

自ら進んでドイツに出向き、行く先々で謙虚に謝ったのです。そしてフランス人とドイツ人の多くが、これに習った行動をしました。今日、独仏両国間に緊張や不信が不思議なくらい存在しない陰には、こうした人々の働きがあったのです。

こうして、新たな戦争が避けられたのであれば、ヨーロッパの人権が前進したといえるのではないのでしょうか？ もし極東において新たな緊張が回避されたのであれば、人権が進んだといえるではありませんか？ もしインドとパキスタンの深い対立に和解をもたらすことができれば、人権を推進することができるとはいえないのでしょうか？ もしこれをしなければ、人権に関する他のさまざまな努力が何の役に立つのでしょうか？

人権に関する他の側面を過小評価しているわけではありませんが、人権の最も基本である生きる権利に果たす和解と架け橋作りの役割に皆様方も焦点をあてていただきたいのです。

樺山 非常に印象深いお話だったと思います。常日ごろ私たちは人権という問題を論じますと、それぞれの国民がそれぞれ違った人権という考え方を持っています。その結果、ある場所では生きる権利だと言い、ある場所では表現する権利だと言い、ある場所では労働組合をつくる権利であると言い、それぞれみな基本的な最も重要な人権であると言いつつ、その結果として、お互いの間には人権をめぐる争いが起こるといふ、きわめて残念な結果に陥りがちであります。今のように、和解するところから、あるいは和解を目指すところから人権が再び取り戻

されるという、このご指摘はたいへん示唆に富むものだと思います。いかがでしょうか。シンさん、あるいはカーンさん、それぞれの立場、あるいはそれぞれの宗教においてお考えがあるかと思いますが、シンさんからご意見をお願いします。

平和は、一人一人が良心に基づいた役割を演じれば達成できる

シン 私には、アメリカで勉強している五歳になる姪がおります。ある晩帰宅した彼女は母親に、「この家ではどこに私の人権があるの？」と聞きました。母親は「私、今でもあなたの母親よ」と答えたといひます。

ローマでローマ法王が神学者たちに「あなた方はいつも神について話されるが、神には直接語りかけない。だから人々は混乱するのです」と言いました。また彼はローマの教会のソーシヤルワーカーたちに「皆さんは神の仕事には従事されているが、仕事の神には仕えていない」と言いました。今日私たちは平和を築くための人権について話しております。平和は私たちの中から始まり、それが愛に根ざした正義、調和のとれた開発、そして連帯という動きで外に現れるのです。

私は新聞記者に、「慈悲なき正義は専制である。正義なき慈悲は弱い。愛なき正義は純粋社



会主義である。正義なき愛はたわごとである」と言いました。平和とは単に戦争が存在しない以上のものです。つまり平和は、対立する勢力同士の力の均衡の維持や、専制支配から抜け出すことに限られてはならないのです。平和は正義そのものとも言われます。さらには、他人や他国の人々の尊厳を尊重するという決意と友愛の実行とが平和の形成に欠かせないのです。

今朝、私は経団連の方々との朝食会で、フィリピン在住の宇野さんという金持ちの友人の話をしました。教会でお金が必要なき時は彼に電話をすれば、教会に必要なだけ出してくれます。宇野さんにはビジネスマンの友人があり、この友人誕生日のためにバザーで三つの鏡を買ってきました。

最初の鏡に彼はこの友人の絵を貼り、その下

に「ハンサムで、美しいあなたを見よ」と記しました。二枚目の鏡には彼の頭蓋骨を貼り、「あなたの未来がどうなるかを見よ」と書きました。三枚目には神の絵を貼り、「神に従えば、私たちのスイートホーム、天国でハッピーバースデーを歌うことができる」とありました。これが基本です。

「ドン・キホーテ」の本を私は読みましたが、ドン・キホーテにはサンチョ・パンサという従者があり、バリタリアスという島の知事になりました。しかし彼は無知であつたのでドン・キホーテに言いました。

「御主人様、あなたは頭もよく賢い方ですが私は無知文盲です。私を助けて下さい。私は今や知事になりました」

ドン・キホーテは彼を見て笑って言いました。

（ドン・キホーテは齒無しでしたから、私がおの場にいるなら、笑わないように、と彼に言ったのです。）

「息子よ。人生はチェスゲームのようなものだ。ゲームが行われている間は誰かが王様の役を、他の人々が女王やビショップ（司教）や馬やタワーや歩の役を務める。しかしゲームが終われば歩はすべて女王や王様と一緒に箱の中に収められる」

人生はドラマのようなものです。私たちが生きている間は私はビショップの役をしていま

す。誰かが皇帝、他の人が医者、教師、ビジネスマン、そして残りは歩です。人生のドラマが終われば誰もが棺という箱に収まるのです。皆さん、最も重要なことはいかにしてその役割を演ずるかということです。私たち一人ひとりがそれぞれの役割を優等生で演じれば世界に平和が訪れるのです。これを私は良心の形成と考えます。

樺山 ありがとうございます。たいへん広い範囲のお話をいただいたのですが、余計なこと一言つけ加えさせていただきますと、ハイメ・シン・アーチビショップがチェスゲームの駒であるビショップの話をしておられるのがたいへん私にはおかしく思えました。先ほどの人権の問題をもう少し伺いたいと思っています。まず曾野さん、その後、カーンさんという順番でお願い申し上げます。

オスカーワイルドの短篇から人権を考える

曾野 私はおとといアメリカから帰ってきたのですが、そのときにたまたまアメリカでオスカー・ワイルドの本を買いました。あとで気がついたのですが、オスカー・ワイルドが『さくろの家』というのを書いて最初にイギリスで発行されてからちようど百年がたったようでございます。私はカナダとアメリカへ参りまして、それらの国々でほんとうに尊敬すべき何人かの

方々にお会いして帰ってきたのですが、いずれにせよ、世界の情勢は、今ここでお話になつていらつしゃいますように、簡単に済みそうな状態ではございません。

そのときに、その本の中に出ておりました有名な「スター・チャイルド」という大人のための童話を読みまして、旅の途中で感動をいたしました。こんなにもオスカー・ワイルドというものが私たちの心に大きく、百年の年月を感じさせないほど今日的な感動を与えるかということを考えてわけです。

それはこういうことでございます。ご承知のように、星の子供というのは星から生まれたのですが、何か捨て子のような形で拾われた。そして、養い親に育てられたわけですが、彼自身はたいへんに美男子でもってすてきな青年で、いつも手下を従えて歩いている。自分は大した人間だと思つてゐるような青年に育つたわけです。

そこに、あるとき貧しい乞食の女性が参りまして、彼が拾われたときに持つていたものから、「あれは自分の息子なんです」と言うのです。すると、その星の子供はたいへんに怒つて、「あんな醜いおばさんの子供じゃないんだ」と言つて、その貧しい老女を追い返すわけです。

やがてこの星の子供は自分も醜くなり、だれも顧みるような状態でなくなつてしまひ、ある町へやつてくる。その町の王様と王女様が実は自分の両親だつたわけですが、それに気がついたときに、星の子供は言うんですね。「かつて私はあなたに、あなたに憎しみをあげました

(I give thee hatred)。しかし、「私に愛をください (Do thou give me love)」^①。これは私の心をほんとうに揺さぶる言葉なのですが、やはり憎しみというものを持つという立場ではなく、愛というものを持ち得る立場に私たちがどうしたら到達できるかということが、今生きる上で大きな目的であり、芸術になっていとも思うのです。

かつて私は聖書の中で非常にいいギリシア語を一つ習いました。それは「アレテー」という言葉です。それは徳という意味もありますが、同時に勇氣、卓越、男らしき、奉仕、貢献、すべてを表わしているのです。それが一つのアレテーという言葉になっております。その当時のギリシア人にとってはそういうものだったのでしょう。つまり、すべての人権を守るといふ徳は勇氣がなくては行われず、かつそれは奉仕、貢献の精神がなければあり得ない。かつて、日本人は徳のある人と勇氣のある人は別者のように思っていました。が、聖書は二千年も前からその真実というものをちゃんとその一つの言葉に含めています。

オスカー・ワイルドの小さな短篇、そしてまた聖書のたった一つの言葉から、私たちは人権というものをどういうふうに考えたらいいかということを示唆されるように思います。

樺山 ありがとうございます。それでは、続きまして、カトンさんにお願ひします。

次代を創る「子供の権利」こそが必要

カーン これまでの討論であまり触れられていない点があります。ユニセフのグラン事務局長によって熱心に推進され、子供の人權について初めて焦点があてられた会議が、国連、ユニセフ、世界宗教者平和会議（WCRP）の手によってアメリカのニュージャージーで開催されました。労働者の権利、産業人の権利、他の人々の権利が言われますが、今日の子供が明日の市民になることが忘れられています。もし子供がその人權について当初から良い教育を受けたならば、私たちの国を将来の多くの破壊の道から救うことができると思います。さもなければ、助けも、保護も、指導もなき子供たちが世界中のさまざまな社会に対する大きな脅威のもとになるかもしれません。

私たちは子供の扱い、教育、ニーズに関して研究する委員会を日本で作っていただけないかと思えます。アメリカの夫人たちもこの問題を取り上げましたし、パキスタンでも、世界宗教者平和会議に刺激を受けて、国連から得た資料をもとに主に女性からなる委員会を作り、大きな助けになっています。日本は日本を含めて世界の子供を忘れていたのだと思います。

樺山 児童の権利、あるいは女性の権利、もしくは老人の権利、少数民族の権利など、個々に

さまざまな権利を、いくつも挙げる事ができるかと思えます。これらの問題は、近年の社会の中でこれまで無視されていたことに次々と目が向き、その結果、私たちの人権をめぐる状況は少しずつよくなっていると思われます。しかし、この人権が他方で政治権力、あるいは国家権力によつて蹂躪、抑圧されるといふ別の現実も残されているのです。この二つの現実のはざまに生きていくというのが私たちの現在の実情ではないかという気がしてなりません。

ところで、企業あるいは経済界そのものがむろん人権の問題と直接かわつてはいるわけではありませんが、このような問題に対して、経済界あるいは企業が無縁の事柄だと避けてきたきらいがあつたという気がいたします。しかし、これからは先ほど石原さんのお話にもありましたがとおり、日本がさまざまな国際的な貢献を行つていく中で、これらの問題を避けて通ることができないのではないのでしょうか。このことについて、石原さんからお伺いしたいと思ひます。

企業が人権について考えるべきこと

石原 企業も人権を避けて通れません。企業はやはり一つの目的に向かつて歩みをそろえていく一つの集団ですから、この集団の中でどのような規律が必要なのか、その規律を破るといふ

ことに對してはどうするのかという点で、非常に深く人権問題にかかわり合つてくるでしょう。

もう一つは、企業に所屬する人々に對して、何を集團は要求するのかという点を考えてゆかなければいけないでしょう。たとえば、女性の人権、あるいは青少年の人権の定義があまりはつきりしないまま、とかく人権というものが議論されているところに問題があるようです。私は人権の問題をお互いが議論をする中でもう少し掘り下げる必要があるのではないかと考えています。

企業が前進をするための一つの規律、規範、というものを踏み外した人に対する考え方というものは、単に企業の面だけからは議論できないと思います。また、企業が海外へ進出した場合に、現地の人との触れ合いの中で、どの程度相手の人権を企業が尊重しなければならないのか。非常に大きな問題があると思います。一つひとつの例を取り上げることには問題があると思いますが、それを統一した規範で処理できるかどうかという点についても、私は少し疑問を持っています。

樺山　ご指摘のように、人権とか、あるいは基本的人権と言われるものが一体どんな定義で覆い尽くすことができるのかということについては、実は専門家の間はもちろんのこと、これにかかわっている活動家の間でも必ずしも意見が一致しているわけではないと思います。本来で

あれば、この問題をめぐって別のシンポジウムでも催さなければいけないのでありますが、この場では人権の問題について一応の皆さんのご意見を承り、それぞれ私どもで考えていきたいと思っております。

良心の声に従い、共通の道徳基準を基盤に

榊山　ところで、ダライ・ラマ十四世をはじめ、イナムラ・カーン博士、ハイメ・シン枢機卿、ラジモハン・ガンジー上院議員の四人の方々が共同でサインされた宣言文（一〜二ページ）がございませう。この宣言文の一番最後の段落が、とりわけこのような世界の四大宗教を背景にして問題を考えておいでの方々のきわめて高らかな締めくくりとなっているという気がいたしますので、この数行の部分だけ読み返してみたいと思います。

「良心の声に従い、正直、純潔、無私、愛という絶対的な基準に根ざした道徳を共通の基盤にすることによって、異なる宗教を背景に持つ私達が時代の要求に向かって手を携えて歩んでいくというこの確信こそが、私たちをこの意義深い会合に集わせたのであり、全人類の未来を照らすものであると信ずるものである」

人権という問題は、それ自体も社会的な権利でもありますので、しばしば明文化され、ある

いはその侵害に対しては裁判が行われます。

しかし、それは必ずしも社会的な制度だけで成り立っているのではなく、むしろそれを支えている人間的な価値、あるいは道徳的、かつ精神的な基盤の上に立っていなければならぬ。良心であるとか、純潔、無私、愛、正直、あるいは正義といった、それ自体は、一見するときわめて抽象的であるかに見えますが、しかし、それぞれは人間の内面の声に従い、そこから出発するさまざまな道徳的、精神的価値であり、こうしたものの上に立たない限り、基本的人権というものは意味を失ってしまうでしょう。

これまでとりわけ宗教を背景にしてお話しいただきました。皆さんの表現される言葉はそれぞれ違います。この問題を最終的に突き詰めていくならば、これから私たちは二十一世紀に向けて物をつくり出すことも重要ですが、同時にその中に私たちの内面の声、人間的な価値をいかにして付与していくかが大切だと思われれます。あるいはそのような作業の後に、異なった人間、異なった宗教、異なった民族がいかにして和解をつくり出せるのか。それがつまり、基本的人権を実現する最も重大で、かつ場合によっては最も早い方法ではないかという気がしてならないのです。

さて、このシンポジウムの締めくくりに当たりまして、日本がこれからのアジアにおいて、あるいは世界においてどのような役割を果たし、どのような貢献を行っていかなければならぬ

いかを論じていただきたいと思います。場合によっては、現在の日本が行っており、また貢献、もしくはさまざまな役割に対する不安、不満、あるいは非難など、さまざまあり得るかと思えます。外国からおいでのパネリストの方々には日本に対する期待、もしくは注文、そして日本のパネラーの方々は、これから日本がどのような役割を果たしていくべきかということについての決意、あるいは抱負をお願いしたいと思います。あわせてアジアがこれから世界の平和、世界の新しい秩序の中でどんな役割を果たしていけるのかという、アジア人としての共通の課題についてお考えのことをそれぞれ伺って締めくくりにしたいと思います。それでは、ハイメ・シンさんからよろしくお願いしたいと思います。

一人ひとりの責任とお互いの連帯

シン 人権についての話が続いたあと、アジアに対する日本の貢献について話が移っています。しかし、私は人権に続いて人の責任についてお話ししたいと思います。人の権利のあるところには必ずや責任が存在するはずで、では、世界に対する個人や社会や国の責任とは何なのでしょうか。人の責任なきところに人権がなく、神は私たちを創造することによって私たちを愛したので、神は私たちの愛を欲するのです。神は見えませんが、この愛は、神に

対してだけでなく、人を通して神に捧げられるものです。神の救いは人を通して、人の中で、人と共に行われるのです。私たちはまず私たち自身に対して、続いて隣人を、第三に社会を、第四に全世界に対して責任をとるということが重要なことです。

素晴らしい例をご紹介します。私は貧しい人々のための病院を二つ持っていますが、その一つの病院の院長が誕生日の日に倒れ、六階に收容されました。そこで見舞いに行きましたら病院の入口で一〇人の看護婦さんに迎えられました。そのうち一人は妊娠していました。

車から降りるとその女性が私に、「女性に囲まれたあなたは幸せです」と言いました。私は彼女に「あなたの胎内の果実は幸せです」と答えました。そして私たちがエレベーターのところにいくと停電で階段を登らなければなりません。山や階段を登るとき、身を屈める必要があります。そうすることによって頂上や病院の六階まで到達できるのです。それはいやなものですが、これはプライドか体裁作りのせいかもしれません。そこでヨハネの言葉を思い出します。「登りたければまず降りよ。勝ちたければまず負けよ。楽しみたければまず苦しめ。生きなければまず死を」

マニラにとても背の高い司教がいます。一方とても背の低い牧師さんがいます。彼がこの司教に「司教、上の方は涼しいですか」とたずねました。司教は答えるために屈みました。私は思いました。「この司教は、偉大だ。屈む術を知っている」と。

私たちの責任は重要です。ただ単に責任の規則やルールを述べるだけではいけません。ですから、隣人や国や世界のために何をするのかを毎朝少なくとも三十分は冥想をして考えることを、ご出席の皆さんに提案したいと思います。責任は単なる我欲ではありません。自分のためというのではなく、自分を無にすることで責任をとるということです。外なる平和は内なる平和の結果ですから責任は何か外にあらわれてくるものだからです。まず集まらなければ、そこから展開していくこともできないのです。アジアに対して何ができるかというとき、この問題を抜きに解決することはできないと思います。

まず各自が自分で考え、次に他の人々と連携するのです。自分がリーダーでないと連携しない人もいますが、より住みやすく、去るには惜しい世界を築くために連携するのです。そして、連帯の果実として平和が訪れるのです。

祖国愛から人類愛へ

カーン 枢機卿が仰せられたことに原則的に同感です。しかし、こうしたことで日本をわずらわせるのではなく、それぞれの国民に責任や義務の観念を教える必要があります。私たちが日本に望むことはもっと大きなことだと思います。

私の国を含めた第三世界の国々は日本に高校以上の工業学校や工業研究所を作っていたきたいのです。国の産業化を進めるために国民が経験や知識を修得できる何十もの学校が必要なのです。法外のもの求めているわけではありません。大きな工業大学を望んでいるわけではありません。そうではなく、最も優れた水準にある日本の産業技術の訓練を現地の若者たちに与えて欲しいのです。日本が是非アジア諸国に素晴らしい訓練センターを作って下さることを希望いたします。

ガンジー これから私が申し上げることは、日本を尊敬し、賞賛し、愛する人間の言葉として聞いていただくことを日本の皆様にもまずお願いしたいと思えます。

私は日本のなせるすべてのことにただただ驚嘆するばかりです。出される食事も、家庭やホテルにゲストとして招かれても、部屋に活けられた花も、出されたフルーツサラダも、企画運営されたシンポジウムも、開催されたオリンピックも、その綿密な計画、労苦、忍耐、想像力はまったく信じられないほどです。私には日本がどうやってそんなことができるのかまるでわかりません。ただただ感心と感謝の頭を下げるばかりです。ご承知の通り、「日本には経済的な目標しかない。日本は精神的な国ではなく物質的な国だ」という人が世界中にいます。私はそれに断固反論します。日本には深い精神性があるのです。経済的發展や技術的發展の背後にはたいへんな自制があるはずで、苦難を受け入れ、苦しみ、経営者は一生懸命働き、重役は

きわめて厳しい労働条件を受け入れます。労働者は朝から晩まで汗水流しています。このように、日本の発展の陰には物質主義ではなく大きな精神性があるのです。

しかし私は、日本の変革を切望しています。それは日本の改宗です。ヒンズー教徒になって欲しいではありません。日本の方々に祖国愛から人類愛への改宗を考えていただきたいのです。なぜ日本は人類愛を受け入れるのに慎重なのでしょう。日本人が冷淡なのではありません。日本人に心がないとか冷淡だといって非難する人は誰もいません。世界の苦しみにわずらうことを拒んでいるのでもありません。世界に出かけて責任を担うということは未知の領域なので日本はできるかどうか不安なのです。

日本にとって最も栄光の時代は、日本が人類愛という宗教を果敢に受け入れたときに訪れると心の底から信じています。日本はその役割を担うよう運命づけられていると信じます。日本がいかに戦争を遂行したかを語る人がいますが、日本がこの運命を全うしたならば、日本がいかに世界平和を遂行したかが将来語られることになると思います。

樺山 ありがとうございます。祖国愛から人類愛への改宗を求められましたが、果たして、私も含めて、その意味を十分了解し得るかどうかについて多くの問題や不安を残していると思います。しかし、今のお話の意味はたいへんよく私たちも理解できました。ガンジーさんにおくられた大きな拍手はそういう意味かと拝察いたしました。

それでは、続きまして、石原さん、先ほどのカーンさんのお話にもありましたが、日本がこれから果たしていくべき役割、貢献についてよろしく願います。

まず身近なアジアに人類愛としての援助を

石原 日本に対する要望を皆様方からいろいろ伺いました。私は当然だと思います。少なくとも経済の面から日本を見れば、ほんとうにうらやましい、どうしてあのような経済の発展が獲得できるのだろうか、見られていると思います。先ほどの議論でも申し上げたのですが、日本が一九四五年に敗戦した当時、日本のほとんどの都市が爆撃で焼かれ、ろくろく住む家もない状態でした。そこへ兵隊を含めて海外から何百万人もの人たちが日本へ帰つて来た。一体、どのような時に当時は食べていたのかと、今でさえ不思議に思うほどの状況でした。敗戦から半世紀たつたいま、それを思い出すことが部分的には不可能なほど違つた世界に、私たちは住んでいます。

日本経済がここまで大きくなつた背景には、やはり多くの国の心温かい援助があつたのです。日本は戦争をしましたが、日本人そのものを憎んでいるのではないという気持ちからの援助があつたのだらうと思います。そのおかげで、これだけ大きくなつた経済大国日本の国民と

して、今度は日本へ送られた多くの援助に対するお返しをしなければならぬと私は思います。

しかし、地球は相当広いものですから、すべての地球の問題を日本人が解決することなどできないと思います。まず、自分たちの隣から始めるという意味で、アジア各国へ日本の援助の手を差し伸べるのが第一に必要だろうと思います。私たちは自分の成長だけを望んでいるわけではありません。アジアの各国にどのような援助をすれば日本と同じような成長ができるのだろうかと思えます。アジアのいろいろな民族の人たちの生活がどうすれば、日本人ぐらいの生活程度になるのだろうか。日本の経済界にいる人は考えていると思えます。

今後、日本が自国の経済成長を多少おくらせても、アジア各国の発展を援助する方向に転換をしなければならぬ。それには、先ほどガンジーさんがいわれたように祖国愛から人類愛へ改宗しなければならぬのですが、私たちはまず身近なアジアの人々に人類愛としての援助の手を差し伸べるべきだと思います。

日本はまだ資金も多少ありますし、各国にない技術も持っています。この技術と資金に加えて、ガンジーさんのいわれた人類愛を持って接するならば、何年か後には必ずアジア各国の国民の生活状況は非常に向上し、それによって経済全体も伸びていくという良循環がおこるのではないかと考えています。

その意味で、日本人はこれからどうすれば改宗できるのか、どうすればアジアの人々に援助をできるのか、それをこれから真剣に考えなければならぬ時期にきていると思います。

榊山 ありがとうございます。それでは、最後に曾野さんからお願ひします。

曾野 日本は科学技術がたいへん発展し、半導体をはじめ非常に優秀なハイテク製品をつくれるようになりました。そうしますと、日本は技術的・物質的な面をすでに達成しており、日本はもう世界からは学ぶものは何もないのだと思います。上がったことをいう人が、ほんの一部ですが、出てきたという話を聞くわけです。

私は、人を尊敬するということは快樂であると昔から思い込んできました。実にこれは楽しい感情でございます。そして、人を尊敬する背後には、人が持っているすばらしい面を見るのと同時に、自分が持っている良い面も多少は見てもいいと思います。しかし、自分の持っている非常に足りない面をはっきり認識し、人を尊敬することの快樂を見つけ、同時に謙虚さを持つことがいいことだと思ひ続けてまいりました。

ほんとうは言いたくないことなのですが、日本が持っている非常に恐ろしい一面をこれから申し上げたいと思います。昭和二十年代の初めに日本には優生保護法ができました。それによって経済的な困難がある場合には、人工妊娠中絶をして構わないというふうになったわけでございます。それから今日までに日本人がどれだけの中絶をしてきたか、つまり命を絶つてきた

かというところ、五五〇〇万から一億人に上るといいます。ほんとうの数は誰にもわからないのですが、もし五〇〇〇万人ぐらいたとすれば、イタリアに住む人たちを全部抹殺するほどの数になります。一億人だとすれば、ほぼ現代の日本人全員に近い数の命を絶つてきたわけです。

人権と言うなら、いちばん弱いのは胎児ではないでしょうか。反対の声も上げられず、デモもできずに、ただ殺されてゆくのです。もしこのようない億の命を絶つて、日本が繁栄をもたらしたとすれば、これはほんとうに外国の方々には知らせたくないほどの恥ずかしいことです。やはり私たち日本人が今後とも謙虚さを持ち続けて、そして他の人から多くを学ばなければいけないと思います。

私がマダガスカルという国に滞在しておりましたとき、小説を書くために、小さな修道院の経営するマタニティクリニック（お産をする場所）を訪れました。そこで一人の未熟児が生まれました。非常に貧しい夫婦の十何番目かの子供でございます。お母さんは栄養が悪いので、一〇〇グラムほどの子供を産んでしまう。その子供は肺胞の機能が十分ではなかったのです。マダガスカルには保育器の中でその子供に与え続ける酸素がなく、必然的にその子供は育たないということになりました。

そのときにお父さんは、裸足で、破れたシャツを着て、てっぺんのところ破れた麦わら帽子を心配のあまり握りしめながら新生児室の外にいました。この子を長く苦しめないでや

つてくれ。しかし、洗礼を授けて神の子供として旅立たせてやってください」と言いました。そして、「名前は何てするの」と聞きましたら、「マリア・マダレーナと名づけてほしい」と言ったのです。

マリアは、その夜、四、五時間ぐらいの人生を終えたのですが、その夫婦は子供をタクシーに乗せて帰る余裕ありませんでした。真っ白な布に子供を包み、スビツクと呼ばれる小さなかごに入れ、そしてその上に果物に乗せてカモフラージュして、民間のバスに乗って帰っていききました。マダガスカルでも死骸を公共の交通機関に乗せて運ぶことはもちろん違法なのですが、彼らはタクシーを雇うことができなかつた。

しかし、その父親と母親の命の尊厳に対する姿は、少なくとも日本人の多くがとっていたよりもはるかにすばらしい厳然としたものでした。これはほんの一つの例ですが、私たちは、どんな人たちからも学ぶことがございます。その気持ちがおそらくすべての人権に対する最初の方角づけだろうと思われれます。

今、平和のために何をなすべきか

樺山 ありがとうございます。それぞれパネリストから最終の締めくくりとしてたいへんす



ばらしいお話をいただいたと思います。まだ、いろいろと反論なり、感想なりおありかと思いますが、シンポジウム全体としてはこの辺で終了したいと思います。最後に一言、私コーディネーターから短いまとめを申し上げて締めくくりにさせていただきます。

まず、このシンポジウムを三時間司会させていただいて、たいへん驚き、感動したことがあります。外国からおいでになりましたシンさん、カーンさん、ガンジーさんと、三人とも、それぞれ非常に強く、また優しい個性の持ち主であり、お話になるときのたいへん強い確信と優しさ、優雅さ、あるいは風格、格調とでも申しますか、そうした人間的な魅力にあふれておられます。さすがそれぞれ宗教なり、それぞれの国民の中において指導的な地位を果たしてお

いでのなる方々だと、そのことにまず私は大変感銘を受けました。

きて、このシンポジウムの締めくくりとして私なりの個人的な結論を述べたいと思います。できますれば皆様と共有したい結論として、簡単に三つのことを申し上げます。

第一には、現在、世界は大きな歴史的転換点に立っており、むろん日本も、アジアも、そして世界各国もそうであります。この歴史的な転換点にあつて、私たち日本人も、そしてアジア全体の人たちも、大きな貢献をすべき義務を持っています。またそれだけに私たちにとつて、決して安易ではない道が先に横たわっていると、きょうのシンポジウムで改めて私は確認をいたしました。

第二点として、人権に関するさまざまな問題について申し上げたいと思います。人権にかかわるさまざまな背景、あるいはその根底に横たわる人間的な価値、あるいは精神的な価値と言われるもの、それをときには自由と呼び、ときには愛と呼び、ときにはそれを正直と呼び、さまざまな呼び方が可能でしょう。また宗教や言語によつても違いがあるでしょう。しかし、それぞれの人間的な内面の価値に手がかりや足がかりを求め、その上に立つて、私たちは人権、あるいは制度、そして国家、経済といったさまざまな文明的な施設機関をつくり上げてまいりました。その内面的な人間的価値こそが、いま最も強く問われています。

私たちの世界にはまだ飢える人も多く、また紛争も絶えません。そうした紛争や飢えを解決

する手段として、さまざまな社会的な手段、法律上、政治上の手段とともに、このような人間の価値にもっと大きな注意を向けなければならぬと思います。私たち日本人は、えてしてそのことを後回しにし、むしろ他の手段で平和や自由、あるいは繁栄を勝ち取ろうとしがちでした。しかし、私たち日本人もまた同じようにこの転換点にたち、これまでの考え方を大きく反省しなければならぬと思われてならないのです。

最後に、世界の大宗教を背景とした外国人の方々においていただきましたが、宗教ばかりではなくて、国家も、政府も、経済界も、そして企業も、言うまでもなく個人も、また個人が集まったさまざまな団体も、それぞれの方法で平和と新しい秩序の構築にかかわり、それに深い責任を負うことができます。

その方法は決して一様ではなく、たとえばガンジーさんのお祖父様がかつて英雄的な方法で実行されました非暴力的抵抗という方法もあるでしょう。たとえば経済的な生産が一つの平和に結びつく、あるいは新しい秩序に結びつく手段にもなるでしょう。もちろん、その他さまざまな生活場面でいくつもの方法・手段が私たちの前に開かれています。そうした手段を通して、私たちはこれからの世界の新しい平和と秩序に向けて、努力していかなければならないと考えます。

以上は私の個人的な要約ですが、これからもきょうのシンポジウムに出てきましたさまざま

な問題をそれぞれ私たちの方法で耕しながら、これから日本、アジア、あるいは世界が歩んでいく道を模索していきたいと思っています。

〈編者略歴〉

社団法人 国際 MRA 日本協会

MRA (Moral Re-Armament: 道徳再武装) は第2次大戦直前の1938年、「軍備ではなく道徳と精神の再武装」による世界平和の道を唱えたフランク・ブックマン博士の提唱で始まった。以来、異なる民族や宗教に共通する「正直」「純潔」「無私」「愛」というモラル(道義)を基盤に、家庭や社会や国際問題の解決に努力してきた。

日本においては、戦後の国際社会復帰や周辺諸国との和解に貢献した。同協会は、各国 MRA との協力のもと、各種国際会議や交流プログラムを通じた相互信頼作りを進めている。

連絡先: 〒113 東京都文京区千駄木4-13-4

☎(03)3821-3737

宗教が語る世界の平和

アジアから人類へのメッセージ

1992年6月5日 第1版第1刷発行

編 者	(社)国際MRA日本協会
発 行 者	江 口 克 彦
発 行 所	P H P 研 究 所
東 京 本 部	〒102 千代田区三番町3番地10 第一出版部 ☎03-3239-6221 普及一部 ☎03-3239-6233
京 都 本 部	〒601 京都市南区西九条北ノ内町11 ☎075-681-4481
印 刷 所	株式会社 精 興 社
製 本 所	株式会社 大 進 堂

© INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN

1992 Printed in Japan

落丁・乱丁本の場合はお取り替えいたします。

ISBN4-569-53643-3



9784569536439

ISBN4-569-53643-3

C0030 P1500E



1910030015006

PHP研究所

定価=1,500円(本体1,456円)

宗教が語る世界の平和

ONE THING IS CLEAR: MORALITY FOUNDED ON ABSOLUTE STANDARDS OF PURITY, UNDERSTANDING AND LOVE
HUMANELY BONDAGE WITH A GREAT POWER TO THE HIGHER SPIRIT OF CONSCIENCE IS THE ONLY INTEGRATED BASIS FOR WORKING
TOGETHER TO MEET THE NEEDS OF OUR TIME. IT IS THIS CONVICTION WHICH HAS BROUGHT US TO OUR HISTORICAL MEETING AND
IT IS OUR HOPE WE BELIEVE CAN ILLUMINE THE PATH AHEAD FOR ALL HUMANITY.

アジアから人類へのメッセージ



INTERNATIONAL MIRA ASSOCIATION OF JAPAN
(社)国際MIRA日本協会 編